略　妹様へ

斉藤さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
略　妹様へ

【Ｎコード】
Ｎ８５１５Ｘ

【作者名】
斉藤さん

【あらすじ】
妹を殺したい兄と、兄が大好きな妹の関係を書く物語です。

序章　昔語りの嫉妬

ああ、待っていたよといっても、僕のことなんて誰も知らないだろうね。

実はルーベス辺境伯なんて呼ばれる一族の僕は長男という奴だったんだ。英雄の血統なんて国からは呼ばれ、国境付近で帝国と睨みあいなんかしている軍事拠点の領主、しかもその後継者。

で在った筈だった。

自分で言うのもなんだが、僕には才能があった。凡百には劣らないだけの才能が、それもそのはずだ、剣聖と覇王なんて呼ばれた魔法使いの母から生まれたのだ。

その血は嘘をつかなかったのか、恵まれた才能を手にして僕は生まれ、その二人に恥じないようにと頑張っていた。

だがそうやって頑張っていたはずの僕は、辺境伯の後継者としての地位を追われることになる。四つ下の妹の所為で。

妹は俗に言われる天才だった、いやあれは天才なんてもんじゃない、父と母を超えた化け物だ。

妹は生まれて始めて持った剣で、僕を打倒し、魔力においても僕を超越し、技術を持って僕を隔絶した。たった五歳の子供に九歳の僕は容易く負けたのだ。

結果として与えられたのは、両親からすら無能、そもそも妹は僕のことを比べる対象にすらしていない。

凄まじいピエロだったよ、こっちは必死に追いつこうと努力していたんだからさ。

かくして辺境伯の後継者であった僕は、この家一番の出涸らしとなった。

妹はあらゆる意味で優秀だ、笑顔一つで人を引き連れ、勉学さえも簡単に吸収し、いつの間にかその分野を習熟している。

結果として残ったのは、僕と妹の絶望的無さだ。何一つ僕は妹に勝てなかった、努力した、寝る間さえないほどに僕は努力しても、何一つ妹には敵う事は無かった。

そしてとうとう、両親さえ邪魔になったのか、違う家に養子に出される始末だ。

そして公爵家の後継者だったはずの僕は、その下の下、男爵家の養子となったわけだ。

その際に言われた言葉も傑作だ、駄作よアイシャさえ居なければお前は立派な後継者だった、なんて実の父親に言われたぐらいだ。

流石に泣いた、ちなみに母親はただ薄く笑うだけで、何もいいやしない。この時流石に分かってしまった、当時まだ十二の僕だったが、自分はずいぶん前からのこの家に必要の無い存在だったと。

あの時は泣いたね、本当に泣いたさ、悔しくて、悔しくてさ、いやそれ以上に苦しくて、ひたすらに剣を振っていたよ。

長年やっていた習性だろうか、いや今になって分かるけど、努力って自分を裏切らないんだよ。たった一つ信用できたのが、あの時の自分には努力だって。

だいぶ正気じゃないよね。

けどさ、本当にあの当時信用できたのはそれだけだったんだ。それからさ、努力以外が信じられなくなってきたのは。

たださ、あの時実は一人だけ味方がいたんだよ。誰だと思う、誰だと思う、本当に笑えかぎりだどさ、たった一人だけ俺を庇った奴が居るんだよ。

いや失礼、ちょっと荒くなってしまったけど、お分かりかもしれないが妹だ。

あいつは能力はともかく精神はまだ餓鬼でさ、今考えてみればそれが付け入る好きだったのかもしれないけど、あの両親からずいぶん純白なものが生まれたと思うよ。

「お兄様、何でアイシャを置いてどっかいっちゃうの」

流石にその言葉を聴いたとき思ったさ、お前の所為だって、お前が優れすぎていたからだって、いやそれ以上に僕が無能だったというべきだろうか。

その時僕は何をしたと思う、傑作だよ、妹を殺そうとしたのさ。正直あの時は殺意しか無かったよ。

けどさ、自分の今までの全てを混めて妹を殺そうとしたのさ。

結果は最高だよ、笑えるぐらいに最高さ、妹はさ何事も無くよけて、俺の一撃で終了。

言った言葉も覚えてるさ、そんな不意打ちの訓練反則だよお兄様、だよ。努力しても届かない壁はさ、今でも覚えている僕の最高の攻撃を、はははは、訓練呼ばわりさ。

そしてあの当時の集大成を上回る一撃で気絶。

絶望すらわかなかったさ、そのおかげで一つの決意が出来たけどさ。別に妹が悪いわけじゃないが、殺してやるってさ、俺は妹を殺してやるって、絶対に殺すって、殺して、殺してやるって。

あいつだけは絶対に殺すって、当時十二歳だったか、そんな子供はそれしか考えられなくてさ、それから十年たったけどさ。知ってるか今のあいつ、もはや人間じゃないさ。
一人で一国を落とすだって、もうあれは人間じゃない。
僕もだいぶって言うか、軍隊ぐらいならどうにかできるさ、麗しの父と母に感謝だよまったく。

だからさ今も悩むんだ、どうやったら妹を殺せるって、どう考えても一方的な虐殺しかされない、どうやったて妹を殺したらいいって。
あいつは僕よりもあらゆる意味で勝っている、知恵でも策でも何でもかんでも、あれだけ勝てる要素が無いんだ、勝っている部分は間違いなくこの卑屈な性格さ。

あとは性格の暗さ、根性が腐ったところか、さて君にお願いというのはさほど難しいことじゃないさ、あの軍神相手に暗殺しろなんていうほど僕も無粋じゃない。
あれを殺せる唯一つの機会、建国祭の御前試合の権利を譲れって事さ、僕が選ばれないのあの軍神の兄だからってだけ、君よりは弱くないのさ。

だが僕は軍神ほどには強くない、だからとりあえずよこせ、俺が軍神を殺せる機会を、といってももう終わりだろうけどね。
お前はとっくに死んでるんだ、そういうわけで死んでもらったんだ、僕は妹を殺したい、あいつを殺せれば他はどうでもいい。

逆恨みも結構、殺したいほど妹を思っている兄だ。それぐらい許してくれてもいいだろう、命一つだ安くつくもんだ。

そしてごとりと地面に転がった体は、楽しげに血を噴出している

花火のようだった。

「王都御前試合出場権利もらったぞ、名前はなんだったか」

ここに一人の天才剣士の命が尽きた。

いつ剣を放ったかすら分からないその妙技に、もしかすると死体は歓喜していたかもしれない。

その男は何を突き詰め続けたのか、殺意という目標を消すこともなく、どの境地まで突き詰めたのか。

死んだはずの死体はまだそこに意識があるかのように一言だけ叫んだ。それがきっと剣士の最後の意地であったのだろう、死んだ体から声が放たれる。

「見事」

流石に驚いた彼は死体であるはずのそれが叫んだのだ。流石に動揺したのか、死体から取り出した参加権利である短刀を地面に転がしてしまう。

何より自分に与えられた賞賛に、目を丸くしてしまう。

誰一人認められもしなかった、その妹という太陽に隠れた夜空の星に、歓喜の声が響いたのだ。

今までとは違う浮ついたはずの笑顔が消え、優しくほころんだ表情を見せたそれは自然と自分勝手に殺した死体に頭を下げた。

「父からは駄作と、母からは無関心を、妹からは敬愛を、尋常の勝負じゃなかったけれど名乗りぐらい加えるべきだったよ。妹以外考えてなかったからさ、男爵家は父の所為で潰れて家名はないが、センセイだよ僕の名前はセンセイだ」

それだけ言うと彼はきびすを返して目的地に向かう。
優れた剣士で、自分よりも素晴らしい人物だったのだろう、だが殺した、不意打ちで、本来なら自分と互角以上の人物だったのかもしれないと。

だが殺した、心臓に棘が刺さったように胸が痛くなりながら、殺したと、何度も心に呟く。

そしてあの麗しの家族を殺すと、愛しい家族よと、待っていてくれ、きっと殺すと、必ず殺すと、それが、それだけが、彼にとっての愛情表現だ。

これより始まる王都御前試合、

軍神　アイシャ　　不敗　ロード
剣聖　グランツウォード　惨敗　センセイ
覇王　レイリアレール　　王道　ラストール
無双　ザインザイツ　　神童　ヒルメスカ

より始まる戦いは、王国史上最悪の結末を迎える。

死者五百三十五名、行方不明者千五百六十二名、重傷者三千五百名、軽傷者六千五百名、後に王国滅亡の遠因となる試合。

その始まりは剣聖の死亡からであった。

あとがき
才能があっても、もっとすごい才能に潰されるって興奮する。

序章　昔語りの嫉妬（後書き）

ただし気が向いたら。

一章　御前試合前夜

その日は王国の建国祭の始まりだった。
北方の軍神が一つの国を落としさらに国力をつけた国は、いつにもましてお祭りムードという奴だっただろう。
国民の喜ぶ声がやけに響いていた、そんな楽しげな空気の中、ひねくれた男はおいしそうに鳥のから揚げを頬張っていた。
軽く塩コショウで味付けされたそれは、出来立てと言う事もあり、噛めば肉汁が舌を焼くように溢れて来ている。それがさらに食欲をそそりもう一口といった具合に手が伸びでしまうが、主題はそこじゃない。

御前試合に登場するはずだ在った剣士の一人、魔剣と呼ばれた剣士が殺されたという情報がようやく王国の責任者の元に届いたのだ。
そしてそんな天才を殺したのが、ある理由から没落してしまった男爵家の養子であり跡取りとなっていたセンセイという名の息子である言う話だ。没落して以来行方をくらませていたと言う事だったが、こうやって御前試合に現れ、魔剣を召集した貴族の面子を潰したのだから、上へ下へと大騒ぎだ。

だがその生まれを知っているものが、不用意に騒がれることを拒みそれを黙殺したのっだが、結果として今国の上層部では少しばかり、暗い空気が流れていた。
そんな不穏な空気の中、一人だけ人物の名前を聞いたとき喜んだのが、軍神と呼ばれる少女であった。

「ねぇ、お父様、お兄様が帰ってって本当なの」

花香る風をまとって少女は飛び跳ねながら自分の倍は在ろうかという父の背中に飛び乗る。軽い跳躍ながらその重力を感じさせない動き一つ一つに、国を滅ぼしたという才能を片鱗を見せ付ける。
見た目どおりの頑強な体つきをして居いる、剣聖は軽い衝撃を感じつつも、柔らかな愛娘の幼い行動をとがめるのを一瞬忘れてしまう。どれだけ血に濡れても白いその心に、剣聖はひどく心が休まるのだ。

だが逆に駄作としか思っていない息子には、この大切な娘を近づけたくなかった。
傍から見ればあの息子は、嫉妬の塊で酷く汚らしく、娘の美しさが穢れるとしか思えなかった。
つねに下から妬み上げる様に、汚らしいその嫉妬の感情が、娘との対比でいっそう汚く写ってしまう。

それは娘の才能が凄まじすぎた事と言うのもそうだろう。なまじ息子も間違いなく自分に並ぶほどの才を持っていたのも事実だった。
だがいま自分の背中に、ぶら下がっている娘の為なら、あの程度の才は捨てられたのだ。一娘に牙を剥くか分からない才など不要でしかなかった。

「そうだな、あの馬鹿者が帰ってきた」
「お兄様、強くなったんだね。だって御前試合に出られるんだもん、弱かったお兄様が強くなったら、また一緒に暮らせるのかな」

楽しげに利いてくる娘の言葉に、父親としては酷く同情してしまう部分もある。
本来であればあの息子にだって、天才という言葉が与えられてもおかしくは無かったのだ。ただ背中の真の天才が、いたからこそ彼は無能扱いされた。

彼を男爵家に養子に出したのも、そういう視線を避けようと父親なりの努力でもあった。九割は娘に対して危害を与えないようにではあるが、一割は実は父親の優しさではあったのだ。

最もその男爵家は父親である自分が没落させてしまったのだから、恨まれていても仕方が無いと思っている。

しかしそれだけでここまでやるとは思っていなかった、出来るだけ早めに潰しておこうと、自分を最初の対戦相手にあてがったりと、娘を守る為に必死になっていた。

「そうだといいが、あいつには才能なんて無い。卑怯な手管でも使ったのだろう、そういう者は我が家に不要だ」

「えー」

必死になって戦って勝利してその権限を得たのかもしれないと言うのに、父親としてそれを認めることは無いのだろう。

認めてしまえば、あの視線が娘に刺さる。あの嫉妬しかない瞳が、彼の愛した娘を汚しかねないと、その天使を穢れさせるものかと牙を剥く。単純な話なのだ、彼は娘のほうが大切で息子はどうでもいい。

娘という魅力ではない、とうにその娘の純潔を奪ったような父親だ。

すでに女としてしか見ていないのだろう。それを奪われるというただの嫉妬だ、ましてや彼女は兄に対して無償の信頼を寄せている。

それが酷く剣聖の嫉妬に火をつける、だからこそ男爵家は潰されたのだ。

この男は所詮は小人であって、娘を女としか見ていなかった。いやそのあまりの穢れの無さに、魅了されたといったほうが外れでは

ないかも知れない。
だからこその内に隠すべき感情があふれてしまう。
見苦しいまでの男の嫉妬、そうなのだ、この男もまた嫉妬というそれに気が狂っている。

きっと二人が会えば思うのだろう、流石は家族揃いも揃って、ことごとく破滅しているように似ていると、それは殺しあう理由にしかならないが、これから一日たてば嫌でもそうなるのだ、ちょうどいいタイミングの親子喧嘩だ。
同族嫌悪なんて人類の戦争の理由の筆頭だ、背中にぶら下がる娘を胸に抱く。

「ほえ」

いきなりのことに驚いたのか、目を丸くして間抜けな声を上げる。
話すものかと男は心に誓った、妻などどうでもいいのだ。彼が大切なのはこの娘だけ、自分よりもはるかに強い最強。
その彼女をとられることのみに恐怖するのだ。

父親に抱きしめられて少し顔を赤らめながらも、まだ夜じゃないよと笑って頭をなでるその姿は、娼婦のようですらあるというのに、穢れのないその言葉は誰にでも股を開く麗しの聖女だろうか。
ただ知らない少女はそれすらも受け入れるだけだ、きっと彼はこういう部分すら息子に見られたと思っているのだろう。

ああ憎いと、そう思い続けているのだろう。
偉大なる護国の剣聖は自分の娘に惚れて関係に及ぶだけじゃない。息子に嫉妬して追い出した、醜い、自分はなんて醜いのだと、その事実を消す為だけに息子を捨てたのだ。
そう汚いのはどちらだ、嫉妬に狂って妹を殺そうとする兄か、そ

れとも娘の体に溺れた父か、その二人はまるで鏡のようだ。

まったく同じの正反対、合わせ鏡にして同じような人間を大量生産したらどうだ。

勝手に自分達で殺しあってくれるだろう。同族嫌悪の吐き気のする集大成がこの二人とも言えるかもしれない。

この場で美しく綺麗なままなのは、父親を優しく抱きかかえながら、兄のことをただ慕い、父親を娼婦のように、聖女のように誘う、アイシャと言う軍神だけだ。

原因はすべての美しい少女という形をした軍神、だがその周りから湧き出るのは嫉妬ばかりだという、さて本当に汚いのはどちらなのだろうか？

だが彼女の兄なら言ってくれるだろう。

「全て」だと。

場面は流れるように代わり、食事が終わった彼は堂々と御前試合の参加賞を見せ付けて王城の参加者の部屋に寝転がっていた。

かなりの人間から奇異の視線で見られるが仕方の無いことだろう。

何しろ北方の貴族にしか見られない灰色の髪だ。そんな髪をしているものは、軍神と剣聖ぐらい、だからだろう知っているものは驚いてしまう。

彼は一体誰なのかと、家名もないどこかの腕自慢、たぶん北方の蛮族の出なのだろうと推察されるぐらいだろうか。元々英雄の血統とはそちら側の血を引いている者達の中でも力の優れているものに与えられる名称だった。

それが彼より十六代前に、蛮族との融和政策があったり戦争があ

ったりしたときに活躍したのが、灰色狼と呼ばれる彼のご先祖様だった。

あまり王都の方では見ることは無く、大公である剣聖とその家族ぐらいというのがこの国では当たり前の考え方なのだ。灰色の髪は北方の貴族というのはそれぐらい常識的なことではあったが、流石にそれは無いと誰もが首を振る辺り。

剣聖の長男というのはよっぽど秘匿とされているのだろう。

だからこそ彼は余計に嫉妬に狂ってしまう。

何で、何で妹だけと、溢れるからだの熱は、ただの妹への嫉妬だ。あの綺麗な妹に対する、自分の醜さを見せ付けるあの妹の所為だ。

あの妹は無垢だ、真っ白の何一つ汚れること無い白、だからこそ綺麗過ぎる。無垢は優しさではない、純粋は優しさではないのだ。

優しさと自分がそうされたいという欲望の反映。打算的な代物に過ぎない、自分が下からされる、金銭の取引となんら代わりは無い。

だがそれでもそういったものが優しさでも、純粋無垢よりはましだ。

あれは綺麗なんじゃない、自分達が汚いことを見せ付けるのだ。だからこそ彼は憎いのだ、全てを持っていて、挙句に美しい。

感情が殺意のように荒れ狂う、これから始まるその戦いの為の原動力が、ただその身を焦がすような嫉妬が、軋む心を立ち直らせる。

「足掻くんだ、やっと機会が出来た、これっきりなんだ」

体中が震える、今から行うのは敵う筈の無い戦いだ。

だがそれで抗うことを止められない、男は足掻くしかない。体中を震わせながら、剣を握った。

そうして室内の中で軽く振り回す、たった一つ彼を裏切らなかった努力の結晶だ。だがその全霊を尽くしても彼はきっと勝てない。

「これっきりなんだ」

絶対に、どれだけの力を尽くしても妹とでは才能の桁が違う。だが負けるつもりで彼はここにはいない、抗うのだ必死に彼はそれしか出来ないから。

嫉妬なんて本来悪い感情ではない、醜い訳でもない、当たり前のものだ。当然の代物なのだ、隠す隠さないはあったとしても、それは運命に唾を吐くように当たり前の行為。

ただその感情を扱う人が悪いだけに過ぎない。

それを彼は穢れだと思ってしまう、綺麗なものを見続けたから、美しいそれを見続けたから、完全完璧を見てしまったから。

この世の穢れを受け持ったとでも言うように、彼はただ嫉妬で妹を殺す。

「この世に完全な物なんて無いって証明してやる」

絶対に負けるであろう今からの戦いを超えるために。

一章　御前試合前夜（後書き）

すでに狂った人間しか居ない気がする。

二章　白刃すらまだ遠く

酷く体が火照ってしまう。それはきっと寝る前に軽く振るった剣が、まだ足りないと騒いでいるかのようだった。

その剣のみだらな誘いに、自分の体から溢れる火照りを覚まそうと、侍女に話を聞いて訓練所に向かったセンセイだが、先客が居たのか、やけに騒がしい。

明日のためにと体を休めているものの法が本来なら多いはずと考えていたが、物好きはどこにでも居るようだ。

そんな風に考えて笑みをこぼした。

だがそんな物好き、普通ならいやしないということに彼は気付くべきだった。彼と同じぐらいまともじゃない人物なんて、たった一人だけなのだ。

「やっぱり、お兄様だー」

妹、それぐらいなのだ、これからを考えれば、その程度が支障にならないものなんて、目の前の軍神ぐらいだ。間違いなくこの御前試合の勝者となる少女、油断があろうとただ勝利をつかむ化け物。

純粋無垢を極めたようなそれは、久しぶりに会う兄にまで、輝くような笑顔を見せる。

彼はその表情を見るたびに、劣等感に苛まれ、何も喋れなくなる。その対比にさらに彼は嫉妬心をあおられるというのに、彼女の笑顔には何一つかげりが無い。

だから自分が醜いと植え付けられる。

「お久しぶりですお兄様、アイシャは元気でした。お兄様はどうでした」

そして彼にささげる純粋な好意、打算すらないその信頼だけを固めたようなそれは、完全に彼が妹に抱く感情の反対であった。

なんとぶざまな様だろう、妹を殺すと息巻いて、この男が出来るのは、圧倒的なそれに何一つ出来ないのだ。見苦しく妹の美しさに嫉妬して、罵倒の声すら上げられない。完ぺきなそれは、彼という存在を居るだけで痛めつける。

「げ、っげん、元気だったよアイシャ、ひ、ひさ、ひさし、ぶりだね。お前に会いたくて、会いたくてさ」

殺したくてさ。

言えなかった、そういえばきっと妹は、悲壮な顔を彼に見せてくれるというのに、その太陽に陰りを入れる事だって可能だったはずなのに、そんな裏のあった筈の言葉に、光るように笑顔になる妹は、彼に抱きついてきた。

兄の優しい言葉に、子供のようなはしゃぎ様だ。

それが本来なら人を魅了する力になるのだろうが、その目の前の男には猛毒だ。なぜ違うと、なぜこんなに自分とこいつは違うんだと、泣き叫びそうになる。

同じ種と腹から生まれた二人のはずなのに、二人はあまりに対極過ぎた。優れた、いやはっきりというなら、その汚濁のような心と無垢な心、その差は一体どこにあったと。

認めてくれといって変わるようなものじゃない、彼女のうちから湧き出るその美しさと、自分の醜さの差は一体なんだと、何度叫んでも足りないほど彼は心で叫んだ。

戦うまでも無く心を折られたセンセイは、感情を振り乱し泣き叫ぶ、心が抉れても、笑顔のまま歯を食いしばる。

「アイシャも会いたかったんだよ。ただよく分からないけどお父様が会わせてくれなかったし、すごく寂しかったけれど、お兄様もそうだったんだよね」

「ああ、じゃなかったらあんなことしないさ」

ただ言葉に出来ないのだ、この妹の前だと、心では違うというのに、純粋無垢なそれを汚すなと頭が命令でもしているように、彼は何一ついえない。

ただ妹の言葉に喜ぶような言葉をオウム返しするだけ、それはきっと今まで刷り込まれた何かだ。

彼はうけたことがないのだ、ただ純粋な好意は、彼女以外では向けられたことすら少ない。

「傑作だよ」

ポツリと呟いた言葉に彼の全てが混じっている。

本当に自分は嫉妬だけだったと、そこにある太陽は、自分の影さえ埋める。もし彼に見方が居るのならきっとそれは妹なのだ。

彼の言葉に首を傾げて見せるが、ああなんて綺麗で綺麗なんだ。

優しく頭をなでてみるが、心には嫌悪感しかないというのに、顔は優しく笑っているようだ。これは呪いの様だ、何一つ自分の行動がうまくいかない、そんなのあたりまえだ、世界は彼女を中心に回っているようなものだ。

その辺の路傍の石が、自己を主張したところでその程度、汚濁はただ粛々とその太陽に焼かれて燃え尽きればいい。

「わかってたけど、お兄様も珍しいよね。普通はこんな時間に、しかも御前試合だっていうのに、訓練所なんて」
「気がはやって、少し剣でも振って心を落ち着かせようかなってさ」

擬態である言葉遣いはもはや彼女の為だけにある。
父親を前にすればたやすく裏返るはずのそれは、一向に脱げる機械は無い。それどころかそれが当たり前にすら変わりそうであった。

「私はね、お兄様に会えそうだったからなんだ。だってお兄様はいつだって素振りばっかりしてたから、絶対にここに来ると思って」

だからであった時はやっぱりだったのかと彼は思う。
あの頃から自分の根幹は何一つ変わらず、妹に読まれていることを再確認して、体が震えた。
多分だが彼はあまりに妹を神聖視しているのだろう、だからこそ自分の行為を読まれるたびに、心が冷えて泣き叫びそうになる。だが彼は病的なまでに昔から、手に持っている剣を振り続けたのだ。

彼に近しく、その行為を見た人間ならある程度は予想がつくはずなのに。
そんな事実さえも見えなくなるほど、彼女に押しつぶされていた。

「それで、お兄様がどれだけ強くなったか、私が試してあげようと思うのです」

訓練所にある当たり前の刃引きした剣、身長が低く小柄なアイシャにとっては、それさえ体には余るはずなのだが、剣に羽でも生えたかのように、軽々しく扱っている。
彼はかつて見慣れた光景ながら、喉から呼吸の機能が失われた。
心臓さえ動いているのか分からなかった、恐かったのだひたすらに、

それこそ今までの彼女に対して行った行為のすべてを超えて。

蛇に睨まれた蛙しかなかったのだ。

震える、ガタガタと体が震えて、何一つ殺意を向けられない。

なんと、なんと、なんとまあ。

そこには魔剣を殺した時の余裕すらもない。その威厳のかけらすらも見ることなく彼は心を折られている。震えるだけ、また容易く絶望させられる、だが震えながらも武器を手にすることだけはできった。

この努力に付き添った剣だけは、彼が彼を裏切っても裏切らなかった。

だがそれまでだ、折れた心のまま構えて武器を振るう。それが本来の彼の力を発揮させるはずも無い。

「駄目だよお兄様、そんな構えじゃ弱いままだから」

ぶるんと、ただ剣を一度振って、空気を裁断する。

あどけないはずのその一振りは、ただ彼と彼女の差を如実にあらわし、果てすら遠いそれをただまざまざと見せ付ける。

才能が無ければ、きっと彼は蛮勇で死ねた、なまじ中途半端に才があるからこそ、差を見切って絶望する。

何一つ彼にプラスになることはない。

「ちゃんとお兄様を見せてよ」

その恐怖の呪縛を断ち切る事すら出来ないまま、ただ呻き声を上

げるように理合いもなく彼は武器を振るった。それは妹に促されたから、呪縛じゃない呪いに縛られたままなのだ。
そんな攻撃は意味も無く容易く、彼女にはじき返される。

裏切らない剣を裏切った男は、地面に最愛を転がし、ただ音を残響させる。流石に兄のその姿に落胆したのか、明るい顔に陰りが出ているが、ようやく彼が望んだ表情だったのかもしれない。
ただ呆然と立ち尽くす彼は、何一ついえない。ただあまりにもぶざまな自分に嘆くだけだ。

「いじわる、秘密なんて家族にしちゃいけないんだよお兄様」

しかし言葉を返せるわけも無く、ただ響いた言葉が絶望に変わる。
彼女はプラスのほうに考えたのだろうが、今の彼の全身全霊だった。心神喪失状態ではあったが、それでも恐怖に促された男の必死ではあったのだ。
もし立場が逆でもそうなったと言い切れても、じゃあお休みなさいと、訓練所から消える妹に、ただああと返して。

そこでようやく涙が溢れた。

「あれは、なんなんだよ俺」

なんなんだと、ただであっただけで心を折られ、無様を繰り広げただけ。
何一つ出来ずに、ただ怯えて自爆して剣を裏切った、裏切らないそれを自分が裏切ったのだ。

「口だけじゃないか、何一つ、何一つ」

殺したい妹のご機嫌伺いに、上っ面だけの家族の団欒。ただ妹の為だけに、自分は一体何をしているのかと、言っても届かない。
剣を拾い上げ、剣を振る、ただ涙を流して、妹に負けたあとはいつもこうだったと、それに意味が無いのかもしれないと思いながらも。

「何も出来なかった」

握る手が強くなる、だが彼はまだ何一つ変わっていない。
それを超えなければ彼に勝ち目などあるはずが無いのだ。刷り込まれた心さえも踏み越えなければ。

「何も、これじゃあペテン師のやり口だ」

所詮それは口先だけの男の戯言に過ぎない。
今彼はそういう男だ、格好をつけるだけつけて、標的に会えば怯えてただの人形と化す、言葉の重みも価値もない。
彼が殺した男の価値さえ下がってしまう。

地面に溢れる涙は、悔しさからいつの間にか謝罪に変わっていた。ぽつりぽつりと、謝罪がつむがれ始めていた。ただ素振りを続けながら、ごめんなさいという声が響いていた、こんな無様な男に殺されて、口だけの男に殺されて。

「ごめんなさい、認めてくれたって言うのに」

頑張って見せますから、頑張って頑張りますからと、彼は必死になって叫んでいた。
どんなに折れても惨めでも、諦める事だけは決してしませんと、もっと無様なことがある、もっとマシになってみせる。

「あなた達を殺した男は劣らないと言わせるようになりますから」

だから見ていてくれと、殺した人々にそう願う。

人殺しが独善的に呟くのだ。それはもしかしたら自分を救う為の逃げの言葉なのかもしれない。同時にそれ以外の別の言葉なのかもしれない。

だが彼は必死であったのは間違いない、殺した命を背負うことが出来る人間はそうは居ない。だがそれを背負う為に努力していた、どれだけ無様で惨めであっても、死体をあさる様に似ていたとしても。

「頑張りますから」

間違いなく、諦めようとはしなかった。どれだけ吐き気がするほど無様なその性根であったとしても。

決意の意味さえ分かっていない、ただ諦めない習性を持つだけの人間は、何度もそう呟く、頑張りますからと、諦めませんからと、それだけを生きる糧にしているように。

「絶対にあいつを殺しますから」

勝てもしないその心の弱さで、一体何が出来るというのか、だが床にこぼれた涙はいつしか乾き、剣の音は一層力強いものに変わる。

それが彼が出来るただ一つの方法で、それ以外何一つ思いつかなかった彼の謝罪の仕方なのだ。諦めずにただ武器を振るう、もう父親との戦いが迫っているというのに。

だが間違いなく、それが始まる前に、諦めることなく立ち上がることだけは出来たという証明になった。

二章　白刃すらまだ遠く（後書き）

一章で、でかい事といった主人公の心をすかさず折る。なんかこう惨めだと楽しくなってくるよね。

三章　前夜もう一つの決意

お兄様に会ってきましたと、アイシャはそう楽しげに父に向かって答えた。

その時薄らぼんやりと浮かんだ父の憤怒を彼女は見逃したようだが、彼女はその詳細を楽しげに父親に告げる。

かわいらしくただ、お兄様が意地悪だったとか、私に会いたくて着たとか、そんな聞きたくも無い言葉を聴かされて、内に酷い嫉妬が混じる。本当なら娘の口から他の男の言葉すら聴きたくない父親は、自分の浅ましさの責任を息子に押し付けながら、必死に表情に悪意を見せない。

自分の悪ですら彼女をけがしたくないと必死なのだろう。

すでに娘と関係すら持った男が、いまさら何を汚さないと言うのか追及してやりたいところだが、彼にとっては当然の事に過ぎない。

ただ羨ましいのだ、無償の優しさを受け取る男が、ただ純粋無垢な愛情を与えられる男が、それは自分だけでいいのだと彼はそう思う。

五十を超えた男の発想かと、自信姿酷く無様に思いながらも、その考えを捨て去ることは永遠に出来ないのだろう。彼もまた彼女を偏愛し、敬愛し、何よりただ愛している。

自分の娘をただ彼は愛してしまっている。誰に取られたくないからと、関係を持って自分のものにし、それでも何の陰りも見せない娘に、彼はただ愛情を傾けることしか出来なかった。

こうやって彼女に無償の好意を向けられる男はそう多くはない。

純粋無垢の愛情を与えられるものなど、ただ彼女に屈服する機能しか誰も持たなくなるだろうと思うほどに、目の前の少女がただ全

てが美しかった。
そんな愛情を向けられることすら殺しても殺したり無いというのに、センセイはそれが許せないのだ。その無様な才能と感情が、彼女に何一つ届かないというのに浮かぶ、光の中の醜い影。
光を妬むただの悪意。

そんな悪意が彼女と出会ってみれば何も出来なかったという。
分かりきっていたことだが、ただ絶望したのだろうと、ひたすらに彼女を見て食いつぶされたのだろうと。
父親は全てを見通したように確信する。そして無様に今も剣を振るっていることだろう、あの駄作はその辺りまで何一つ変わっていないと。

悪意は才能はあっても、心が破滅的に弱い、と言うよりも目の前に居る可憐な娘に対して、何も出来なくなるのだ。
そう刻み付けたのは、母の呪いであるのだが、あの破滅の魔女のずいぶんと粋な事をすると、妻であるそれに彼は賞賛さえ送ってしまう。娘の才に気付いた時点で、障害となる息子を完全に潰そうとした母。

呪いのように妹の前で何も出来なくなった理由はそれが一因ではあるのだろう。
そうやって刻まれた心の弱さが、さらに彼を追い詰めているのだろう。目の前ではしゃいで兄の報告をする娘の姿が、その無様な兄の報告ばかりで、流石は駄作と褒め称えたくなるほど哀れだった。
「ただお兄様、私の見た感じだと、お父様より強いよ」
不意打ちとばかりに伝えられた言葉に、流石の父も目を剥いた。
彼女の見立てが外れるはずが無い、自分と並ぶ雅語と記載を持っ

ていることは知っているが、彼は負けるなどと考えたことも無かった。
そんな余裕すらあったと言うのに、娘は容赦なく事実を告げた。
「だってお兄様、手加減してるはずなのに、次の太刀がきてたら私は間違いなく怪我したもん」
彼とて娘に一太刀入れることすら出来ないと言うのに、悪意はそこまで踏み込んでいると言う事実が、父親である彼には有り得ぬ話と言い切りたい代物であった。
だが娘は間違えない、彼女が言うのなら間違いなくそれは達成された代物だ。心の呪いさえも引きちぎり、彼はその場に立てると言う可能性を見せ付けていたのだ。なんと言うことだと、初めて息子に対して嫉妬以外の気持ちが湧き立つ。
尊敬ですらない、ただの恐怖だ、汚濁が娘を怪我す可能性が出てきたと、いかめしい顔が青くなって、普段なら見せない狼狽を明らかにしていた。
そんな尋常ではない父親の姿に首を傾げて見せるバンビの仕草は、可愛くはあっても流石に父親の同様を消せるほどではない。彼女は国を落とす時ですら、傷一つ無かったような存在なのだ。
それはもはや彼にとっては神の冒涜に近い。
「それは本当なのか」
「うん、お兄様絶対に強くなってるよ。本当に、私にあいに来てくれたんだと思うと、凄くうれしいんだ」
駄作が、駄作がと、怨念のように喚き立てる心など彼女は知らないだろう。

殺してやると言う感情が悲鳴のように心の中に沸き立っている。男の嫉妬の見苦しさは、彼といい父親といい何ぼと変わらない。

ともども無様だ。

「そうか、そうなのか、あいつも頑張っていたのだな」

言葉との表裏を見れば、父親としての顔すら分からないだろう。彼女の前では絶対に見せないと決めたその悪意は、光のような彼女の前だからこそ逆に、極色彩に塗装され尽くして、彼の内側が明け透けに見えてしまう様にさえ思える。

太陽が影が見えないように、彼女にはきっとその色は見えないのだろう。人の心のうちにあるその汚濁を、ただ彼女が人を怪我すように、楽しげに何度も兄のことを父に話していた。

「そうなんだよ、だから一緒に暮らせるようになるよ。また家族四人で」

「駄目だよ、それは駄目なんだ、あやつはすでに男爵家の人間、没落したとはいえそこの当主なのだよ、家を持った男が、実家に戻るなんていうのは、お前の兄上を侮辱しているような行為だよ」

あれと暮らす、考えるだけで気が狂いそうになる。

少しばかり彼女をとがめるようにじっと目を合わせて、そのたびに内に燻る嫌でも分かる嫉妬を必死に隠そうと足掻いている。

目の前に息子がいようものなら間違いなく、鼻で笑うような隠し方だろうが、この大事な人を盗られてなるものかと、男は無様に否定を繰り返していた。

「え、そうなの、そうだよね、お兄様も家を受け継ぐような人になったんだ。そうかそれでこの御前試合で力を見せ付けて、お家の復

興を考えているんだ」
「そうかも知れんな」

たしかにここで自分を倒しでもすれば間違いなく、男爵家は復興できるだけの名誉を得ることは出来るだろう。
むしろそれが目的であれば逆に、こんな気持ちを彼が抱くことも無かっただろう。
凄い頑張りやさんだお兄様はと驚いた表情を向けて、そんな事を彼女が言うたびにこの男は胸が締め付けられるようだった。

何でそうやってあれを褒めると、お前が口にしていいのは私だけの筈だ。
心の中で何度そう悲鳴を上げているのだろう。それを表に出さない態度は以上とも思えるほどだ。

「じゃあお父様も頑張らないと、十分に休息をとって、お兄様を負かす気で行かないと、男爵家の復活も無いんだよね」

明日殺すと断言している息子の為に、十分に休息をとる。確かに理にかなっていると言いたいが、彼は震えていた彼女の言葉に。
自分はあの男に負けるかもしれないと言う事実を口にした娘の言葉に。あれに家族に対する慈悲は無い、明確に殺しに掛かることぐらい理解していた。
そうなれば目の前の娘の甘やかな体に触れる事すら出来なくなるかもしれない。そう思うと気付いた時には彼女の体を抱きしめていた。

「止めておけ、そういう事は、あまり言うものじゃない」
「んーけど今日は駄目だよ。そういう気分じゃないもん、なんかお兄様にあって体が暖か、ん？んーん」

喋らすものかと唇をふさぐ、あれの言葉なんて聴きたくないのだ彼女の口から。
困ったように声を上げる彼女の声を聞いても止めることにしか必死になれなかった。まるで白い着物に墨汁をたらすような様相、手の平の窪みから甘い痛みがこぼれて足の先に伝わるような、酷く緊迫した線のような快楽が痺れを持って伝わってくる。

くるしーと言っているのだろう、彼女の視線を見ても、今だけは彼女の瞳には自分しかいないと思うと、年甲斐も無く胸が勝手に呼吸しているような温かさを感じてしまっていた。
大切なのはお前だけなのだと、彼は心で叫ぶ、お前以外は必要ないのだと、彼は心で叫ぶ、口に出来ないその言葉を彼は叫び続けていた。

それを口にすればきっと彼と彼女は終わるだろう。元々が終わり果てたような関係だ、簡単に破滅してくれるのだろうが、だからこそここまでしておきながら、娘を愛した父親は、その最後の一線を越えられない。
娘を抱いた男はそこまでしても言葉だけは使えなかった。
それは世間体などではない、それを言えばきっと彼女が穢れるから、自分が大切に思い続けた少女が汚れてしまう。

その太陽のように笑う笑顔を陰らせてしまう。
彼はそれが恐くて仕方が無かった、こうやって口をふさいでいる自分さえも、本来であれば、自分で無ければその場で斬り捨てるほどに醜悪な行為。
困ったような顔をしながらでも彼女はこの行為を受け入れる。これも家族のスキンシップだと思っているのかもしれない。

何も知らないような聖女は、ただ笑顔で何もかもを受け入れる。
彼はそんな彼女を優しく抱きとめながら、彼女が腕の中で身を捩っている、少し窮屈なのだろう、まだ生まれて数ヶ月のまるで綿毛のような子猫が身を捩る姿にも似ていた。
強く力を入れるだけで、くしゃりと潰れそうな彼女の形はやわらかいけれどしっかりしていた。

離してたまるかと、娘を強く抱きしめる。大切な人を彼は守ろうと、傷一つ着けてなるものかと決意する、それが息子だろうと世界だろうときっと代わらない決意になるのだろう。

そんな決意を彼女は知らない、そもそも彼女はきっとそんなことすら軽く踏破してしまうだろう。それでも彼は守りたいのだ彼女を、必死に必死に、ただ愛した人を、その思いはきっと彼女と同じぐらいに美しい思いだろうけれど。

それが人を救う言葉ではない。所詮それはただの宝石と同じ、実が伴わなければ意味が無い話。

「お父様、これでお預けです。ちゃんと体を休めて頑張らないと、本当にお兄様に殺されちゃうかもしれまん。気の緩みは命を奪いかねないんですから」

彼はそれを用意できるわけもない、もうこの結末は明確に決まっているのだ。軍神に傷をつけることの出来る可能性のある男と、不可能な男、その差は間違いなく如実に現れる。純粋な実力の差と言う現実が、彼には待ち受けているのだ。

その思いが息子を殺すことが出来るのかは、それこそ神のみぞ知るという奴だろう。

「大丈夫だ、あやつに負けるつもりなどさらさらないのでな」

そういって娘の頭をなでると、まだ冷めぬ自分の興奮をゆっくりと娘の笑顔で冷ます。

負けぬと、あれを殺して大切なものを守ると、震えだした体を必死に抑えながら彼は、その決意を新たにし、娘の甘い体を思い出して心を休めてようやく彼は、完全に眠ることが出来た。

三章　前夜もう一つの決意（後書き）

なんかおっさんの純愛を必死に書き続けただけっぽい気がする。

外伝　日記

届かない、何一つ届かなかった。
生まれて初めて妹と簡単な剣の稽古ををしたのだけれど、僕は何一つ出来なかった。
簡単に剣をはじかれてお終わり、悔しくて涙が止まらなかった。

お父さん達は妹を褒めて、僕には何も言わなかったけれど、きっとすごく失望させたんだと思う。
ごめんなさい、初めて剣を持った妹に負けて本当にごめんなさい。
妹にも今度からは負けないように頑張る家から、いっぱい頑張るから、少し僕のほうを向いてください。

パラ、パラと、誰かが日記を見ていた。一日おきに、一月飛ばしてみたりと、少し悲しげな視線をしながらその日記をめくっていた。
そんなにもその日記の持ち主がかわいそうなのか、内容がどんなものなのか。

また妹に負けました、悔しいけれど妹が強いことは、兄としてとても誇らしいと思います。
けどお兄ちゃんは妹を守れるぐらい強くないといけないので、もっと頑張って練習しようと思います。
最近はお父さんも剣を教えてくれなくなって、お母さんも魔法を教えてくれなくなりました。

妹ばっかりに教えています。けれど当然のことです、妹はまだちゃんと剣使ったことっが無いので、ちゃんと教育をしてあげないとどこかで怪我をしてしまうかもしれません。
そういうことをちゃんとお兄ちゃんとして教えてあげようと思い

ます。必要ないかもしれないけれど、妹はそうやって周りの人にそういう事を教えていける人になると思うからです。

ずいぶんと優しい言葉で書かれていました。

その少年は結構まめな正確だったのでしょうか、ほとんど欠かさず毎日のように、日記を書いていました。

内容は妹と家族のことばかり、妹に負けたとか、妹はとても優秀だとか、自分はもっと頑張らないととか、お父さんともう一月以上会話をしていないとか、っそういう事ばかりが書かれていました。

その日記を見ている私はどう思ったのか一度、パタンと日記を閉じました。

そしてなんとなく適当なところでまた日記を開きます。

今日お父さんに剣の筋がいいと褒められました。

流石は俺の息子だって、持ち上げてくれて振り回されました。ちょっと目が回ったけれど、僕はお父さんの子供なのでとても誇らしかったです。

お母さんが教えてくれた魔法も、もっと頑張ってお母さんが喜ぶ姿をもっと見たいと思います。

今はお、僕の妹が小さいので我がままを言って邪魔をしてはいけませんが、妹も守れるおにいちゃんになろうと考えていっぱい頑張ります。

それはまだ妹が生まれる前の日記でした。ずいぶんと早熟な子だったらしく、だいぶ早くから日記を書いていたようですが、これも彼が非凡であったことの証明なのでしょう。

その手紙にはこれからの日々に対する希望が書き連ねてありました。

妹を守るとか、父や母などと、これから数年またげば、全てなかった事にされるというのに、それでも頑張ろう頑張ろうと日記に書き続けた少年は、ある意味では誰よりもまともではなかったのかもしれません。

けれど幼い少年の心からの決意だったのでしょう。

みんなの為に頑張ろうと、僕が妹を守るんだと、なんとも素敵な言葉が書かれているではないですか。

それが終わるまでの彼の日記は、日々が輝いていたのかもしれません。

だってそれは彼が太陽だった時のお話なんですから。

まだ家族に太陽としていられた時、それがああなるなんて誰も思わなかったでしょう。

太陽が尽きれば光もない塊です。

何一つなくなった後の彼の日記はそれは、それは面白いことになっていました。

もう家族と話すことすらなくなって、久しぶりに父上と話してみれば。

男爵家へ養子にいけといわれて、もう泣くしかなかった、そこまでいらないと思われていなんて流石に、いやもう目をその事実に目をそらすことが出来なくなった。

妹、妹が、あいつが居るから、あいつが生まれた所為で、そこまで僕は駄目なんだろうか、ずっと頑張ってきたけれど、何一つあいつに届かない。

結局才能のある子供だけしか父上は要らなかったのだろうか、母

上は必要なかったのだろうか、僕は、そこまで要らない代物だったんだろうか。

けれど、今日妹を殺そうとして分かった事がある、僕はもうここにいられない。

ここにいれば僕は何もかもが終わってしまう。次の家で頑張ろう、この家のことを忘れるくらいに家族を大事にしよう、妹を忘れるくらいいろんな事をして、男爵家を発展させよう。

きっと要らない子供を押し付けられたのかもしれない、新しい家族を守るために頑張ろう。

頑張ろう。

このページはやけに皺でよれて歪んでいた。

泣き腫らしながら書いたのでしょう、よっぽど何かに吐き出したかったのは分かりますが、これからさらに数年後の日記はさらに面白かったです。

もうかれはその時完全に終わってしまったのでしょう、そう考えればあの御前試合の結末も分かると言うものでしょうか。

それが彼のかごが唯一分かる代物なのです。

それ以外はあの時大体終わってしまいましたから、あの惨劇のあとに、あの御前試合は良くも悪くも歴史に残りましたから。

そして最後の彼の日記です。

もう殺そうかあいつ

ただそれだけでした、何があったか分かりませんが、ただそれだけです。
結末を知っている身とすればなんと分かりやすく、なんとはた迷惑な言葉でしょうか、ですが同時に恐怖しかありませんでした。

なんでこんなことにと、何でこんな風にと、そう思うと恐怖がわいてくるのです。

その少年が壊れて崩れ果てるまでその様は、恐怖と言う言葉でしか表せませんでした。
彼がそんな風になってしまった完全な原因はきっと、ちょうど日記が終わった時から始まるのでしょう。
日記が終わった日、男爵家の没落こそがその完全な原因でしょうが、そこで何が起きたのか詳しい資料は残っておりません。

ただそこでおきたことで彼は完全に終わってしまったのだと、この日記を見た私は思わずには居られないのです。

外伝　日記（後書き）

外伝なんて書くつもりはなかったけれど、維持でも更新したくて無理やり書き上げました。
ちなみに何本か書くかもしれないし書かないかもしれないけれど、外伝は全部本編終了後のものです。それだけは間違いないと思いますよ。

四章　精神の薄氷

何一つ無い、何一つ彼の手には余る。
体力がなくなり倒れるまで剣を振り続けたそれは、訓練所で倒れているところを侍女に発見されるまで気付かれることは無かった。
注意されたがそ知らぬ顔で、なんか寝てただけでしょうと適当に返してみたが、発見者の侍女は顔を真っ赤にして起こっていた。

実はこうやって心配されると言う経験が無い為、冗談で和ませようと考えたようだが、すまない場合があることを頭に刻み付ける程度に社会学習するべきだと、なぜ酷く怒られた。
確かにあんなところで御前試合の参加者が倒れていれば、また参加者死亡と言う、不穏なうわさが流れ、今度こそ王の面子を潰しかねない。そうなれば本当にあらゆる方面で色々と笑えないことになってくる。

頭の回りは悪くないはずなのに、彼はそういうことにやけに無頓着だ。
どこか人生が壊れている人間だ、それは仕方ないのかもしれない。注意してくださいと当たり前の説教に少しばかりうれしくなったのか、悪かったと珍しく仏頂面から朗らかな笑顔を見せていた。

その時侍女が目が赤いけれど大丈夫かと言ってきたのだが、それは単純に泣きながら素振りをしていた所為なので、少し腫れぼったくなって居たりしたのだが、次女はそれを心配していたようだ。
だが流石にそれは男の子だったようで、恥ずかしがりながら視線をそらして、色々あったんですとしかいうことが出来ず、昨日を思い出して少しばかり困った表情になる。

「僕だって男の子なんです」

などと稀代の名言を吐きながら、侍女から逃げ出した、妹を殺すと息巻いてた男は、その事実の説明をしたくないがために、己の身体能力の全てを駆使してその侍女を振り切った。

結局そんな試合前に起きた参加者の不祥事は、そんなのりもあって騒ぎになる前に終わったのだが、あれだけ震えまくってたくせに、今はずいぶんと余裕があるものである。

彼が言うには男の子らしいので、これ以上は追求してやらないのが優しさなのだろうが、この御前試合が終わるまでの課題が一つ分かった気がした。

「心が弱い、あまりにも弱いんだ」

才能じゃない、負け犬根性が染み付きすぎている。

原因は過去の事であるのは分かっていたが、ここまで酷いとは思っていなかった。思い出すだけで歯噛みするのは仕方の無いことだろう。

弱いと、自分は弱いと彼は、自虐しつづけ、自嘲を極めて突き抜ける。

乗り越えないと思う。そうじゃなければ彼は何一つ始まりもしないと、小手先だけが身についたって、ここぞと言う時に崩れるなら彼にとっては価値の無い代物だ。

「古傷が痛むな、心も体も、あいつと当たるまで三日、無理難題過ぎるだろう」

見ただけで心が潰れて死んだのだ。

どうすればいいんだと泣き叫ぼうにも、今までの人生でそういう事を相談できる相手もいない。
人とのつながりと言う意味では希薄すぎのだろう、一人の殻にこもることしか出来ない。彼はそれぐらいしか機能を保有していないように、周りとのつながりがある一つをおいて断絶していた。

その繋がりが妹だけと言う、なんとも酷い人間関係。妹なんて好きでもないというのに、過去から全てつなげて結局残ったのがそれだけ。
彼が終わってしまってから、残ったその絆を断ち切る為だけに動いていると思えば、もうこの終わりがどうあれ、彼はきっと何も残らないのは間違いなかった。

もう剣だけを振る人生に変わるかもしれない。本当に極限まで人の絆が薄れたら、最後に残るのは手元に残るそれだけだ。完全に孤立する為だけに動く人など、その行為全てが破滅だ、残るものなど何一つ無いのと変わりは無い。
そんな事を彼が考えると、自分はもしかして死にたいだけなんじゃないかとすら感じてきてしまう。

それぐらいには、彼には何もないのだ。
妹を超えたいんじゃない、ただ殺したい、復讐ですらない。ただ殺そうと考えているだけでここまで来てしまった彼だ。
けれど、彼はそれでもよかった、残らないことがじゃない。

妹を殺すことだけでよかった。それぐらいに何も残さなければ、あの化け物には届かないのだと確信していた。
妹、妹、妹と、それだけしか彼には無いほど、彼の頭には妹しかないのだ。

だって今まで父親の考えが出ることすらない。剣聖のことなんて最初から眼中に無いのだ。そもそも次が父親であるかすら彼は気にしていないのかもしれない。
商店に定まった妹だけを彼は見据えている。他の誰にも負けるわけがないと言う発想は、父親の決意を軽く罵倒しているだろう。だが今まで彼にそういう扱いをしていたのは父親のほうだ、自業自得であってもそれ以上ではないのかもしれない。

「強くならないと、本当にそうじゃないければ、戦う前に終わってしまう」

それよりも戦う前に壊れてしまう自分が恐かった。
またあの醜態を晒すのかと、そう考えるとたっているのすらあやふやになる。あの笑顔が彼を押しつぶしてしまうと思うほどに、手が思い出すたびに震えている。
死んだものにしか絆と呼べる絆の無い男だ。

しかも殺したと言う言葉ついて完成するような代物。
ましてや最後に殺した男など、自分を最後にまで褒めて死んでいったような傑物だ。彼の重さが一番つらかった、あなたを殺した男は恐怖で動けなくなります。
そんな事があっていいはずが無いのに、事実そうで、そのまま壊れてしまいそうになることが、あまりにも殺したことすら無駄と言っているように感じてしまう。

殺した責任の重さ、自己の満足の為とその為に殺したからこそ、彼はそれにとらわれ続ける。たぶん根が優しかったのだろう、だからこんな事さえも抱えてしまう。
さばさばと割り切ってしまえばこうもならなかったのだろうが、そうなるには彼は優しすぎたのだろう。だがそのおかげで足掻いて

いられるのかもしれない。

強くなろうと考えるけれど、心を鍛える方法なんて分からない、いつものように剣を振って何かが変わるわけじゃないのだ。百年たとうと何も変わらないかもしれないけれど、いつかころりと変わっているかもしれないのが心って奴だ。

足掻いてやると思う、彼にはそれだけしか機能が備わっていないのだ。頑張ろうと言い続けて実行するだけ、課題はあるがどう乗り越えるべきなのか、探し必死になるのも糧になるのだろう。

必死になっている、あの無様はもうしないと心に剣を打ち込んで、自分の生涯を相手に刻み付けてやると、お前の完璧さなんて俺は許さないと言い張る為に、今度こそ、そう本当に今度こそ。

「出来るのか」

出来るのだろうか本当に、どれだけ思い決意も力の前には轢殺されるのが当たり間の帰結なのだ。

意思を張る為の力が泣ければ、どれだけ確固たる意思が在ろうと価値があるはずも無い。妹を殺すほどの意思があるとして、妹を殺せるほどの力があるのか。

「あーもう、何を考えても悪いことばっかりだ」

泥沼だった。悪いことばかり思いつく、たぶん妹と言う存在を完全に認識してしまった所為なのだろう。

一つ決着をつけても、また一つ問題があがって、それが全部、全部、心の問題なのだ。

いまさら力がつけられたとしてもある程度、心に問題があるのだ。泥沼のようにはまるマイナスの思考、これなら剣を振っているほう

がましだと思うが、また訓練所で県でも降って居ようものならあの侍女が飛んできそうな気がした。

そうなると流石に困る、御前試合が始まるまであと数時間。寝るにしても微妙な時間は、彼の日々の生涯でも珍しい手空き時間と言う奴だった。頑張ると言う言葉だけで生きてきたような人間なので仕方ないと言えば仕方ないかもしれない。

何もしないと言うのがどうにも苦手なのだろう。

無駄気思考を重ねて泥沼状態に陥ったりと、時間を作ると悪い方向にしか進まない典型は、マイナス思考の塊となりつつあったが、何かしようと考えて、辺りを見回してみるが、さほど自分の暇をどうにかしてくれそうなものは無かった。

やっぱり素振りかと考えても見るが、あんなわけの分からん言葉を言って逃げ出した手前、なんと言うか気まずいと言うか流石に彼も顔をあわせづらい。

羞恥心が無いわけでもないので、人並みに感情がある彼には流石につらいのだろう。自分のいった言葉のないような無さを考えれば仕方の無いことだ、意味が分からない。

これから一体どうしたもんかと、首を傾げながらとりあえず自室を目指してみるが、途中声を掛けられた。

「おや、魔剣の頑固者を殺したって奴じゃないか」

それは神童と呼ばれた南方の守護者、彼の妹ほどではないにしても、才能だけなら豊かな北と南の太陽だ。

だが彼にはあまり興味の無い話だったりする。彼と彼女ではあまりにも差がありすぎた。

「あ、どうも」
「そう薄い反応だと悲しくなるじゃないか、こっちはあの魔剣を殺したって言う剣士がどんな人物かって楽しみにしてたんだぞ」

部屋に行ってもいないし、探してたんだと、楽しげに肩をたたいてくれた。
彼は魔剣のライバルと呼ばれた天才だ。だからこそセンセイに興味を持ったのだろう、人たちで自分のライバルを殺し、傷一つ負っていないというのだから。

「どうやって殺したか、なんてのは御前試合があるから聞かないけど。あいつ満足して死んだのか聞きたくてな、実はあいつを殺すのはきっと俺だなんて思ってたからさ」
「殆ど不意打ちですよ、見事なんていってくれましたけど、まともな闘いなんか最初から用意してませんでした」

どうしても出たかったんですと、彼は言葉をつなげた。
だが逆に彼は驚いた様子で先生を見ていた。

「あいつが見事だって、お前よっぽどじゃないか。あの頑固者が人を認めるなんて、よっぽどの使い手だぞ、こっちは馬鹿馬鹿と言われ続けてたのに」

ただ賞賛で彼を迎えた神童ヒルメスカ、罵倒さえ覚悟していたと言うのに、故人を知っていたのだろう逆に驚いて見せてくれる。
殺した相手から繋がった縁、それに驚いたままの先生だが、それがつながりとなんて思っても居ないのだろう。

「楽しみになってきた、軍神はちょっとつらいが、一つ目標が出来たってもんだ。二回戦で順当に行けば俺とあんたが当たる、その時

に存分に語ろうぜ、剣聖なんか打ち倒してくれよ」

すごくうれしそうに笑った、絶対に負けないから次の戦いで会おうと、そんな事を言ってくれた人間は居なかったのだ。

ほほが緩むのがわかってしまうほど彼は笑顔だったのだろう。

「分かりました、負けるつもりはないので気にしないでください」

「その時には不意打ちじゃないと、どれだけ魔剣が強かったか教えてやる。あいつと同格の俺だからな、絶対に見せてやれると思うぞ、あんたのその暗い顔を晴らすぐらいには、こっちにもいい目標になるし一石二鳥だ」

だがあんたも相当強いのは分かるさと彼は言っていた。

魔剣相手に人たちで決着できる腕前、ましてや日々が戦場と言い張っていた魔剣という男の不意をつくなんて異常を成し遂げた偉業に、ヒルメスカは感動しか出来なかった。

だから彼にとっても倒すべき目標が一つ出来たのだろう。

目の前の剣士、魔剣を倒せるだけの実力を持った存在。自分の目標がまた定まったと喜んでいた。

しかしそんな褒め称えるべき目標は、すごくばつが悪そうに呟くのだ。

「目標にしても、意味無い。あなたや魔剣のほうがよっぽど強いよ」

それに目を丸くした神童の姿があったが、そのあとに困ったような顔をしたまま、視線を左右に動かして動揺している発言の主に、腹を抱えて笑うしかなかった。

見当違いの発言でもしているようしか聞こえず、彼の言っている言葉がやけに子供っぽく聞こえたのもそうだろう、目の前の魔剣を

殺したセンセイと言う男は、自分に自信が無さ過ぎた。

「こっちの勝手だ、そう思えるからこっちがそうするだけだ。あんたはあんたが思うよりは間違いなく強いんだよ」

一体どれだけ上と比べてるんだと、目に涙を浮かべながら笑って、先生に視線を合わせて肩をたたく。

少しばかりその手の力が強かったのは、魔剣はあんたに負けたんだと、あんたが自分の言葉を否定することだけは許さないと言う意思があったのだろう。そして同時に、それだけ魔剣を認めていたと言う感謝もあった。

「そこまで自分が信じられないなら、俺と戦って勝ったら強いって信じろよ。負けたらそのままでいいさ、あんたが強いって言う男が言うんだそれで十分認められるだろう」

これから殺しあう相手に彼は、進むべき言葉を与えて、頑張れなんて告げていた。

こっちは全力であんたとやりあいたいんだよと、格好をつけて気取ったように言ってくれやがった。

四章　精神の薄氷（後書き）

なにこの神童の快男児ぶり。

五章　御前試合開幕

俺の言いたいのはそれだけさと、一人あまりにも清々しい男は去っていった。
いもうっと同じように輝いているはずなのに、彼には驚きしかなかった、ひとつとして悪いと思うことが無かったのだ。
綺麗な人間の筈の神童と呼ばれた男、だが妹に感じたような嫌悪感は一切無かった。

同じ存在の筈だと言う彼の疑問を解消するものなどいない。
それが気づけるようになればきっと、自分の何かが変わるんじゃないかと、彼の戦いを心待ちにしている自分が居たことに彼は少しだけ驚いていた。
今までの貪欲などす黒い執着じゃない。

何か別の感情に酷く戸惑っているようにさえ思える。
人との繋がりが出来て、初めて知った戸惑いは、彼にはあまりに刺激的過ぎて、ここに着てから驚きしかなくなり、いつも何かに怯えて戸惑いあせっている。
ここに来るまで、彼が何をしていたと言うことは無い。ただ武器を振っていただけ、そんな人間の触れる絆は、全てが色を変えて新鮮なものではあったが、膨大な人という情報量は彼をどうあっても困らせる。

優れた人間かもしれないが、人の機微とは所詮経験だ。それ超越できるものはただ反則じみた魅力で人を捉えるような彼の妹ぐらいだ。
それ以外の人間は、ただ人と付き合いその中で得る経験で、それ

を手にするのだ。
その経験の無い彼は、戸惑うしかない。人と話しかけることすら難しいかもしれない、用は対人恐怖症の一歩手前、それ以前に人との会話と言う行動を理解していないかもしれない。

それぐらい彼は、人と人の繋がりが薄い。
同時にまた会いたいと思ったのは、ある意味では妹だけ、きっと魔剣もああいう人物だったのだろうと思うと、自分がなぜちゃんと剣を合わせなかったのかという後悔さえ芽生えた。

神童は妹とはまったく違う、なぜ会いたいと感じて、また話してみたいと彼は思ったのか。
それはきっと魔剣と同じく、彼らがセンセイのあこがれた存在だからなのだ。ああ生きていられたらきっと自分は、妹を殺そうとなんて考えなかっただろうと、それぐらい彼らは強かったのだ。

「うらやましい、な」

それが多分彼が最も欲しかった強さなのだろう。
今際の際にすら人を認められるような人間、しかも卑怯な手で殺された相手にすら、だから彼は魔剣の死をいまだに引き摺り歩みを重くし、同じような人間を見て羨ましいとこぼす。
僅かに鈍く痛む心は、きっとそれを妬む気持ちだ。

なんでなんだと、なんでこっちはそうなれないんだという。彼の抱えた嫉妬と言う気持ち、羨ましくて仕方が無い。
何であんなに、なんであんなに、何もかもが妹より綺麗に見えてしまうんだろうと、そしてそんな彼らに殺意よりも、尊敬が先にたってしまう。

「あの人たち反則だろう、ずる過ぎる、あんなのどうすりゃいいんだよ」

心臓をつかむように胸をつかみ、何で強くなってくれないんだと叫び散らしたくなる。

自分の弱さなんてしっている筈なのに、光があればあるほどやっぱり自分が穢れて見える。

この惨めな執着心、どれだけ太陽を見ても帰ることの出来ない感情、嫉妬と言うだけのそれは、彼が生きる意味にすら変わっていた。行動原理の全てがそれに集約していくほど当たり前の行為。

だからこそ、それしかない自分が汚らわしく見えてしまう。

羨ましいと呟き、羨ましいと嘯くようにさえ感じる、本当に羨ましいのかと自分に問いただすように。

分かっているのだ、彼だって自分の心の弱さは、この溢れている嫉妬。どう会っても消せない悪意と言う悪意、妹から生まれたそれは、彼らのようには生きていられないと言う事実の証明だろう。

だから羨ましい、ある意味では妹よりも手の届かないそれよりが、本当の意味で手が届かないと知っているから。

自分はああなれない、なれる筈が無いのだ。

それでも彼は待ち望んでしまっていた、自分がなり勝った人は一体どんな人なのだろうと、所詮は揃いも揃って剣でしか語れない者達、だからこそ万の言葉よりも剣で語り合いたい。

「勝てる気がしないんだもんな」

試合では負ける気がしない、勝てないとは思わない。

だが勝ったということができない、きっとそんな闘いになる。後

に残るのは魔剣と同じ時の喪失感だけ、喜んだあの時と同じ何かが消える感覚。

ポツリと呟く。

「頑張ろう、頑張ろう、じゃなけりゃ殺したことすら無駄になる」

そう言い聞かせる言葉は自分が自分を保つ為のいいわけだ。

今は弱いんだから仕方がないと、そう言い訳のためだけにその言葉を使っている、そう彼と話してからは思うようになってしまった。

渦巻く思考のマイナスに、どうやったらいいんだと悲鳴を上げたいけれど、それを受けれてくれる人間はどこにも居ない。

死ぬまで苦しめと言っているように、心の中にまた一つたわみが出来て、何かが歪む。

けれどもうそうやっていいわけが出来る時間は少ない、立ち上がって歩き出すしか許されない、時間はそこまで彼を追い立てているのだ。

あと少しの時間、それで彼はこれを乗り越えて歩かなくてはいけない。

自信の決意がそれほどに弱いものだと言い張るわけにはいかない。いまは、今はまだいいかもしれないが、そうじゃない時がもう迫って追い立てる。

その時自分は剣を握ることが出来るのだろうかと、妹よりも前の尊敬するべき相手に、自分は剣を向けることが出来るのだろうかと、途方に暮れる。

弱すぎるのだ、能力と精神のその異常のアンバランスな状態が、彼の全力を妨げている。

軍神に傷をつけることすら可能と言わしめた男が、己の心の弱さによって力を封じられているのだ。
この部分が彼にとっては致命的な弱さになる。

「けどどうすりゃいいんだ、俺には何にも残ってないんだぞ」

普段の仮面すら纏わず、ただ途方に暮れる。
あまりにも神童の心が羨ましくて、自分がどれだけ弱いのかを刻み付けられる。抗えるのだろうかと、その土壇場、死ぬ間際ですら抗うことが出来るのだろうか。

届かない、空の月を水に飼うように、掴んだと思っても朝になったら消えてしまうようなものだろう。
何一つ届かないのだと理解させられる、したくも無いのにさせられて、結局自分は妹には届かないと言わされる。

どうすればいいのだろう、そんな悩みを時間は解決してくれない。
どんな名探偵よりもましな回答をしてくれるそれは、所詮は後回しの発展系だ、時間の無い奴には何の効果も無い。
追い立てる時間と言う取立ては、侍女という形を持って襲ってくるが、こればかりは勝てもしないので、言われるがままに支払うだけだ。

そうもう誰も彼の悩みなんて無視して動き出す。
疑問も無いただ漠然と、真剣を使った御前試合が始まるのだ。軍神が最強であると言うデモンストレーションの為に呼ばれた、いずれ劣らぬ者達のその全てを競う闘い。
分かっていても軍神と剣を合わせたかった者達、もっと別の目的を持ったものもいるだろう、だがもう始まるの間違いなかった。

ただ一人王の護衛として軍神が控えてはいるが、それだけで分かるだろう、彼女がどこまでも最強であると言うことが、そしてそれに不釣合いなほどに愛らしい姿は聖女なんて呼ばれ方をしたりするのかもしれない。

それだけ彼女は王に信頼され、同時に最強だと言われているようなものだ。

なによりそんな事をわざと証明する為に、王国の名だたる使い手たちを集めたのだ、それこそ新旧様々だろう、あらゆる世代の最強と呼ばれた者たちを集めて、することは軍神の証明。

彼女であれば誰にも負けないと言う、戦意高揚と、何より他国への牽制だ。

だがそんな思惑は知ったことじゃないのがそこに居るセンセイだったり神童だったりするのだろう。

軍神を殺そうと考えている奴と、それと戦ってみたいと言い切った男、王の長い演説が何を言っているのか、こういう場に出ると考えよりも先に、ぶっ倒れた所為での倦怠感や、そもそも寝てないせいで睡眠不足ということもあり、眠気が今の最大の敵になっていた。

人類最強の敵の一人と激しい戦いを繰り広げるが、中々の劣勢に少しばかり追い詰められてきた。隣に居た一応父親はそんな彼の態度に、このまま剣を抜いて無礼打ちしてやろうかと考える始末だ。

実は鏡面のような二人の邂逅だが、彼は父を視界にすら入れていない。と言うか今は眠気以外は敵がいないので当然だが、万全でも無視されたことは間違いないだろう。

始まるまで、何一つ親子の会話は無い。

それでいいのかと答えられれば、それ以外の選択肢は無いだろう。

いつか認めて欲しいと言っていた筈の父親すら彼の視界には無いのだ。彼は憧れと嫉妬以外で人を認めていないのかもしれない。

努力で心が磨耗しきったのかもしれない、捨て去った何かを今取り戻しつつあるのかもしれない。

だが分かっているのだろうか、悪意を向ける相手を無視する。
それをしたのはただ一人だと言うことを、彼の妹だと言うことを、忘れていないのだろうか、それは自分も同じ穴の狢と言っているだけだと言うことを、嫉妬と言う感情しかないような男は、隣の男の嫉妬に気付かない。

殺してやると願い二人、だがそれは総じてずれていた。
父は息子に、息子は妹に、妹は別に誰にも、誰一人向けるだけ向けて、対象には気付かれても居ない。

さすが家族と言うべきなのだろうか、殺しあうだろう二人、どちらが死んでも気づきもしないことだろう。
相手の嫉妬と無関心に、この家族はきっとどこかで終わっているのかもしれない。あまりにも似通いすぎている。

「各々の技術を見せ付けてくれ、以上である」

そんな王の締めの言葉を聴いても、誰もきっと価値を持っていない。
ただ軍神に負けろと言われる命令の為にきた者もいるのだ。これは全部が出来レース、そんな事をしなくても誰もがわかっているというのに。

だがそんな出来レースの第一戦は、家族同士の戦いだ。
父と息子、ある意味では父越えの戦いでもある。ルールの説明を観客にしながら、始まりに向かって体を整える二人。
その説明が終わった時始まるのがきっと彼らの殺し合いだ。

その決戦の舞台に晒された二人、どちらも剣も構えずにゆったりと立っている。犬歯としては同じ流派だ当然と言えば当然だろ、どちらもが最強と言える構えのまま、その始まりをゆっくりと待っている。

軍神はその戦いを興味心身に見ていた、兄はどれだけ強くなったかと、何より二人の大切な家族の戦いだ。彼女にとっては楽しみだった、あの弱かった兄の本領が見れると、これでまた昔みたいに仲良くできると。

これで兄が父に勝てばきっとまた仲良くできると、だから二人とも頑張ってと笑っていたように思える。

だが決着はあまりにも容易くついてしまう。

しかしその戦いの決着に彼女は兄の生涯を見てしまうだろう。たった一瞬の出来事であったとしても、兄の極めた剣の終着点の一つ。

その証明を妹に見せ付ける事になる王都御前試合第一戦目、その始まりは、高らか宣言されそして、一瞬で終わってしまった。

その血の溢れる音によって。

五章　御前試合開幕（後書き）

だが次の章は少し前から始まる。
そして土日には更新しないけれど、その前日に更新しないと言った覚えは無い。

六章　ただ再現される月日の形

剣聖と惨敗の戦いが始まる半刻ほど前、今観客達に対して説明や余興などが行われて、周りは程よい熱気に包まれている。

その熱気を受け流すように、ただぶらりとたっているのがセンセイ。

彼の頭の中には一つのことしか頭に無い、自分が弱いというそれだけ、それだけを頭にぐるぐると回し続ける。誰かに相談できれば、もしかすると解決するかもしれない内容だが、それが出来ない男は、ただ自問自答の迷宮に迷い込み逃げ出すことすら出来ないだろう。

それも少しの間であるが、ここは選手の控え室みたいな場所だ。個室を与えられたりと言うわけではないがそれなりに広く、体を温めるために数人が体を動かしていた。中に派遣を振っているものも居る、自分の身長の倍はあろうかという剣を、片腕で振り回す光景は蹂躙すると言う行為を体現したような姿だ。

あれがかの有名な無双なのだろう、見た目はまだ若いと言うのずいぶんと荒々しい剣を使うと、だがあれでは御前試合には向かないのだろうと同情した。あれは軍隊と戦う為の剣である、ここに居る剣士たちの中でも対集団戦にむきすぎた戦い方に、さすが軍神の当て馬と同情してしまう。

ザインザイツと呼ばれた女騎士、西方の魔人とも呼ばれる王国の理不尽の一人ではあるが、王の命令の為に当て馬になったと言うところだろう。

彼女は忠義の騎士としても有名だ。見栄えが派手な女騎士二人の戦い、観客達も喜んでみることだろう。ましてや殆ど巨塊とも言うべき剣を振り回す存在が敵なのだ、分かりやすさと言う意味では群を抜いている。

だが負けろと言われなくても軍神相手では、ここに居る相手すら雑魚と十把一絡げという奴だ。だからこそ己の全霊を出せるようにと体を作っているところなのだろう、自分よりも幼い敵に、自分の限界を見るために。

たぶん後とする相手が彼女の周りには居ないのだろう。今のままでは成長の頭打ちになってしまうと、そこに新鮮な空気を取り入れるつもりなのか、忠誠の騎士と言う割には存外打算的だが、絶対を見ればもう開き直りしかない。

彼の憶測には違いないが、外れではないのだろう。これをいえ無双は図星をつかれてあわててしまうかもしれない。もしかしたら怒り出すかもしれない。

多分の軍神が強すぎるから勝ていない事を前提に物事を組み立てている。

それこそ自分のような馬鹿でなければ有り得ないと苦笑してみせる。

せめて一太刀なんて思っていればその忠誠後と食い殺されると、あの妹はそれほど理不尽なのだと、自分が知っているありとあらゆる人類の最終形態のような彼女の姿を思い出す。

だが前のように手に極端な震えが出る事がなくなっていた事に彼は驚いていた。いやそれ以上に、妹のことを思い出して笑えるという自分の姿が想像できなかった。

「あれ、え、なんで」

沈黙を保っていた彼の体に灯がともるようだった。

何がおきた変わらず自分の手を握ったりは振り回したりして見せる、偽りと思っていたはずのそれは、やはり自分の体で、何が起きたかすら彼にはわからなかっただろう。

胸に沸く憎悪は変わらないのに、殺意なんて抜けきってもいないのに、恐怖がカランと消え去っていた。

きっと妹がいないからと言うのもあるだろうが、それに少しだけ心が軽くなった。

考えても見ればそうだ、自分は戦いたい相手ができたのだ。憧れが出来てしまった、それに手を届かせる為に今は必死に成らなくてはならないと、少しだけ開き直ることが出来た。

自分には出来ないことであったとしても、自分を強いと認めてくれた人達に、頑張りましたとでもいう表現を限りなく尽くそうと。

それだけで心が浮かぶようだった。いまだ抜け出すことの出来ない嫉妬の悪意は、消すことも出来ないまま彼を迷宮にふさぎ続けるが、少しの間だけ、その事実から彼は目をそらそうと決めた。

心が弱い、彼は心が弱い、だから心臓を掴むように心を掴み、頑張れると小さく呟く。

ここじゃ終われないのだと、そして一度過去を反芻した。

終わった日を、反乱を計画したと父に滅ぼされた男爵家、根こそぎ蹂躙されたあの悪夢を、あそこで彼は全部を諦めた。

殺してやると言う言葉だけを杖にして、そうやって生きてきた心の弱い存在は、神童と言う憧れを見つけて崇拝した。

彼みたいになりたいと、そして魔剣の様になりたいと、せめてその人達に誇れるだけの自分でありたいと、それはまるで縋る物を求める様なかつての彼だった。それはただ過去に戻っただけ、何一つ変わりはしていない。

そして妹に嫉妬を、何も変わってはいないただの拗ねた餓鬼だ。

今のままでの強さを騙れるだろう、だがよりどころを無くしてまた怯える日々が始まるだけ。このまま行けばきっと彼には何一つ残

らないだろう、決意一つ果たせず、妹の前で屈服する未来しか残っていない。
弱いままの心はただ人を求めてさまよっているようだ。
誰かに認めてもらいたいと、それが自体が悪い事ではないにしても、人殺しが人に認めてもらうなどと言うのは、千は殺してから語ればいい。

虐殺者として認めてもらえるだろう、万を殺せば大虐殺者、十万を越えれば暴君か独裁者か、そんなステップアップしかないことを理解しているのだろうか。所詮人殺しはその程度の歩みしか出来はしない。
彼の範疇なんて所詮シリアルキラーがいいところだ。

最もその程度でいいと覚悟はしているのだろう。
だから強くなろうと考えた、この先杖を持たずに妹を殺す為に、きっとそうじゃなければ彼は同じ無様を繰り広げてしまう。
目をふさいでも思い出す生涯の無様の限り、最初は妹に負けたところから、同あっても勝てないことを刻まれた時から、努力を繰り返しながら破滅して言った自分。

甲冑を着込んで妹と戦い軽々と惨敗したあの時、そして自分の手から全てが零れ落ちたことを自覚した時、一番新しいものにいたっては刷り込まれた絶望で何一つ体が動かない。
彼は人殺しにすら満足になれないのだ。

「縋ってでも、這いずってでも、それしかないか。それしかないよな」

自分に許された唯一を行使するにはそれしかないと、全部自覚していた、自分が彼らに縋っている事も、崇拝している事も、だがそ

れを遣わなくては今の彼は歩くことすらままならなかったのだ。
心が弱いといったが、彼はすでに薄弱といった状態だ。なぜそうなったかなど、いまさらいう必要もないが、彼の始まりは妹で、結局終わりも妹で決着す程度の存在だ。
それだけ存在をすり減らしてまで足掻くのだから、性根の部分は強いのだろう。何しろ負けると分かっていようと殺すと言い張るような奴だ。だが柱が太いからこそ余計に磨り減り心はボロボロになっているのだろう。

何度も立ち上がることは出来るが、そのたびにそよ風でもへし折られる。
考える葦程度にはなってほしいものではあるが、そう簡単にそこまで頑張れるほど強くないのもまた彼なのだ。

「神童か、本当に勝ちあがってくれるか。不敗との闘いか、どうなるんだろうか」

しかもだ今から始まる戦いのことよりも先のことばかり、彼がきっと父親を視界に入れるのは、闘いの時だけなのだろう。本来なら復讐をしてもいい立場だし、彼が終わった原因の過半数はこの男にあるというのに、彼はそれすらどうでもいいと思う。
初めて武器を合わせたいと思った男、彼にとっては最強とも思える強さを誇る剣士。彼と戦えるかどうかだけ。

ある意味では彼をここまで破滅させた罰と言えば罰なのだろう。
それのよしあしはこれからに繋がると思えば、全ての元凶とも言える男だが、その男が彼と妹の舞台に上がることは無い。

「生まれてきて思うのが妹と男って、どこまで性欲枯れてるんだろうか」

性癖だったらどこまで変態だと軽く自嘲する。こうやって自分を軽んじるぐらいには落ち着いたのだろうが、何もかもがマイナス思考の自分に泣けてくる。

「今から頑張らないといけないから、すこし逃げ道を塞いどこう」

だが軽口がたたけるようになるぐらいには心が回復したのだろう、体に燻る熱をはっと口から吐き出し、誰に言われるでもなくただ武器を振った。

まるで周りに喧嘩でも売るように、しんとなった音は、その使い手の剣が恐るべき鋭さを持っていることをやすやすと証明して見せただろう。

それを見るだけでも腕がどれほどの物か読み切れる者もここには多い。さすがその深遠までは見通すことは出来ないだろうが、それでも片鱗ぐらいは喰らいつくだろう。

「はっははは、これでもう逃げられない、逃げられないぞ、この腐れ弱虫め」

心臓が痛いぐらいに鳴っていた。

こんな挑発まがいの事をやったのは、自分に発破を掛ける為だ。逃げられないぞと、もう縋っても縋らなくても歩き出さなくちゃどうにもならないと、頑張れないなら無理やり頑張ってもらおう。

「もう逃げられない、ここまで調子付いたんだ、逃がさないぞ卑怯者」

自分を奮い立たせるというよりは、脅迫したのだろう。

ここで動けないようなら何も出来ないぞと、結果が成功したのかどうかは追求はしないが、彼はどうにも笑うしかなかった。

少しばかり強張って、凶相紛いの表情になっているが、それが彼の箔でもつけてくれたのか、周りも同じように笑って見せた、ここにいない妹と父、母以外は、上等だと笑ってくれた。

この時、少しは彼の世界が広がった。

だがこんな挑発紛いの行為をやっていると、いつの間にか控え室が場末の酒場のような空気ではあるが、どうせ真剣を使った殺し合いをやらかすのだ。この程度の空気なければ誰もやってられない。

暗い空気でいるよりは楽しげではあったが、それだけやると彼は武器を振って、軽く剣を体になじませる。努力教の信者の癖に珍しくあまり調整を行わなかったが、それもある意味では挑発だったのだろうか。

ただそういった恐怖を口から吐き出し、自然体になったところに、観客の声が激しく響いた。それが自分の出番だと言うことの証明だろうと、確認すると、ぼんやりと呟く。

「剣聖殺してくるか」

呼吸する様に当たり前に、自然体のまま呟いて、そこにいた全員に驚きを与える。

当たり前だ剣聖とはかつての最強、この国における軍事力の第二位、今なお残る伝説と言ってもいいような男だ。

だが彼は変わらない、軽い調整と当たり前の動作。

殺せないわけが無いと、さも当然のように言い切り、第一試合ですと呼ばれて歩き出した。誰もが瞠目する中、本当に剣聖は殺されるのだろうかと思う。

だがその時ある意味では、人間の範疇における最強が決まってしまうのではないだろうかとも思う。
ただ一人を除いて、そういってもらわないと困ると、彼もまた控え室だ人知れず挑発紛いの剣を振った。

その時の彼女はすごく機嫌がよかったと言えるだろう。
この後の参上を考えなければの話だが、それこそ本当の意味で嫉妬によって凶相となっている父を見ていないとはいえ、父と兄の闘いが楽しみじゃないわけが無い。
もしこれで兄が勝つような事があればきっと。

「また家族全員が揃うんだもん」

そうそれだけが望みの彼女は笑ってみせた。
相対する二人の剣士、だがその二人には絶望的なさが見て取れた。あの時の兄とは間違いなく違う、多分彼女が見たかった兄。
まるで父親に愛撫されたようにそれだけで彼女の股から蜜が溢れる。あれが兄なんだと、まるで恋に浮かされた乙女のように蕩けた顔で。

「あれ、あれ、あれ」

そんな自分の反応に戸惑う、今までには無い感覚と言うか発情に彼女は驚いていた。
だっておかしいのだ、兄は明らかに今までの形を保っていない。それは開き直ったこともあるだろうが、今だけは前を向くという決意をした所為もあるだろう。
と言うよりもあれだけやって、怯えるようであればもう妹には二度と手が届かないと確信していた。

そして試合が始まる前、二人は一度だけ視線を合わせた。
もしかするとそこで彼らは初めて父と息子として対面したのかもしれない。彼女はその光景をまるで、何か別のことが起きるような嫌な予感を感じずに入られなかった。
だがとめらる訳が無い、とめられよう筈も無い、今まで人生において全ての事が可能であった彼女だろうが、この二人は止められない。

太陽は輝く、だが全ての闇を照らせるほど万能ではない。ましてや嫉妬などと言う当たり前の感情は、彼女の行動を台無しにしてしまう。
なにより女の彼女が、出すはずだった声を押し留めてしまう。たぶん本能で気付いているのだろう、男二人が自分の為に争っていると言う状況を、そしてそれは太陽が翳った瞬間でもあった。

これを見た時、きっと彼は叫び語を得上げるほどに熱狂しただろう。
やはりこの世に完全なものなど無いと、最もだそれが彼女にとってましな成長であることも理解するべきだ、人は輝かしいものよりも多少でも翳りがあるほうがより人を集めると言うことを。

ある意味では一層完ぺきになったそれに対して彼は何を思うのだろうか。
敵は一層強大になったというべきだ、だが気付かない、いまさら多少成長されたところで絶望的な差は変わりはしない。
十の力で挑む男の敵は千を越えるのだ、だからこれは見せしめだと笑う。彼は父親を父と思わない、ただ殺す、これが復讐だと、心の弱い男の嫌がらせだと、自分を追い詰めなければ逃げ出すことしか出来ない男の牙であると。

そして闘いは始まった、軍神という女神の元で、だがあっけない。始まりから終わりまで三十秒、剣聖が武器を振るうべく剣を高く持ち上げた時、その全ては終わった。

「何も言うことはないんだ父上」

「駄作よ」

最後の親子の会話はこの程度の代物で、観客の悲鳴とあらゆる絶望の声が響いたのはそれから数秒後。

ただぃんと音が鳴った、ノイズすら混じらぬ純朴な一振り。一体どこから音がしたのかと誰もが首をかしげる。だがその音がこの闘いにおける勝敗を決した代物だと言い張るものであった。

何が怒った変わらず剣を持ち上げたままの剣聖だが、思い出したように首に赤い血の線が浮かび首はごとりと地面に転がった。

「え、見えなかった、なにあれ」

軍神の目を持ってしても、彼が剣を振るった軌跡すら見えなかっただろう。早すぎる一撃と言いたいが、軍神の目で見切れぬものなど無い、ただ彼女は首をかしげた、父が死んだ事よりもそうなった事に。

魔法でもない、兄は才能はあったかもしれないが、その能力を全て剣に転化しているはずだ。なら一体何が起きたと、ただそれは当たり前のことのように起きた、一瞬の顛末。

剣聖が死んだ、容易く何も出来ずに、それこそ魔剣を彼が殺したように、首を切り落とされた絶命した。

「もしかして、あれって、冗談みたいな事だと思ってたのに」

だがその技術を数人は見切ってしまう、と言うよりもそれしかないと確信するしかなかった。
それは遥か剣の御伽噺、剣を突き詰めたものが剣を必要としないと言う言葉の遥か先。その中で軍神がポツリと呟いた、御伽噺としか思っていなかったその技術。

「軌跡再現」

その男が振るった過去の斬線を再現する、ただそれだけの技術である。

六章　ただ再現される月日の形（後書き）

うわ、自分で書いておきながらなんだけど反則というか、反則だよね。
あとごめんちょっと文字数がいつもより超過したので、日をまたいでしまいました。ちょっと明日が外伝と言うか父親編混ぜるよ。
余りにもこれじゃあ報われない親父の純愛が。

七章　それが家族のあり方なのか

彼女が見たとき夫の首が切り落とされていた。
言葉にすればそんな出来事だ、娘に熱を上げすぎて、剣の腕まで沸いたと思いも下が、魔法ですら出来ない軌跡再現なんていう異常事態を行ったあれが弱いはずも無い。

娘はただ呆然と見るだけだ、あれが父が死んだことよりも兄の業に驚いたあたりすでに、死というものへの決別は出来ているのだろうが、少しばかりに息子に当てられすぎたのか、意識がこちら側に戻ってきていない。

たしかにあれは御伽噺で聞かされた程度の話し、剣を極めたものが剣も持たずに相手を切り裂いたなんていう、どこにもである御伽噺のはずだった。
魔法使いの彼女がからしてみれば、あれは攻撃召喚及び時間操作の複合魔法と言ったところだろうが、そんなこと出来る魔法使いなんてこの世のどこにもいやしない。

あんなものが人の技であって言い筈がないのに、現実その技が目の前に存在していた。何をどうしたのかすら分からない一方的な斬殺。

剣聖という存在をここまで容易く殺すなど、誰が予想しただろうか。
最後まで娘の事を考えていた男は、何一つ出来ずにただ鬼の様な形相のまま顔を固めて死に絶えていた。
かわいそうな人だと彼女は薄く笑う、息子に殺されたことがじゃ

ない。

そうやって必死に守ろうとした娘は、まるで女の顔で兄を見つめているのだ。

あれはきっと自分と対等になりえるかもしれない者を見つけたことに対する喜び。絶対の存在である彼女の前では王でさえも霞む、なにより彼女はつねに孤独とも言える。

だから肉親を求めて、心許せる何かを無意識に求めていたのだろうと、だがそれは剣聖という男が嫉妬に狂うだけのないようだった。

「私は妻だった筈なのに、娘の方に嫉妬って、そういう意味では私もずいぶんと」

しかし彼女は途中で口を閉ざす。それを言ってしまえば、ちょっと悔しかった。

男連中は若い女がお好みのようだが、そんな少女愛などに拘る位なら、大人の女も味わってみろといいたいが、発酵させる食べ物の殆どが、好き嫌いが極端に分かれると言うことを忘れてはいけない。

ついでに言うなら大抵の場合、臭いが天変地異のレベルだ。

そんな長期発酵された元美女は、娘に夫を取られながらも、小野が教示を頑強に保つためにその言葉を使わなかった。

彼女は夫を娘に取られたことをどうでもいいとしか思っておらず、同時の夫が死んだことも、首転がってんなあいつとしか思っていない。彼女の覇王と言う名は、どちらかと言えばこう言ったさばさばとした性格が原因となっている。

だがその彼女にも息子のあれは、以上でしかなかったのだ。はっきり言ってそれ自体は彼女の風の魔法と同格程度だろう。だがあれはどちらかと言えば座標指定の斬撃だ、それがどこか相手にはさっ

ぱりわからない。
ただ変化もなしにいきなりきり飛ばされていると思えばいい、魔法にさえ予兆がある、だがそれさえない。いくつか対処法は浮かぶがそれも完璧ではない、そもそも彼はあのざんげ気を同時にいくつ発生させられる。

あの軌跡の再現とはどこまで行える、過去の事象の再現などというものは、彼女にとっては尋常ならざることでしかない。娘が生まれいつの間にか視界から消えていた息子だが、久し振りに光の反射を許してみれば異常事態を平然と起こす、ある意味では化け物になっていた。
まして、あの軍神である娘が狂喜するほどの何かがあると考えれば、彼女だって興味が尽きない。
本当につくづく思うことではあるがこいつら本当に親としては再起不能レベルで無能である。少しはあの子も価値があったのかしらと笑って見せるその態度に、かつての彼なら自殺でもしてくれただろう。

「さすがあの人と私の血と言うべき、性格はともかく優秀な血は持っていったもの、唯一あの人の優れたところだったのかしら」

転がった死体に流し目を送ってみるが反応があるはずも無い。
彼女は問いを返さない死体に酷く落胆したのかため息を吐く。もしかして死んだ振りという可能性も一応は考えたのだろうか、それとも優れた地なのだから少しは動くんじゃないだろうかと思ったのか、どちらにしろ血はともかく無能な男とはき捨てる。

あの息子の心の弱さはきっと父親の血を継いだのだと納得してしまう。
だが彼女が仕掛けた呪いも関係在るのは間違いなかった。妹の才

能に気付き、それを潰さないようにと、彼女と剣聖でお前は弱いという呪いを刻み付けた。

「まだあの子に会ったら震えて縮こまるのかしら、そうなったら母親らしく抱きしめてあげようか、それとも父親の様に手を出だしてみるのもいいのかしら」

どちらでも面白そうと笑ったのは、自分の事しか考えない、同時に欲望の化身のような女だった。誰も見ていないところだからいいが、ここまで邪悪の似合う魔女もそうはいないだろう。

その表情を見られていたら、息子ならその場で殺し合いでも開始したかもしれないほど、覇王は邪悪であった。

「そういえばあの子の名前は何だったかしら、適当にえーと夫が、どっちも名前忘れてしまったけれど、必要なかったものね、仕方ないわ、今度あったら聞いておきましょう」

黒のローブの中でぎゅっと手を握り、ファイトだ私と言ってみるが、その見た目だけなら娘よりも幼く見える魔女。

十二、三の子供は、深くローブを被り顔すら今は見せない、本来ならば将来に期待といいたいあどけなさの残った造詣は、夫からすれば酷い若作りなのだろうが、この時期が一番美人だったと言い張る彼女は、そんな状態で愛らしく笑いながら悪意を吐いた。

これが覇王と呼ばれる魔女の正体、己の年齢すら操り、すでに三桁を生きた伝説の魔女だ。そんな彼女に倫理観を求めてはいけない、ただ優れた子供を生みたいと剣聖と関係を持ったような女だ。

そして娘との関係ですら、もっと優れた子を生む為に必要な行為とすら思っていた。

「けれどどうせならあの子の種のほうがまだ役に立ちそうだもの」
失敗作と思っていたけれど、存外放り出して逆境に放り込んでみれば存外成長すると笑って言ってのける。
はっきり言えば夫が息子のいた男爵家を没落させた時、いや男爵家を皆殺しにした時、死んだはずの息子は、彼女にとって望ましい方向に成長してくれた。

「あのことの間に子供を、私よりもそっちのほうがいいかも知れない、私やあの人の様に雑種よりは純血よね、血を一度純化させてそれから、ああもうなんて楽しい日々なのかしら」

あの子もきっとお兄様との子供を望むに決まっていると、あのとろけた顔から簡単に想像がつく、太陽の光すら飲み込んだ純粋な欲望は、完璧を上回る様に策をくるませる。
何よりあの焦がそう望むのは理解できてしまった。

「本当に流石は我が娘、存分に魔女の血を引いているようで幸い」

もっと優れた血を欲しがるのは、魔女という種族の呪われた性だ。
そう考えてみると、最初から彼女の愛しい娘は、兄のそれに気付いていたのかとすら思う。ずっと一緒に暮らしたいと、それは今まで幼い優しさだと彼女は思っていたが、その時嫌でも体が震えた。

だからこそあの夫は娘を盗られまいとあそこまで動いたのかと、彼女はようやく理解した。

「素晴らしい、本当にあの子は素晴らしい、なんて酷い淫売なの、ああもう流石、流石、本当流石は私の娘」

自分の仮面すら剥ぎ取り飛び跳ねるように彼女は喜んだ。
言っている言葉は、殆ど罵倒に近いが彼女なりの褒め言葉だろう。なんて凄まじいほどの売女なのと、だから父に体を開いて兄を産もうとでしていたのかしらなんて笑って言ってのける母親は、ずいぶんと酷い言い様だが、彼女にとっては本当にうれしいことなのだろう。

「ああっそういう意味では本当に私は魔女として、随分と貞淑な女なのかしら。息子の可能性を見切ることも出来ないなんて」

抱いてあげればよかったと、この女も笑ってくれた。
こんな母親だとは誰も思いもしないだろう。見た目は子供なのだ、そんな子供から発せられる言葉は、あまりにも酷い言葉ばかり。
死んだ夫の事などきっと彼女の頭にはもう入ってもいない。素晴らしい娘の完成度を喜び、それに続く種が優れていることも理解した。

「ああどうしましょう。式場の準備がいいの、それとも初夜の準備、子育て、ああ違うわ、そう、これよこれ、解剖と保存をしないと、ある程度ましな子供を生む為にあの人の種を確保しておかないといけないものね」

そして息子のそれも、ちゃんと生んであげるからと彼女は優しく名前も知らない自分の子供をみる。父親の死体に興味も無いのだろう、彼の勝利宣言を聞くと、観客からの罵倒が響き、それに押し出されるように控え室に戻るセンセイ。
親子そろって熱に浮かされた視線を向けられている事にも気付いていないのだろう。

同時に気付きたくも無いのだろうが、たった一試合で彼を取り巻

く環境は随分と変わってしまった。
結果に呆然とする王や重鎮、そして発情するように覗く覇王と軍神。
死をとして戦ったものに対する祝福など無い。ただの失望だけが、結局あたりに立ち込める、所詮剣聖も堕ちたものだと、かつての英雄の斜陽は一瞬にして決まり落胆のため息を誰かが吐いた。

それでも最強が、彼らの視線の先には新たな英雄がいる。軍神という絶対的な英雄が、誰よりも愛らしく笑い魅了するその姿に、先ほど英雄を殺した彼が似ているという事実に気付くものは誰がいるのだろうか。
同じ灰色の狼の血を引いたその色に、男と女という骨格の差がそれを隠しているだけなのだろうか、所詮遠目からでは兄妹もよくはわからないものだ。

敗者が無様に転がったままだというのに、次に戦う最強の闘いに、誰もが剣聖のさいごをいつのまにか忘れてた。彼を慕っていた者も多いはずなのに、そんな人物達さえ巻き込んで彼女はここにいる。
淫売と母親に尊敬され、剣聖からは純粋な愛情を、兄からは格別なる殺意を受けて育った絶対は、ただ腕を上げて彼らに手を振る無邪気なその姿にさらに熱狂の渦に包まれる民衆は、今日一番の歓声を上げていた。

「なんと我が娘は淫乱の気もあるのか、なんとも素晴らしい、男も女も構わず、そんな魔女初めて見たわ」

そんな本来なら英雄の凱旋のような時に、あいもしない言葉を彼女は使う。だれかれかまわず魅了する、それは彼女の言うような魔女ではない、だと言うのに、淫乱と褒め称える。
娘は知らずに笑っているが、それでいいと彼女はうなずいた。

聖女であってもいつかは火炙りにされるのだ。だったら魔女が英雄でも何の問題も無いのだろう。それはそういう性に生まれた者の防衛本能なのかもしれないとその程度にしか、生粋の魔女である彼女は思わない。

だが少しだけ自分と彼女の差に、わだかまりが生まれるが、それはきっと嫉妬の類。しかしそれを上回る愛娘アイシャの成長に感動の方が沸き立つのだ。

今になって思う死んだ夫に対して、なんて素晴らしい夫だったのだろうと、こんな完全な存在の種を用意してくれてと、まだに改選は始まらないと言うのに、この熱狂にがんばるよーと手を振って見せる軍神は、無駄に民衆の感情を沸きたてた。

静かにしてくれと言うつもりで行った行為は、まるで音の波でも発生させた様に彼女を浚う。壁のように発せられた歓声は、小さな体躯の彼女をあおる様に、目を丸くさせた。

もうとあきれるように呟き、民衆へのパフォーマンスを終わらせると。王の護衛をほかのものに任せ、試合場に飛び降り、大切な父を血まみれになりながら抱きかかえる。

ご苦労様と優しく呟き、転がった首の頬にキスを、どんな姿になっても父親に対する献身を忘れていないのだろう。

もう死んだ男は、それだけで救われるのかもしれない、守ろうと思って必死になった形相は少しだけ柔らかくなったようにさえ思えた。

それに民衆は少しだけ動揺するが、彼女の頬に伝う涙が、父との最後の別れをしたことを教えると、しんと今までの失望すら消し去って、葬送の空気を漂わせる。

この男は彼女が生まれるより前から国を守り続けてきた男だ。本

来ただの英雄の動作如きで熱狂するべきものではない。
誰かがありがとうと囁く、それがポツリポツリと、周りに伝わり、感謝の雨が降り注いでいた。

剣聖は彼らを守り続けてきた偉大な英雄だ。
ここに現れて死ぬまで、彼は国を守護し続けてきた偉大な男だ。
最愛の人に抱きかかえられて、ゆっくりとその人生に幕を下ろす。

拍手が響きその英雄の最後を飾る、娘に溺れた父親では会ったかもしれない、息子を嫉妬のあまりことごとく破滅させた男だったかもしれない。
しかし彼のなした功績は全て賞賛に値し、この拍手を受け取り、最愛の人によって救われてる価値があるものだった。

それがこの世代に残った古豪の英雄の最後であり、敬われるべき男の本来の終わり方であった。

七章　それが家族のあり方なのか（後書き）

お父さんをフォローしたつもりだけど、どうなんだろう。

八章　自分を測る定規

控え室に戻りゆっくりとした息を吐いた。
己の武器すら抜かずに剣聖を切り伏せた惨敗と言う名の剣士、御伽噺の体現者となったそれに対して、奇異の視線が向けられないわけもなく、なんとも控え室に微妙な空気が流れていた。

彼らは聞きたかった魔法使いならいざ知れず彼らが剣をつかさどるのなら、どうやってそれを身に着けたのか、彼らは問い正したかっただろう。なにしろそれはある意味では剣を極めた一つの形だったのだ。
だがそんな技術を彼は小手先だと思っている、過去の再現とはつまりは未熟な自分の剣を使うと言う事だ。それでどうにかなるような敵がこれから出てくるわけがない事を理解していた、あれは誰にも見えないところで、不意打ち紛いに使うからこそ価値のある技術であると、彼は思っている。

未熟な自分の剣で勝利を得ることが出来るほど甘いわけが無いと、それは彼の言うとおりだろうが、鍔迫り合いからの回避不能のタイミングの斬撃など使い道は様々であっても、その使い方を彼は認めることが出来ない。
彼が殺すべきそれは、その程度の小手先ではどうにもならない理不尽なのだ。
過去の剣が彼の生涯だとしても、その程度でどうにかなるほどあの妹は軽くないと、だがそれは彼が自分で手に入れたはずの力だと言うのに興味が一切無い。

雑魚をさらう時には使い勝手のいい技程度の感覚なのだ。
実際にここにいる全ての剣士が一度見たならあれをどうにでも出

来る存在ばかりだ。だから見せた。これより数戦のち彼はあの妹と殺しあうのだ。
だから自分を無理やりにでも高める必要があった、小手先ではなく自分を磨く為の時間の質を無理やり伸ばすしかなかった。

「そのために犠牲になって貰ったんだあの人も」

半分は復讐だったが、それぐらいの感情を交えてもいいだろうと思う。あの人がこちらをかまわなければ、間違いなくこんな事にはなっていないのだ。
そう思えば自業自得だと、軽く鼻で笑ってみせる。少しだけ過去の溜飲を下げられた気がするが、根本的にはただ殺すだけの人だった為、どうにも復讐と言う感覚を抱けずにいた。

自分がこうなり果てたのはあの人の所為であったと言うのにと、その事実に困った顔をするが、何一つ父親には感情がわかなかった。それにそんな事を気にしても、自分が変わることがない事ぐらい分かっているのだろう。
歓声の奥ではまた妹が人を引き連れる行動でもしているのだろうが、無自覚なくせに随分と先導がうまいと彼は笑っていた。見えもしないと言うのに妹の行動なんて、大体が絵本中に出てくる英雄の行動を予測していれば正解なのだから、本当に何かに作られたような精巧さだ。

選ばれたと言うが、神が思う完璧をつめこんで作った人形のようにさえ彼は感じてしまう。
そんな彼女の有様が、彼にとって不快なもので、彼の暗い劣等感を苛む。あれは生きていてはいけないものだと、拒絶反応を体が起こすように、彼の体は細かく震えていた

それがいまさらの勝利に対する余韻でないことぐらい当人も理解済みだろうが、頑張るといった意地だろう、頬が歪みながらも笑みの形を作り上げようと必死だ。
前進はしているのだろう、卑屈であろうとなんであろうと、神経痛で歪んだような笑みだが、妹を思い出して笑顔を作ろうと考える事が出来る様になっていたのだ。それぐらいには強情が晴れるようになったのだろう。

追い込まれないと行動できない自分がひどく滑稽に見えたのか、笑おうと努力だけはしてみせる。心にあるそれが自分を台無しにしていくのは分かっていても、抗ってみようと必死になる。
目に見えて分かる自分の成長に自分はつくづく、誰かにしりをたたかれなければ動けない馬鹿だと納得させられた。
痛感させられる、人は一人じゃ生きていけないのだと、ただ自分を鍛えるように細く鋭くと必死になってきたはずの彼は、思い違いでもしていたんじゃないかと、今までの苦労を馬鹿にしたくなる。

ただ人がいるから、そしてその人の中に認めて欲しいと思った人が出来た、行く先のない支えてくれる杖を彼は目にして、目の色を変えて努力を始めた。
今まで悪かったわけじゃない、今までがあるからこそ彼は、繋がりを人一倍感じて必死になっている。

希薄だったからこそ薄い糸にさえ過剰に反応してしまう。
その反応こそが彼を変えて動き出させる力となるのだから、元々人に依存傾向の高かった男だ、それが化学変化を起こして成長の材料となっているのだろう。
そもそも妹を殺すと言う絆しか持ち合わせていなかったような存在だ、他の感情を与えるつながりが出来ればもろくとも手を伸ばし、その糸が切れたとしてもあさり続ける。

何かによって壊れた心は、人の絆によって少しずつではあるが、その心を取り戻そうとしているのかもしれない。だがそうだとしても彼は、その壊れた心を引きずり出して向かい合うことが必要なのだろう。
多分それこそが呪い、妹を殺そうと決意させた、そして妹に狂うほどに怯えた要因はそこにある。

だがそれに向かい合うには彼はまだ弱い。
弱すぎる、彼を尊敬のまなざしで見るものもいるだろうが、そんな人物達よりも齢の抱かれは、きっと彼はこのまま戦えば、メッキがはがれると確信していた。

「弱いな、本当の俺は弱い」

そう呟いてしまうのも仕方のないことなのだろう。
笑顔を刻んで反抗の態度を見せても、引きつる様な表情には、何より震える体は、彼の心の弱さをいやいや回りに見せ付ける。
人を殺したことがないのかと思うほど、真っ青な顔と笑顔、そして震える体、だがその線は薄く、薬を使っているのではないかと言う疑問のほうが周りには浮かぶだろう。

だとしたら随分きめて掛かったものだ。
しかしそうとしか思えないほど彼は色々と変貌を色濃くしていたのだ。少しばかり周りもそういう関係の心配をしてしまう。
確かに中毒症状のようだが、それでも今の彼は恐怖に抗っているのだ。

「何だあんた薬でもやってんのか、顔真っ青だぞ」

その中の一人が話しかけてきた、神童であるが、今の彼がその程度でどうにかなるほどまともではないことぐらい誰でもわかるだろう。

彼の言葉に対して首を横に振る、やってないさそんなものと、震えながらも口に出そうとするが、どうしても声が出ない。

啖呵を切ったときとはまったく違うその弱弱しさに、本当に薬に逃げているように思えてしまう。あれほどの嫌疑を納めた男は薬に逃げるような男であろうかと言う疑問もあるが、そんな彼の状況が許せない女が声を上げる。

「軟弱な、それが剣聖に勝った男の姿か、見苦しいにも程がある」

最後の最強であり普遍の王道ラストール、多分この中で最も軍神に近い女だ。

剣聖ですら彼女には負けると断言できる、ただ実直を極めた騎士、八詩篇と呼ばれる魔法剣の中の曇天と荒天の二刀を預かる双房の騎士と呼ばれることもある。

これから後に大魔法使いとの戦いを控えていると言うのに、随分と気が立っていた。多分それは彼があまりにも弱々しく見えたからなのだろう。

仮にもここにいる剣士全てが成し遂げることの出来なかった、軌跡再現と言う奇跡を使いこなす男に彼女は尊敬すら抱いたと言うのに、ふたを開けてみればそれが嘘の様に惨めな姿。

勝者であるはずの男は、ここにいる誰よりも自分が敗者だと言い張るように存在していた。

「それが魁たる男児の姿か、誰よりも剣を極めている男の様とは思えん、あれはなにか私たち未熟な剣士に対する侮辱か」

尊敬した男の姿がそれだ、ましてやあの技術を見れば分かる、剣と言う技術においてなら、王国の深遠に立つ傑物だと、そう彼らは見せられていたのだ。
分かるだろうか、誰にも勝てないと思っていた軍神の年齢以外の分野で勝利を収めたようなものなのだ。

そう尊敬した男がこうなったら怒りしか覚えなくても仕方ないと思われるが、それを真正面から表現して見せたのは、彼女ぐらいだっただろう。
闘いには間違いなく不向きな長い髪に、女性としての意地を刻んでいるのか、赤茶けたその髪の色は、荒野の様に枯れた風に靡く様にかさりと舞う。

どこで剣を習ったのか追求したいほど傷の体や顔に、本当に鍛えているのかと追求したくもなるが、逆に傷がないことが彼女の強さの証明なのだろう。
ただ真っ直ぐに相手を見据えるその姿には好感すら抱くが、意志の強すぎる瞳は視線の強さに大抵の人なら目をそらしてしまいたくなるだろう。後ろめたさがなくても、彼女の真っ直ぐすぎる態度は、妹とは違ったベクトルの正しさだ。

「剣聖を倒すほどの使い手なら、前を向いて真っ直ぐに前を見詰めて、慢心なく次の為に磐石に備えるのが常ではないのか、お前のしているのは自分は弱いんです、だからかまってくださいと言っているようにしか私には思えん」

不愉快だったのだ、そこにいる男は自分よりも優れた何かを持っているのに、僕は何も出来ませんと怯える姿が、自分達に挑戦を仕掛けておきながら、終わってみればそれかと思うほど弱い心。

強さと背反するような姿は、彼を一瞬でも尊敬したものには、不愉快にしか感じられないだろう。

「不愉快だ、そして何より惨めじゃないのか、それだけの才覚を持って何に怯える、何に怯えるのだ」

そんなの決まっていた、彼は怯えていたのではない、抗っていたのだ。

確かに周りには怯えているように見えるだろう、彼らが敵にしない敵を彼は敵とする。その圧倒的な存在は軍神、たった一人だけ神の名を与えられた人類の反則。

弱く見えて当然だ、弱いのは当然だ、自分は軍神より弱いと言う自覚、恐くて仕方がない、全部を台無しにされると分かっていてそれをやるのだ。

しかし彼女達とは違う発想が、彼を弱者たらしめている。

神童や彼女のような真っ直ぐとした心が欲しいと、それが出来ない事がわかっているのに太陽に手を伸ばし、月に手を伸ばす、届かないと分かっているの何度でも。

「弱いんだよ、弱いからさ、俺は弱いんだよ」

心が、いこじになった心が、本音をポツリと漏らす。

あんたらよりも俺は絶対に弱いと、だがそれを彼らは否定したいだろう。どうやればあんなふうに彼らは剣を触れるか問いたかった、御伽噺すら再現する力があるというのに、何が弱いと。

「なにがだ、どこが弱い。貴様は私達よりも上にいるのだぞ」

「どこがだよ、この中で一番無様じゃないか、この中で一番惨めじゃないか、この中で一番汚いじゃないか、なによりこの中で一番弱

いじゃないか」

剣の腕じゃない、そんなのは戦闘だったらどうにでも覆せる。
心が、心が、その何度も折れ果てた心が、心だけが、その無様なまでに足掻く心が、壊れすぎて壊れ尽きた心が、その誰よりも弱いのだ。

何をだと誰もが問いたいだろう。
その奇跡を成し遂げた体現者は、自分が誰よりも弱いと言い張る。敵に会うだけで怯える心が、その敵のために動いてしまう心が、泣き出して名に病まない心が、そのうちの闇を誰も知らない。
殺す為に鍛えたそれは、彼の確かな力になっても、支えにはならなかった。

「何を言っている、ふざ、け」

下から見上げるその瞳は、どろどろと腐った泉のようだ。水流すらなくただたまった水が、異臭を上げて悲鳴を上げる。
つねに真っ直ぐと人を見据える彼女は、初めて自分から目をそらしてしまった。だから理解させられる、彼の弱いと言った意味を、嫉妬の混じったその瞳がどれだけ歪な物か。

「ちょっとまて、弱いのはいいが、そもそもお前は誰と比べているんだ」

神童がその目を見ながらも、二人の間に割って入り仲裁しながら自分の疑問を漏らす。
この中の誰よりも弱いと、それ以前から彼は自分が弱いと言い張っていた。だからこそ疑問に思った、誰と自分を比べているんだと。
それはきっと神童と呼ばれた彼が、昨夜彼と会ったからだろう、

その時から色々とおかしかったが、自分が弱いと言い張るところだけは変わっていなかった。

「誰って、それはあなた達」

「違うだろう、お前は確かその前からそんな調子だっただろう。昨日あった時だって」

本質はそこだろう、そもそもだ彼の心なんて誰にも分からない。

しかし誰もが思うのは、誰と比べていると、彼と少しだけ繋がった関係を持った彼だからこそ、いち早くそのことに気付いたのだろう。

いくらなんでもおかしいだろうと、少しは自信を持ってもいい、驕れと言っているわけではないが、それでも誇っていいはずなのだ彼のその成果も実力も。

軌跡再現とはそれぐらいには価値のある証明なのだ

「なによりあんなことが出来るんだぞ、なんでそこまで」

「あんな小手先の技なんて要らない。そんなものに価値なんてない、あの程度で届くはずがないじゃないか」

しかし彼は容易くそれを小手先の技術と言い張る。

流石にこんな事を言い張れば、周りの空気も悪くなるが、彼はそんな当たり前のことを気にしない。

だが対人能力無い彼だ空気が読めない。だから当たり前のように言う。

「自分の未熟な過去を使って意味があるとは思わない。あれは不意打ちの為の技術だ」

そう容易く言ってのける。御伽噺に伝えられたそれを彼は、未熟を使って何の意味があるという。
彼らが憧れたその境地を彼は否定する。あんな物はまがい物の暗殺者の技だと。

「あんなものあなた達にも通用しない。なにより」

一度区切った、言っていいものかとも思ったのだろう。
仮にもあの軍神はこの国における英雄だ、そして目の前にいる彼らの尊敬するべき存在。何より勝利を考えてはいけない反則。下手をすればそのまま襲い掛かられないとも言えないのだ。
だが思案しても欠課は変わらないだろう。
神童も王道も、ある程度察しはついているにしろ、口に出すまで確信がもてない。だからこそここで彼がお茶を濁すと言う選択肢は無い。そういう選択をさせてくれない。

困った顔をして仕方ないと心で呟くと、恥じることは無いと、先ほどまでの薬物中毒のような状態を振り払い。

「軍神には全く届かない無用な技術だ」

彼の比べ続ける肉親の存在を彼らに告げた。

八章　自分を測る定規（後書き）

遅れてごめんね。そろそろ過去の男爵家反乱編が始まるよ。

九章　負け犬と負け犬

それはどう言う事だと、誰かが呟いた。
比べる必要のない最強、理不尽の塊、対国家専用兵器、万人の慈母、様々な賞賛と恐怖を並べ立てられる軍神。
生きながらの神とさえ言っても過言でない相手を、彼は敵として見ていた。

それを当たり前のようにいってしまった彼の言葉は、まるで高度な冗談を吐いている様にすら感じる代物だ。
起こるのは失笑に近い何か、それ以上に何を言ったのか理解するまでの処理のほうに彼らは追われていたのかもしれない。ぽかんと開いた口は、まるで彼をあざ笑うように歪み、一人心の弱い男は視線をそらしていた。

見たくない物を見せられるようだった。彼はこういう目を知っている、理解ができない、それ以上に意味がわからないだろうか。
馬鹿なことを言っていると思われるならいい、それはいわれて仕方のない行為だ。だがそれ以下に見られるのは彼もいやに決まっていた。
理解できないと思われるのがいやなのだ、なんであれと戦う事を考えるのと聞かれるのが一番いやだった。

国を理不尽に蹂躙して打倒しておきながら、その国の人間に支持されるような反則になぜ敵意を抱けるのかと、そもそもなんで彼女を敵と見れるのか、誰もがそう言う目で見てくる。
それがいやなのだ、自分だけがそう思う、誰もが妹の味方をして自分は異常者として見られる。

じりじりと心が焼かれる、それが嫉妬であったのは言うまでも無いが、それが彼の表情を酷く歪にさせていた。何で彼女を敵に出来るのと不思議な目で見られる事だけが彼は許せない。

自分だけが異常者だ、まるで世界に一人だけと言われるような虚無感に、心が悲鳴を上げて、その場で喉に刃を突き立てたくなる衝動に駆られながら、嫉妬の感情が彼の命を救う。

不思議な話だろう、ここにいる群を抜いた使い手達の中でも彼女は別格だ、何より一番の異常事態は、それほどの使い手が彼女と戦い勝利を目指していない事実。

ただ一人軍神の刃を届かせると言った男を、彼の憧れた神童すらも視線で言う、どうしてそんな風に思うのと。

世界で一人、もっと言うなら妹は世界中が味方、頭の痛くなる苦痛が、この場で悲鳴を上げさせそうになる。

何一つ無駄だと言われているようだ、沈黙だけが降り積もる中、容易く起こるはずの雪崩も無く、誰もが彼をまるで化け物のように見ていたのだ。言っていることは誰もが理解が出来るが、なぜそうなるかが分からないと言う顔、軍神となった妹はすでに彼らにとっては、戦う相手ですらなくなっているのだ。

ここが、国の最強を決める戦いの場であったとしても。

「わかっていたけど」

つらいと嘆く、見たくなかった物だけが見えてしまう。

憧れたものすら軍神には、無意味だと言う事実が刻まれる、ああなりたいと思ったはずのそれすら、それは飲み込んで強大になっていた。

何でなんだろうと悩む必要もない、それが妹なのだ、居ても居なくても彼を食いつぶす、史上最強の存在。

そしてまた刻み付けられる。

神童ですらやはり及ばないと言う事が、憧れが台無しにされて怪我された気分に、喉の奥から悲鳴がこぼれそうになるのを嫌でも感じていた。

それを押し込めるのは誰も理解してくれないと分かっているからだろう。

軍神とは人を魅了する聖女でもある、何一つ彼がかなうところなんて無い、彼女の汚点の部分が彼といってもいいぐらい、完璧な存在。

ここで千の言葉を弄しても届かず、万と言葉をつないで絶望させられるだけ、この世の完全無欠が彼女であると、彼女からこぼれた悪意の結晶は、吐き出したい感情を飲み込みながら、それでも溢れる憎悪に腐臭すら混じった嫉妬の目を下から見上げて彼らを射抜く。

お願いだからそんな事を考えてくれるなと、必死に頭を下げながら彼は願うのだ。

お願いです、そんな事を考えないでくださいと、あれは完璧なんじゃない、純粋無垢なんてこの世には無いんです、完璧なんて無いのです、お願いだからそう思わないでくださいと。

だが意味は無い、彼女は完璧で、完全で、絶対であるのだ。

人という種族に対して完全なまでに優位に立てる反則の結晶は、彼の憧れなど関係なく容赦の無い大波を持って浚って行った。

ああなりたいと思った、そうなればきっとこんな事を考えずにすむと、無意味だった、何一つ欠片も絶やさず彼の希望を焼き払う。

惨めだった、涙がこぼれ溢れる筈の心が、ぎしりぎしりと軋みを

上げているのが嫌でも分かった。壊れる本当に後もう少し力が入れば彼の心は壊れてしまう、それを救っているのですら妹である。

ただ妹にささげる唯一の感情が彼を救っている。

ここまで落とされても彼が足掻ける理由はそこだけだった、また奪ったなと、お前はまた俺が大切にしたかったものを奪ったなと、このときばかりは彼女が目の前にいたら叫んでいただろう。

殺してやると、お前だけは絶対に、殺してやると何度でも叫んだだろう。

今も変わらず彼の憧れとして存在してしまっている神童は、ようやく彼の言葉を飲み込んで理解しただろう、周りと違い笑顔になった。

感情では否定しただろうが、それでも彼は嬉しかったのだろう。その浚われた心すらも元に戻してしまうほどには、魔剣を殺した男はさらに上の軍神とすら戦おうとすると考えて、彼は本当に嬉しかったのだろう。

その男は自分ではどうにもならない戦おうとすら考えない相手とすら戦おうとする存在だと思って。

「そうか、すごいな」

気付かぬ内に彼は言葉にしていた、すごい人だった、自分の無力を認めた上でそう言えたのだ。彼は軍神と戦うなんていえない、はっきり言ってセンセイのいった言葉すら、最小は正気を疑った人間だ。

彼は眼前で一度軍神を見た男だった、戦う前に屈服してしまうと感じたそれに、彼のライバルだった男を殺した存在は、それと戦おうとしていたのだ。

あれと戦おうと考えることに賞賛を感じてしまう。あの理不尽と戦おうと考えることに、それなのに弱いという男、どこまで自分が弱いと進行する存在は、常に比べるものが強大すぎるのだろう。
同情染みた視線を向けるが彼がそれを望む事は無い。

それに神童の言葉を彼は耳にも入れていなかった。絶望が深ければ深いほど彼は孤独にしかなれないのだ。
奪われたと絶望したまま彼の耳には届かない、ここで誰が何を言おうとも絶望への伏線だけが練られて行くだけ、本質的に自分が孤独であることを知っているからこそ、理解されるということを彼は考えないのだ。

今までの人生が彼をそういう人間に変えてしまっている。
そんな事も知らずに、彼は賞賛を感じ次の戦いに負けられないと再度思うのだ。そんな事を理解できるはずもない男は内に燻る感情のおかげで自殺せずにすんでいるだけだった。

「正気か貴様」

そんな彼に追い討ちを掛けようとするのが王道である。
彼女にとって軍神は幼くても憧れの存在だったのだろう、完全に異物を見るような目で彼を見ていた。
真っ直ぐ、それた常に正しいとは限らない証明行為が、彼女の口から吐き出される。

「勝てるわけが無いだろう、あの御方に」

誰もがきっと同じ考えだろう、殺したいと願う彼ですら同じだ。
彼女からしてみればそういう発想すらできない存在、それが軍神

であったのだ。だからこそ当たり前のように、聞きたくもない言葉が耳に入ってくるのだろう。
分かっているのだ、勝てもしないことぐらい、今のままでは自分の刃が届かないことぐらい、全部、全部分かっているのに、お前には無理だと告げてくる言葉は心に突き刺さる。

「これが軍神のお披露目と変わらないのを知らないのか」

あそこまで真っ直ぐな人間ですら変わりは無い、平等に軍神は魅了し飲み込んでいく。
恐い、どうやって荒れはあんな風に成れるのか、彼は恐かった、自分もこうなってしまっているのではないのかと、恐くて何もいえなくなりそうになる。
大声を張り上げて耳を塞いで、子供の駄々の様暴れたくなる、そんな彼女に負けるよりも恐ろしいことを彼は考えてしまったのだ。

「ここにいる全ての存在が彼女に及ばない事を理解しているというのに」

あの妹に会った時、心が折れたのも全て、そのための前兆じゃないのだろうか、考えれば考えるほど、あの存在の手の中で踊っているだけのようにすら感じてしまう。
比べることすら出来ないその反則に、ここにいる人間は勝利の言葉を、なにより挑むということすらも忘れているのではないだろうか、そう考えるぐらいには軍神の威光は凄まじいものがある。

「極めた程度で彼女にかなうはずが無いだろう、そう言う存在じゃないのだあのお方は」

黙らせよう、これ以上言葉を聴きたくないと、彼は心にそれだけ

を考えるようになる。
誰一人王道の言葉を否定するものは居ない、それぐらいに彼女は絶大なのだろうが、それを認められるほど、センセイと言う男は聞き分けが良い訳でもない。
何より聞けば聞くほど、いつか自分もああなるんじゃないかと言う恐怖と、本来であれば彼女の様になる筈だった自分の姿の様で、身震いするほど、それがおぞましく見えていた。

口か震える、耳を澄ませばきっと恐怖で歯の根すら合わず、カチカチと負け犬の証明が響いていたかもしれない。

「負け犬は黙っていてくれ」

だが本来負け犬の男は、聞きたくない言葉を塞ぐ為に、喧嘩を売ってしまう。
それが一層、周りの空気を悪くさせるという事ぐらい分かっていても、彼は自分が憧れた存在たちから、妹の賞賛なんて聞きたくなかったのだ。
自分だけの特別であって欲しかった、誰だってそうだろう憧れは特別であって欲しい。だがそれが凡人に成り下がる時、失望以外の感情が抱けるだろうか。

そのための言葉ではあったがあまりに辛辣すぎる言葉でもある。
彼女が否定した言葉を全て彼は一言で斬って捨てた。空気が悪くなど頃の騒ぎじゃないだろう、ここに居る人間全てを負け犬扱いしたのだ。
それだけならいざ知れず、その事実を否定できないような発言をしてきた王道は、言葉も泣くただ顔を真っ赤にして殺さんばかりに彼を睨んでいた。

神童が一人、目を丸くして驚かせていたが、彼ぐらいだろうそれからすぐに笑えたのは。
否定させないのだ彼は、そのタイミングで言い切った。言葉の全てが負け犬といって過言ではない王道の発言、いやおうなしに自分でそれを認めた顛末。

結局のところ、軍神という膨大な壁を敵として認識していたのは、心が一番弱いくせに抗い続けたセンセイと言う存在だけで、他は戦わずして軍神に負けている者達と言う、あまりにも分かりやすい壁が出来たのだ。
彼らも気付いてなど居なかっただろう。当たり前に、軍神は強すぎて比べる対象ではなく崇拝の対象だったのだ。

自分よりも幼いそれに彼らはそんな感情しか抱いていなかった。
敵にするのすらおこがましいと思っている者ばかりなのだろう。そういう絶望があったからこそ彼は、全てのことを聴きたくなくて耳を塞いだ。
世界が無音だったら良かったのにと思うほど、このノイズばかりの世界を拒絶した。

「否定できないなら、最初からこの場所に来なければ良かったんだ」

一触即発という状況に変わりつつある、だが彼らはここで剣を振るうことは出来ないだろう。何しろそれを行えば自分達で認めてしまうことになるのだ。
負け犬であると、彼の言葉の全証明を自分たちでしてしまう。かといってそれに対する適切な反論が彼らにあるわけでもない。

彼らとしてもセンセイの言葉が聞きたいものではなかっただろう。
殺してでも黙らせる必要がある程度には、彼の言葉もまた真理を

突いていたといえるのだ。

「お前に軍神を倒せる力があると言うのか」

苦し紛れの王道の言葉、だがそれは彼にとっても言いたくない部分だ。

この男は嘘が付けない、というよりもうその意味を分かっていない。強がりであってもここではあるといえばよかったのかもしれない、そうすればまだうまく回っていけたのかもしれない。

しかし彼はそういう人物だったからこそ、抗うことを止めなかったといえるだろう。

「ない、俺はあんた達より弱いんだ、ここにいる誰より弱い」

どこがと神童は思った、その卑屈な心の癖に、彼ら聞けば気高い宣誓のような言葉。

自分で弱さを認めることの出来る剣士が、居ること自体が奇跡のような話だというのに、それでも強くなろうと抗い続ける精神は何より崇高なものではあるのだ。

「でも、それでも譲れないものもあるんだ」

心の弱さは弱点であっても止まる理由ではないと言い聞かせていた。

何度も心に言い聞かせていた、止まる要因であったとしても、諦める要因じゃないと、この時言葉を後に生き残った者達に深く刻まれることになる言葉だ。

「俺は純粋無垢も完璧も絶対も何一つ認めてなんか居ないんだ」

己弱さを自覚し続けて、逆に弱くなった男の言葉は、なぜか心に深く残るものになってしまうのだった。
彼のこの言葉に反論が出来たものは居なかった。この後に軍神と戦う無双だけが、その言葉を聞いてどう思ったかは分からないが、一人として彼の言葉に対して、反論できたものはいなかっただけの話。

「俺はあんたも十分強いと思うんだけどな」

神童は呟く、悪かったと席をはずしたセンセイに向けて。
彼は弱いなんて思わない、十分に強いじゃないかと、困ったような顔をする。先生の言葉を聞いて思ったのは、勝てる気がしないだった。

「不可能に挑み続けるなんて、弱い奴が出来ることじゃないんだぞ」

そして困ったように出された言葉が、彼に届くのは明日の昼、センセイと神童の闘いの中での話しになるのだが、それはまだ遠い事である。
そして少しばかり考え込むようになったほかの参加者達、彼らは心に残り続けるのだろう、先生のいった言葉、軍神を敵として抗うことについて。

ただ不思議なことに、一人を除いて誰もが軍神よりも先に、彼と戦ってみたくなったと言うなんとも不思議な結論に落ち着くのだが、それは別に悪意などではなく、その必死な男と剣を交えれば彼の言ったこの場の結論を出せるような気がしたからというだけである。
それと負け犬と自覚させられた仕返しぐらいの考えだが、一人を除いて随分と楽しげな顔であったのは間違いない。

「異端め」

王道　ラストール　彼女をのぞいた誰もが、確かにそう思ったのだ。

九章　負け犬と負け犬（後書き）

ようやくまた一人汚れてきましたね。

十章　君臨そして蹂躙

たった一人の軍神は、その寂しさを今になって感じるようになった。
体でさえ感じていた父の温かさじゃない、家族が欠けたという喪失感を感じていたのだ。いくら彼女とて死人を生き返らせるほど人を止めてはいない。
奪う事だけならば人類など超越したものだろうが、それは完璧などというものは無く、世界の所業だ。
だが死者を生き返らせる等、この世の破滅を意味するだけの代物だ。

しかし数時間前まであった温かさは既に居なく、唇に灯った僅かな感触だけが、父がいた事だけを思い出させる。しかしそんな淡い記憶も、彼女は塗り替えられようとしていた事に無意識ながらに気付いていた。
それぐらいには鮮烈だったのだ、あの軌跡再現と言う御伽噺は。
彼女はどういっても剣の求道者の一人である、だからこそ兄のやった事を見てすぐに結論を出したのだ。

あれは見た事があった、彼女と兄の最後の訓練の時、彼女はそこで思うのだ。
兄はあの段階ですでに父を越えていたと言う事実を、彼女だって剣聖の実力は十二分に知っている。あの人は剣を振られてからでも十分に感覚で対応できる人間だった。

軌跡再現は所詮だが、自分の剣を再現する技術に過ぎない。極めた人間が使えば想像を絶する話だが、極めても居ない頃の彼の剣で

剣聖が殺せるはずが無かったのだ。
なにより彼女からしてみれば、何が起こったか分からないにしろ、致命傷になるはずの一撃に対して、しかもあれほどの未熟な剣気に晒されて、受けが出来ないと言う事にさえ驚いた。

自分であれば動にでも対処できると言う判断だろう。
そんな事が出来るの僅かな人間だ、だがその僅かな人間だけをこの御前試合は集めているはずなのだ。
それが当然剣聖であっても同じ事のはずだ、しかしそれすら出来なかった。反応する事も無い速度で、多々首を切り落とされる。

兄は最低でも十二の時には父を越えていたことになる。
このときに彼女は気付くべきだったのかもしれない。あの時兄が自分を殺そうとしていた事実に、だが彼女は気づきもしない。

うわぁと、震えながら声を漏らす。
顔は真っ赤になってひどく嬉しそうなのが印象的だ。しかし周りはそれが見えなかっただろう、灰色の髪で視界を隠し表情を隠すしていた。体が震えるのを隠す事も出来ずにいた。
すごいと彼女は声を漏らす、お兄様はやっぱりすごいやと彼女は喜んだ。

「あれで手加減してたなら、お兄様はどこまで上っているの、今の剣の鋭さはきっとあんなものじゃないんだろうし」

そういえばそうだったと思う、夜少しだけ合わせた剣、酷く歪んではいたが、彼女の知る兄の軌跡だった。
だがその軌跡は間違いなく、弱くはあったのだ。しかし彼女が受けた時、間違いなく二の太刀が来ると感じた、それに対して自分が反応できないという確信も。

今までよけられないと思った攻撃など彼女は経験した事すらないのだ。
だから次が見たかった、国ですら彼女を殺せなかった、その事実を拭い去る剣士がどれほどのものか。
その片鱗を見て彼女は変わってしまうのは仕方のない事なのかもしれない。

彼は間違いなく技量において妹を上回っているのだ、何を突き詰めればそうなるか分からないが、それはつまりこの世界において剣において最強という事に他ならない。
最もその程度の事が、軍神に対して意味がある訳が無いのだが、それでも震えた。今彼女の前には自分を超える存在が居るという事だ。

生まれてから今まで、常に頂点に立っていた少女は、今見上げる立場に変わったのだ。
父の死体を前に表情すら見えずに体が震えているが、周りから見れば悲しみだったのかもしれない、だが間違いなく歓喜であった。
ずっと見上げ続けた男が知らないうちに見上げられた瞬間、だがその時間が短くなるのはいうまでも無い、だが彼は今だけ完璧の一角を崩していた。

国を蹂躙し、最強を貫くそれに気付かぬうちに確かに上回っていたのだ。

「お兄様が剣を見せてくれたんだから、次は私の番。これが私ですって見せないと、なんかおいていかれそうな気がする」

無意識なのだろうが、彼女は彼との距離感に気付いていた。

それがすごく寂しい事にも、彼女に落ち度なんて何一つ無いのだ、ただ妹が兄を慕うだけ、だがそれが一番許されないという事を知ったとき、彼女の表情はどう歪むのだろう。
そしてその顔を見てどれだけの人々が彼を敵とみなすのであろう。

切り離された父を見ながら思うのは、これからの闘いで兄に見せる剣のこと、軍神と呼ばれた彼女が見せるのは、ただの蹂躙だけだというのに、それでも軌跡再現と比べても引けをとる事の無いはずの剣の形。

「ありがとうお父様」

血の香る父の体を一瞥する、その表情は少しだけ髪からかぼんやりと口元だけが見える程度だったが、薄く笑っていたような、もっと違う何かのような、だがもう一度だけ彼女は父の唇に別れを告げる。

口から溢れる生を感じない、その冷たさを感じながらゆっくりと口内を咀嚼する。
血の味などかまった事ではないのだろう、ただ丹念に慰撫するように、彼女は時間をかけていた。
彼女なりに、愛情を父に持っていたのだろう。

「本当にありがとうお父様、あなたのおかげで私は大切なものが二つも出来ました」

なんてことを少女は言っているのだろう。
ここに誰か一人でも人という物がいたのなら、あまりの事実に実を疑う事であっただろう。
自分の腹をとても大切そうに彼女は撫でている。

とても大切なのだろう、その腹の中の何かが、彼女と父と親の間の何かが、大切、大切なのだろう。
少女はすでに女だというだけだ、比較的珍しい話でもなし。
だがその言葉はもう決別と代わりはなかった。この言葉を生きていた頃に彼が聞いていたらきっと、その場で自分の刃を首に通していた事だろう。

そして今の状態と同じ末路を辿っていた。そしてその未来は確実に追い着ていたと断言するべきであろう、彼女はどうあっても彼の軌跡再現という奇跡を持って、父を捨てるのは間違いなかった。
たとえどれだけ大切な存在が居ても、彼女は彼女であり続けるためにきっと父を捨てた。

「ばいばいお父様、ゆっくり眠ってくださいね」

それで父と娘は完全に断絶した。最後の絆であるはずの彼女腹の大切なものさえきっと彼女は、絆とすら思わないのだろう。
穢れのない純粋無垢な少女、アリスといってもいいだろうか、彼女はどこまで睦言を父が囁こうと、靡く事は無い。そしてその声は終ぞ響く事は無いのだろう、彼はその言葉すらも娘になめ盗られたように、悲しげに首を床に転がすだけだった。

本来使うはずの無かった御前試合の死体安置所、五人も詰めれば限界という狭い部屋の最後の情事、彼の経歴を考えればそれがどれほど酷い扱いかわかるだろう。しかしそれぐらいにくには予想していなかった。
自分達で真剣有りといっておきながら、ただ殺しあうという意味を四方の全ての国に攻められている国が理解していなかったのだ。

これは命を削る闘いであるという事実を、これも四方を守る彼らが強すぎた事が原因だ。結果として、中央は彼らがいるからと戦時中でもありながら平和ボケという状態に陥っていた。
つまりはその不始末の結果だ、国はどう言い繕っても滅亡の危機であった。
本来であるなら四方を同時に攻められて、敵を追い払い続けるなどというのは奇跡の所業だ、消耗に消耗を重ねて疲弊し、国力の低下もやむ終えない。

それをとめたのは剣聖、君臨、不敗、死んでしまったが老子といった、四方のいずれ劣らぬ使い手たち。彼らがあまりにも圧倒的過ぎるが為に、国は戦いを忘れてしまった。
そして極め付けが彼女だ、歩く対国家兵器、字面からして反則過ぎるが彼女はそんな理不尽だ。

彼女がいれば大陸統一すら容易い、すでに制圧された北方、多少の反乱分子がいるが、彼女がいればそのカリスマでどうにでもなってしまう。
国力の増大とその背景からの国威の啓発、その全てが軍神という存在の為に帰結してしまっている。
軍神がこの国を駄目にする、あまりに尋常ではない才覚は時として破滅を用意するのだ。完璧など人間がなるべきものではない、人類が群体として存在している以上、その完璧こそが究極的には弱点となる。

それは固体としてしか存在できない。
だがそういった英雄は物語に存在する、物語にしか存在しないというべきだろうか、憧れのままで留めておくことが最良の存在。

だから人は頼ってしまうだ、全てに負けない理不尽を、軍神であ

る彼女を、気づかぬうちに頼り切って、背中に乗るだけ乗って、気付かぬうちに物代を問題としなくなってしまったからこそ。
この試合において死者が出てしまった。

剣聖が死んだ事で動揺している王もそうだ、人が死ぬという自体が容易く起きる自称だということを理解しなさ過ぎている。
そうさせたのは剣聖たちだが、王はその同様を必死に軍神でぬぐったのだ。
もう王でさえも彼女から逃れる事は出来ない。彼女の魅力は津波だといったが、それは全てを海に戻すからだ、容赦なく自分という海の元に誰も彼もを引きずり込む。

一度浚われればもがき苦しんだところでどうにもなりはしない。
ただ彼女を飲み干し呪われるだけだ、それは蔓延した国の病気だ、誰一人治ることを望まない軍神病。

完璧が故に感染者を吐き出し続ける、傾国の呪いだ。

そんな病の中心である彼女は腰に下げた剣を一度だけ会場の控え室で抜いた。
王族と近い者たちだけが使用できる専用の個室でだが、無駄に厚遇を受けるが、彼女にはそんな事には興味が無いのだろう。
磨き抜かれた刀身が鏡のように彼女の顔を映す、だがそれは彼女の剣ではなかった。
剣聖が持っていた剣、そもそも彼女はその有り得ない実力の所為か、どれだけ魔力で強化しても武器が一回使えば壊れるという事態に陥る存在だ。

それが故に武器の頓着した事は無い。
だが流石剣聖というべきだろう、彼女が懇親の力を込めて武器を

振るったとしても、罅一つ入らない。
握りの部分を少しだけ弄りながら、自分に相応しい剣に彼女は変えていっているが、その剣はかつての彼女の祖先が使っていた剣だ、銘などは無いが、十数代にわたって戦争に向かいながら刃毀れ一つ無い時点でそれは魔法剣の分類なのだろう。

父が死んでしまった今では、彼女が当主となるしかなくなるが、これで王子との結婚も破談となるしかなかった。北方の英雄の血統はこの国の防衛において欠かす事の出来ない、重要なファクターである。
その家の継承の証としてその剣を抜いて振ってみたが、流石というべきなのだろうしっくり着たようで少しだけ頬を緩ませた、彼女はここで自分の愛剣を手に入れる事になる。

「ん、いいかんじだ、これで私を見せられるかな。見ててねお兄様」

彼女は酷く可憐に笑っていた、それが彼にとっては背筋の凍るような言葉であったとしても、才能じゃないのだ彼女はすでに、一個人が人を超越する。ただ上に立つだけの呪いの完成品、それが彼女としか言いようが無い。
誰にも好かれる、誰にも慕われる、戦うまでも無く分かる断絶、それがアイシャという少女の存在だ。

「お兄様、アイシャを見ていてくださいね」

その少女から吐き出される言葉は、どうにも禍々しく聞こえるのはなぜなのだろうか。

「頑張りますから」

天下無敵の理不尽は、兄に見られる事を望んで笑っていた。可憐なままに、花が咲き続けるように、まるでの夢の世界を作り上げるような彼岸の花畑を作るように笑っていた。
それに晒されるのは、西方の魔人ザインザイツ、ただ一人軍神に抗う男に付けられた毒が効果を示すのかはわからない。
ただ彼女とて憧れる、不可能に抗う事に、勝てないと分かっているくせに抗おうという気が出来てしまった。だがそれが彼女の前で発揮されるかは疑問だ、男の毒などさほどの価値もないのだ。

武器を確認した彼女は早々と場内に入る、早く兄に見せたいと心町にしているのだろう。
そんな中だが、兄は今頃彼女と戦うと息巻いて、参加者に喧嘩を売っているところなのだが、そんな事彼女が知る由もない事だ。
ただ場内に入った瞬間、それだけで観客達は熱狂する。激しい声が、本来であれば兄のいる場所まで響いていてもおかしくなかったが、それ以上に彼の狂気が濃厚だったのか、そんな声が控え室に届く事は無かった。

観客達は王を上回るその少女に歓声を込める、信頼をいやそれを上回る依存を、彼女を見て安心する為に、その中で彼女は愛剣をなじませる為に感度も武器を振って再調整をしていた。
無双が来るそのときまで、ここまで万全に体を整えなくても勝利など容易いはずなのに、それが少しだけ観客の心に影を落とす。

控え室のいざこざなど知らない彼女は、無双を楽しげに待ちながら、一度だけ全身全霊を込めて武器を振るう。
この剣ならどこまでいけるのだろうと、その限界点を診るためというのもあっただろう。そして兄に見て欲しいという感情も、だがその一刀は誰もが目を剥くだけの話になる。その一振りで嵐が巻き

起こり、観客が居るはずの席の一角に一つの線を作り上げる。
ただの風圧だけでそれだ、何より観客に傷一つ付けないその精度、観客席の下にも人がいるはずなのにそれさえ見通してのあまりに容易く行われた神技。
恐怖を飲み込むその彼女の魅力があるからこそ、誰一人恐慌に陥らなかっただけ暴挙は、彼女に対する依存を深めるだけの結果になる。だがこればかりはそういう演出として彼女が狙っていた、分かりやすく自分の実力を兄に見て貰うために、人の賞賛を彼女は使っただけだ。

そんな賞賛とともに無双は現れて絶望する。
その愛剣が壊れていないことを確認し、どこかで兄が自分を見てくれる事を望みながら、彼女はそれでも足りないと、油断無く相手を見据えていたのだ。

「なによそれ、勝てるわけ無いじゃない」

抗おうと彼女は考えたはずだが、その程度を容赦なく埋め尽くす彼女の存在は、恐怖でしかないのだろう。
なにより敵意に近いそれを、国を埋め尽くす存在から向けられるのだ、それだけで心を折られたとしても何の不思議があるだろうか。その強大な武器さえも震えて地面に落として無双は恐怖する。

呼吸をするたびに体が震える、それこそ始まりの合図も気付かぬほどに。
だがそれでも少しの間、彼女は動かない。相手が隙だらけと分かっていながら、何度もそのタイミングがありながら、力を蓄えるように静かなままだ。

「これじゃ意味無いんだけどなぁ」

残念そうに呟く、だが彼女に飲まれればどんな使い手もこうなるのだ。

むしろ抗おうと考えるだけで、十二分に異常事態ともいえる。だがそれでも無双がはむかうのを悠然と待っていた。

しかしそんな事が起こる事はない。それを分っているくせにゆったりとした時間が流れる。

いつになったら本領を発揮してくるのかと、残念そうな顔を見せるが、挑発にすらならない。純然たる実力差が、無双に攻撃を許す事は無い。

「だめだよそれじゃあ、頑張らないと、お兄様は頑張ったよ」

そうポツリと呟くと、彼女の胎からまるで奮い立たせる様に体の中で何かが跳ねた。それが何なのか、それはいいだが、それと同時に彼女は動き、何もしないまま無双は致命傷だけは避けられた一振りによって敗北を完了させる。

結果としてみれば第一試合と同じ随分とあっけない結末というだけ。

しかしだ民衆はそれでよかった、彼女が負けないと、圧倒的な存在であると言う証明だけが欲しかったのだ。依存を深めながら彼女の勝利に浮かれ狂う、聖女、聖女様と、激しく彼女だけを賞賛するが、きっと耳にも入れていないのだろう。

ただゆっくりと鞘に剣をしまい、くるりと一度だけ場内を見回すと、残念そうに彼女は控え室へと戻っていく。

「お兄様しか私と対等じゃないのかなぁ」

完璧という孤独を彼女は理解しつつあった。
無双の怪我を癒して、彼女はいつしか自分の孤独を埋めようと躍起になっているのだ。今までは父が居たから良かった、自分の心に対して必死に盾となった男がいたから。
だがそれはもう居ない、彼女は本当の意味で自分がひとりだと理解するしかない。そしてそこから踏み出す時、軍神はさらに強くなるのだろう。

しかしそれこそが彼女を目指す男の絶望の糧にしかならないのだろう。

十章　君臨そして蹂躙（後書き）

もうね、なんというかね、あやらまないよ、今回の見所は無双が噛ませ以下という事だけじゃないかな。

外伝　彼の軌跡

ザクンザクンと首が落ちていました。
あの当時の男爵領から逃げて来た、人々はそういっていました。

血の川が男爵様の屋敷から流れていたと、人がいっぱい死にました、コロンコロンと首を転がして。
誰もがそう言っていました。
あの時、反逆者として晒され、領民ともども相当数の人が殺されたと聞いています。

彼が変わったというのはこの部分であるのは間違いないでしょう。
だがあの土地は男爵家が断絶した後、誰も入る事の無いの土地へと変わったと聞きます。立ち入った人たちの話を聞くと、その辺りに白骨が転がっているそうです。

あれから十六年以上がたつというのに、人々はその土地に戻ろうともしません。
ですが私はある理由から踏み込むしかありませんでした。そこで何が起きたのか、どうしても調べる必要があったのです。
あの日記を偶然手に入れてから、剣神である悲劇の象徴センセイに私は魅入られたのかもしれません。

彼の人生は苛烈でありました、本人はどうにも心の弱い子供のような印象が私はぬぐえませんでしたが、その家庭はまさに烈火と言うべき物であったのは間違いありません。
そして誰よりも血だけが流れる人生であったと、今までの調査で理解してしまいます。報われない物だったのは間違いないのです。

私はそんな彼の見せられその軌跡を辿っています。
軍神などの偉大な人物の奇跡を収集するのが私の仕事ですが、その中でも際立った存在は彼だったのは言うまでもありません。
この国があった頃の人々なら誰もが知る王都御前試合、その結末から起きた惨劇の数々。

その始まりの血と私が感じているのはこの死の土地へと変わってしまった旧男爵領です。
僅かな可能性でもと求めてここに来たのですが、予想以上というしかありませんでした、いたるところに戦闘の形跡が今も残って、死体が散乱しているのです。
その中でも特徴的なのは、過半数の死体の首と体が切り離されている事でしょう。誰も課もわらか無い白骨ばかりですが、殆どの死体が首と体が切り離されています。

どこか重い空気のこの場所ですが、あまりにも死因が統一されすぎていて、まるで誰か一人によって起こされた悲劇のようにすら感じてしまいます。
この悲劇を目の当たりにした筈の人は、揃いも揃って仕方なかったんだというだけでそれ以上語ってくれる事も無かったですが、もしかすると私の勘は当たっているのかもしれません。

その死体もこの領地の忠臣である男爵の館に向かうにつれてその量が増していきます。
かつては風光明媚な場所だったのでしょう、死体を見なければ牧歌的ですらある、なんとも落ち着いた場所です。
湖も近くにあり、そこから水鳥の鳴き声が聞こえていましたが、人がいなかったせいでしょうか、自然が勝手に発展して鬱そうとはしていますが、なんとも落ち着いた場所であったような気がします。

牧場などの跡地には、いまだに馬達が勝手に住まい、牛達が勝手に交配を重ねて数を増やしていました。人の営みを離れても、彼らは知られずそのまま勝手に生きていたのでしょう。
白骨がそんな牧歌的な空気に不釣合いな異様さを出していますが、いつしかそれさえも自然は飲み込んで隠してしまうのでしょう。
かつて剣神が住んだ場所を死体ばかりだと言うのに随分と落ち着いた様子で観光していたように思います。

ですがそれも中心部にたどり着くまでの話です。
そこは悪夢の精製所ともいうべき場所でした、首が転がった白骨が散乱というよりも積み重なっています。
灰色狼の紋章が刻まれた鎧を着た者達、荒鷲の紋章を刻んだ者達、農民子供もいたでしょう、ありとあらゆる存在が首を切り落とされていました。

そして頭蓋骨が、丹念に男爵の屋敷の中に並べられ、屋敷に入った瞬間私は身の毛もよだつような恐怖に教われました。
ザクンザクンと首が落ちていましたと聞きましたが、これは一つの意思によって成り立った悪夢である事だけはこの時理解するしかなかったのでしょう。

何より剣神である彼は、この事態に対して深く関わっているのは言うまでもありません。
したいから何が起きたか推察する事は出来ませんでした、ただ首を切り落とされて屋敷に丁寧に安置されているという事だけでしょう。
それこそここはカタコンベとでも言うべき場所と見るべきなのでしょう。

そして多分ですがここで死んだ男爵や、その妻、などといった人々は、彼らの寝室のやさしく安置されています。そこでこれをやったのが彼だという事だけはわかりました、何が起きたか分らないですが、この白骨の安置を行ったのは間違いなく彼だった。

証拠といわれても困りますが、彼ぐらいしかこんな事をする人がいたとは考えられません。何しろ生き残りは全て男爵領を逃げ出し身分さえ変えていたのです。

ここにいる死体達は、そう言った事すらできずに殺された人々なのでしょう。恐怖を感じたお詫びに少しの花を添えて手を合わせて彼らの冥福を祈りました。

この当時の反逆者討伐で起きた被害を調べていましたが、男爵側は全滅、そして英雄の兵士達にも随分と被害が出ていたようです。

むしろ最初は男爵側のほうが優位に物事を進めていたと聞いています。

もっともここで軍神と剣神の関係がある意味では破滅したのでしょう、軍神の初陣はここなのです。

そして剣神もまた、多分ここが初陣だったのでしょう。

彼女は気付いていないようですが、反逆者を蹂躙したのは、兄の全てをここで奪ったのは彼女なのです。

私は調べるたびに思います、剣神は軍神によって何もかもを奪われた人なのだろうと、そして軍神はそれに気付かないのではなく、彼女のやった結果が偶然、奪ったが為に気づく事も出来なかったのです。

過去起きた事を目をつぶりながら想像します、壊れても仕方のないことだと、人が破滅するには十分足りる光景がここでは起きたのでしょう。

首を転がしながら何かが起きた、この辺りには時間でも止まったように人の営みがまだ残っていますが、それはここで生まれた剣神が、きっと何かを起こしたのでしょう。あの惨劇以上のことがもしかするとここでは起きたのかもしれません。

私には区別が付けられるものではないのが残念です。

そして思うのはここで過去起きた事は間違いなく、凄惨なものであった事と、剣神と誕生に起因しているという事ぐらいでしょうか。

目をつぶれが悲鳴が聞こえてきそうな場所です、血の川が流れていたとされた当時、きっと本当に悲劇ばかりが浮かんでは消えていたのでしょう。

人が壊れるには足るだけの要因が、ここには全てそろっていました。

ここには剣神が壊れるだけの要因が全てそろっていました。

多分というより確実に私はもう二度とここに立ち寄る事は無いでしょう。ですがこの光景は忘れられそうにありません。

ここで一度だけ私は一晩を過ごします、その時に彼の日記を見ていました、男爵領に居た頃の彼は随分と楽しかったのでしょう、帰る前に一度日記を見ながら散策しましたが、そこには彼の軌跡が確かにありました。

ここで必死に生きてきた、剣神と呼ばれる前の少年の軌跡が。

十一章　一本足で立つ者

試合があっさりと片付く数分前の話だ。
一人捨て台詞を掃きながら控え室を出たセンセイは、自分のいった言葉に酷く後悔していた。
負け犬という言葉は自分が自分の為だけに捧げるだけの罵声のはずだった。

「何言ってるんだよ俺は」

彼だけのためにある言葉の筈だった。言った後に走る悪寒と震えに、歪に浮かぶ笑っているような引きつった表情、それを隠そうと必死に口元を塞ぎ、自分に対して必死に幕を張って自己弁護を繰り返し始める。
聞きたいはずが無かった、妹の賞賛など誰からも聞きたくなかった。

それが尊敬し始めていた人々ならなおさらだ。塞がなくてはきっと、自分にとってさらに聞きたくない悪夢がつむがれるという確信を持ってしまった。

「でも聞きたくなかったんだよ。あいつの事なんて」

誰もいない通路で一人蹲り壁に背を預けながら泣く様に囁く、嫌われたくは無かった、だが嫌われてでも聞きたくなかった。

それを聞かされれば妹がさらに恐ろしくなる。
彼にとっては妹と言う存在は殺意の象徴であると同時に、恐怖の象徴なのだ。自分の心を侵食し犯しつくす理不尽の極み。

恐ろしくて当然だ、気付かぬうちに他人を心酔させるようなカリスマをもつ存在。まして見るだけでその魅力に勝手に囚われて行くなど、恐怖以外で騙る事が出来るだろうか。

自己の考えじゃない、ただ存在の魅力で食われる。
それに気付いても勝手に行われる、無意識の捕食行為など、考える事すら恐怖に成り代わりかねない。
彼女がそう言うものだと気付かされた時、それを崇拝するか拒絶するかはその人しだいではあるが、そんな人の心を食い散らかす存在に恐怖を抱くなというのもまた難しい話ではある。

彼は何度も妹に心を食われてきた、それに救われた理由というのは、単純に劣等感という存在が常に彼を崇拝側へとやる事を許さなかったのだ。一緒に過ごした時間で彼が妹に覚えた感情なんて、覚えたのは挫折と劣等感、そして疎外感に殺意ぐらいだろう。
光の部分すら全く見えない影の極み、対極であるならまだ救われた、だが全てが劣るそのざまでは、ただ光に焼き殺されるだけが顛末になる。

また光が一つ強くなって、また一つ感情の暗がりがあふれ出してくる。
その感情が、心臓から循環するように体中にぐるりと回る。ただ感情の穢れだけが、
どくんどくんと脈打ちながら、頭の先から足の先まで、じくじくと痒みを伴いながら侵食し始めていた。
その暗がりが割るように囁くのだ、彼女の言うように動けばいいのだと、そうすれば何も考えずに屈服する事が出来る、苦しむ必要は無いと、絶望を自分の頭から囁いてくれる。

「違うよな、それじゃあ何にも変わらない、変えられない」

必死にその事を否定して、重ね続けて、ようやく自分が保てる負け犬は、自己否定と肯定を繰り返し続ける事で、妹と自分という境界線上を歩いているに過ぎないのだろう。
まだ笑ったほうがましだと、必死にぎこちなくだが現状を笑おうと努力する。

「なりたいんだよ、なるしかないのに」

なりたいと、こんなに弱いままじゃ何も出来ないから、強くなりたいと呟く。
強気な態度は全て弱さの裏返し、自分を必死に強く見せようとするだけの負け犬の遠吠えと変わらない、今のままでは、そう今のままでは。
あれだけ痛めつけられれば少しは彼も成長するようで、蹲ってうじうじと感情を押し込めていたが、今回ばかりは切り替えようと剣をこの場で振る。もし見られてたら少し騒動になっただろうが、あたりには誰もいない、何よりそうやって弟子彼は心の切り替えが出来ない。

強くなる為にと、剣を振るっている内だけは必死になれる様にと、心の中にスイッチでも用意しているのだろうか、単純に負けるたびに繰り返してきた男の習慣過ぎないが、それでも抗おうという気をくれる。
呪いを引き千切るように、精神の呼吸を彼は整え、感覚を四方に手のように伸ばして、そこで悪寒が走った。
戦いの始まる前の事だ、剣を試した軍神の一振りは観客席ごと闘技場を切り裂いている。

そのラインに彼は居たというだけだが、彼と妹はどうにもこうに

も引き合うようだ、後一呼吸もすれば彼を両断するように襲う一太刀に、彼もまた剣を合わせ、睦み合う様に軌跡同士は絡み合う。

「まて、まてよ、なんだよそれ」

彼は理解もしていなかっただろう、ただ襲ってきた軌跡を受け止めるという当たり前の動作を行ったに過ぎない。同様はぼんやりと口から出ても仕方が無い事だ。

軍神の全力の一太刀、それを受け止める事が出来たのは偶然だ、しかもただの精神に対する切り替えの為にと行った精神集中が彼を救った。

二つの軌跡は鈍い音を響かせて、じんと痺れる手ごたえが波紋のように手に伝わる。

だがその軌跡は軍神が己の力を引き絞って降りぬいた、試しの一振り。その国すらなぎ払うとされた軍神が振りぬくそれは、その力を全て切断に重ねた力、それを武器も切り落とされる事無く切り裂いた衝撃は、剣を持っていた彼の毛細血管のことごとくを破裂させ、一瞬にして利き腕は真っ青に染まる。

ただ受け止めただけでも軍神の一撃はそうなる、国すらなぎ払う反則の力。それが受け止め、切り払ったところでどうなるものでもない。そこに残った軍神の軌跡は、形を変え力の塊となってあたりに四散する。

それが容易く先生の体を吹き飛ばし、壁に叩き付けようと唸って吹き荒れるが、痛む手を気にすることなく、地面に剣を突き刺し吹き飛ぶ事すらも彼は拒否して次の手を作り上げる。

だがその次はこない、ただ広げた感覚範囲を結界の様に広げ、次

の備えを完了させるが、それは無くただ彼の感覚を際限なく広げるだけの無駄な物となった。だがその緊張の生で忘れていた痛みがぶり返す頃、ようやく追撃はないものだと理解するが、そこで自分の様子を見て、痛みで体中が悲鳴を上げている事を理解した。
ただきり払っただけだというのに、腕は脱臼し、剣を握るだけで激痛が走る。荒くさめたい気が断続的に彼の口からこぼれ、痛みのあまり手を剣から離したくなるが、握った手が硬直した様に手を離さない。

どちらにしろ追撃がないことを理解した彼は、握ったままの剣を蹴り壁に突き刺すと、強引に肩をはめる、声を出せない痛みを理解しながら、最低限の戦闘行為が可能な状態まで自分を持ってくる。
そして響く歓声でようやく理解するのだ、あれは妹のものだと、あの存在が演出目的で振るった一太刀、それが偶然自分に襲いかかっただけ、そのピエロぶりに少しだけ彼は笑いそうになる、いや笑っていた。

「嘘だろ俺」

それは呆然もいえる言葉、激痛まみれの頭すらその痛みを消し去るほどの衝撃。
周りを見ればちょっとした惨劇だ、頑強なはずの大理石などで作られた闘技場は、その部分だけ嵐でも起きたように破滅している。
そんな中に立っていた彼は、感情さえ灯さず妹がいるであろう方向を見ていた。

その消えた無色の表情が、喜色によって彩られていく姿は、宵闇に光駆るテールライトの様な儚さがある。だが彼は笑っていた絶望に歪むそれよりも、なお遠いそれを見たからだろうか。
しかしその顔だけは少しだけ違っていた。

「受け止められたのかあいつの一撃を」

笑顔に成りながら驚愕を貼り付けたままの彼の言葉は、自身の成し遂げた事に対する驚きに過ぎなかった。

自分の成し遂げた行為に恐怖ら感じているのだろうか、足が震えて定まらないが、痛みを感じながらもさらに剣を握りこむ、痛みで頭が助けてくれとほざいていると言うのに、わずらわしいと感情を上塗りする。

「一度だって受け止められた事なんてないのに、ようやく、ようやく」

足ぐらいは掴んだのだろうと、彼は涙を流しそうに成っていた。

痛みよりも喜びが先に来る、嬉しくて仕方がない、自分が間違っていなかった事を教えられた、進んだ道がちゃんと結果を残してくれたのだ。

やっぱりこの道が間違っていなかったと、彼は喜ぶ、この道こそが自分の道で何の間違いもなかったのだと、少しだけ人生に報われた気がした。

このままでは勝てない証明がなされたと言うのに、それでも彼は嬉しかったのだ。

「随分と無様な格好じゃないか息子よ」

その喜びを土足で塗るのは覇王、彼の母親だ。

だが彼は一瞬目の前の存在が誰かわらかなかった。幼生転化の魔法を使った母親を実は見た事がないのだ。

子供を生む際はどうしても大人のほうが都合がいい、何より無用

な痛みを受ける必要もない。本来であればこれが母だというのに、大人の姿しか見た事がなかったのは、それ以降彼の前に母親が現れなかった事の証明だろう。

生まれ故郷では珍しい、真紅の髪が肩ぐらいまで伸びて、ビスクドールのような無機質な肌はカラス細工のような瞳とともに、生きてるのか一瞬疑問に思ってしまう

どこの生まれか見た目では想像がつかない幼い子供のような母親は、ぼろぼろな自分の姿を見て、楽しげに笑って見せた。

「だが素晴らしい、随分と成長したじゃないか。心のほうは残念な限りだが、素質はやはりあいつと私の息子だ、随分と高かったようだ」

「母様か、捨てた息子に何のようです」

「先程と随分口調が違うね、そうやって壁を作って、なるほどそれで無意識に心を保護してるのか」

私の呪いはいまだ健在のようだと嬉しそうに母は呟いた。

彼女の言った呪いは別に魔法ではない、それが魔女だけが仕える精神の操作、というよりは誘導だろうか、妹の才覚が分ると同時に行われた精神矯正によって、抗う牙を駆られは抜かれたのだ。

「呪い、なんですかそれは、僕はそんな」

楽しげに首を振って見せるのは、彼女が魔女と呼ばれる所以なのか。まるで手品の種明かしをするかのように、先程と同じ彼と表情を作り上げる。

人形と同じ様だと言うのに、流石親子なのだろう、その仕草のどこかに血の繋がりを嫌でも読み取ってしまう。

「覚えてるだろう、あの淫買に負けたときに、ちゃんと言ってあげただろう、もう二度とお前はあいつに勝てないって」

ただそれだけ呪いと言うには稚拙かもしれないが、幼い子供に刻んだその言葉は、彼の心の根底を覆すものだった。

頭痛がまるで警鐘のように鳴り響く、呪いと言ったそれは成長過程におけるトラウマに過ぎない、だがその後も敗北を刻まれ続けた彼にとってそれは、何よりも悲惨な呪いに他ならないのだ。

心を縛るだけで収まらず、体さえも縛り殺す。

「魔女の言葉は、それを少しばかり先導する、時にはいい方向に、時にはお前の様に、心に指向性を刻んで操る、これが魔女の呪いだよ」

それと今更向き合ったところで、刻まれた呪いがどうにか成るという物でもない。

心を操るのとそれはなんら代わりがない。吐き気をもよおし、顔色が一瞬で真っ青になる。

「呪いの確認のほかにもちょっとだけお願いがあってね」

聞きたくない言葉を最初に吐いておきながら随分と性格の悪い物言いだ。

剣聖さえやすやすと倒した存在に対して、この程度のことをしなければ逆に殺されかねないという彼女の判断だが、彼の目を見ても同じことが言えただろうか。

心が弱いのは、その呪いと言う言葉のせいでもあるだろう。だがその程度なら、彼は十年前に超越している。

呪いさえ振りきり妹を殺すべく最上の一振りを作り上げているのだ。
だがらこれはもっと後の事なのだ、だが彼女はそれを知らない、彼がこうなってしまった事の根幹の原因を、知らないからこそ呪いを信じて踏み込めた。

頭に反芻するのは全て過去、しかしそれは彼が殺した首の数に過ぎない。
今の先生と言う男を作り上げた過去はそこなのだ。それを侮辱した魔女に対して彼は、牙の様に成り立つ妹への殺意を母に向けつつあった。
それでも今何も出来ないのは、過去から自分は負け続ける運命をよりにも寄って家族全員から捧げられていたという事実だ。

自分はどこまで妹の供物だったのかという、絶望は彼にしかわからないだろう。
だがここで彼は剣を振る事を必死に耐えた、その理由はただ一つだ。この御前試合を台無しにしないため、彼が多分何の障害もなく妹を殺せる機会はここしかない。
未熟であろうとなんであろうと、ここ以外であれば彼女の盾になる者たちが大量に現れる。

彼らのいるところから少し離れた闘技場からは軍神の賛美歌が民衆によって紡がれている。この国における彼女の支持というのは格別どころじゃない、一つの宗教となっている。
たぶん彼女が死ねといえば笑って死ねるものたちばかり、そういう状況なのだ。ただ一度の機会、障害もなく彼女を殺せる最初で最後の機会、彼は逃すわけにはいかなかった。

血反吐の出るような感情を必死に絶えながら、聞くに堪えない雑

音に耳を貸すしかない。

「アイシャを抱いてあげて、あの子あなたが大好きなの」

だがそれで止まらなくなる。

何よりも不愉快な言葉を聞かされた、覇王はただ満面の笑みのまま息子の反応を待つ。断ると思っていないその言葉が、彼にとってはノイズよりも不愉快だった。

顔色がうせる、感情が消え失せる、枷が消え失せる、何もかもが消え失せて、彼は自分を止める全てを失い、動くしかなかった。

それから半刻、覇王と王道の戦いが始まろうとしていた。民衆達は先程の軍神の戦いに高揚しているようで、熱気は十二分だといってもいいだろう。

今か今かと、過去の最強たちの戦いを心待ちにしていた。それはきっと楽しい時間だっただろう、だがそれは一つの風によってねじ伏せられる。

ずりずりと王道が覇王を待っている時に音がした。

試合場もっと言うなら公爵夫人である彼女や軍神の為に誂えられた控え室から闘技場に向かうまでの通路から、何かをするような音が響いていた。

嗚咽のような声が響き続ける、その出口からはまるで死霊の悲鳴が響いているようにすら感じる。

流石は二世紀と半を生きる魔女というべきだろうかと、観客をただそれだけで黙らせた手腕は流石というべきものだったのだろう。王道はその異様さに感服すら感じていた、ただその音が近づくにつれて。

いやに粘着質な音が聞こえてくるのが、分ってくるようになった。

何よりも死霊の声が鮮明になっていくのだ、嫌でも声の意味が分ってしまう。

殺さないで、ごめんなさい、そんな声だ。

もうしないからと、何度も贖罪を請うというより、命を救って貰おうとあざとく生きる無様の極みのような声が、王道にはしっかりと届いていた。

それが幼子の声に聞こえたのは、きっと通路の反響が少しずつ消えて、鮮明になるたびそれはまだ小さな子供の声だということが嫌でも分る。

ではあの覇王は何をやっているのだと、彼女は事実を確認する前から己に与えられた剣に魔力を込めてしまう。

だが想像が現実を凌駕する事など有り得ない。

ゆっくりと通路から現れたのは、彼女が異端と罵った男で、随分と血塗れであったというだけだ。

その光景に場内は声を失った。

血塗れだからじゃない、呻き声が、子供の呻き声が響いていた。その男の手の先から、情下半身と腕を切り落とされて、そのまま引き摺られながらつれてこられた覇王が居た。

無造作に切り裂かれたのだろう、腸からはまだ消化も仕切っていない排泄物の異臭が立ち込める。

異臭を発するそれは、男の生殖器のようにだらんと萎えたまま地面に摺られている。

それが足といえばそうなるのかもしれないと、あまりの光景にそんな無駄な事を考えて、ただ恐怖を観察した。

人形のような少女は、眼球さえも貫かれて光すら見えていないだろう。鼻にいたっては削ぎ落とされ、真紅の髪は子供の悪戯の様に引き千切られている。自分の見た目にこだわっていた彼女としては

この上ない侮辱ではないだろうか。

腕にいたってはただ捩じ切りましたと、皮膚が腸詰の先の様に捻られ、血がそこからぽつぽつと垂れていた。ただ声からは救いの懇願が、呼吸をかすれさせながら響いている。

だが気にした様子もなく僅かに残った髪を持ち、随分と不細工になった人形の運搬を面倒くさがっているのだろう、あまり見た事のない不機嫌そうな顔をしている。

一体何が起きたのだと叫び声を上げたくなる、何で覇王がこうなっているのだと、幼いその姿に誰もが陰惨な地獄を見て、声を上げる事が出来ない。

「それあんたの対戦相手だから」

無機質に呟くと彼は面倒くさそうに、その達磨を王道の前に投げ捨てる。それで自分の仕事は終わったと、踵を帰して何事もなかったかのように通路の奥に消えていった。

そして彼が消えてからだ、民衆は恐慌を起こす。軍神をねじ伏せるように起きた惨劇に誰もが、正気で入られなかった、ここにいるのが王道ではなく軍神であるならきっとそれは堂にでもなっただろう。

だが彼女は軍神ではない、ただ起きた事態に愕然として、覇王を殺さないようにと新刊を呼び治療をさせる。ここまで殺されていても、死にはしない、だがこれは彼が魔女にかけた呪いだ。

次もこうすると、だから魔女の心は折られるだろう。

そしてセンセイは妹を除く家族を自らの手で殺してしまう。何よりこんな私闘が起きて、御前試合が続くのだろうかと、だが結局はこれは続いてしまうのだ。

これほど見栄えのいい悪が存在するだろうか、軍神に殺されるだけの都合のいい悪が、ただ彼女の供物となる為だけにこんな騒動を起こした男を王は許した。

この決勝の闘いは、センセイという男の処刑であると誰もが信じる。軍神はあれほどの悪魔を殺せると、民衆達は信じてその光景を心待ちにするだけだった。

兄妹の殺し合いを、この国の民衆は期待した、血の繋がった兄妹の殺し合いを彼らは期待して、期待して、期待したのだ。

十一章　一本足で立つ者（後書き）

副題思いつかなかったか適当だね。とは言っても魔女との闘いの部分がないのは、次の話のためだよ。ちゃんと書くから気にしないでください。

ちなみの次は覇王をメインとした描写になると思います。

十二章　繋がりと言う言葉の絶望

それは落雷と見紛う一振りだった、感情が纏わりついたそれは、ただの一振りでありながら地面を焼いているようにさえ見える。
おぞましい声が聞こえた、聞くに堪えないノイズが響いていた、その全てを一瞬で切り裂いた姿は、かつての子供の姿しか知らない魔女にはどう写っただろうか、あの軍神をしてよけられないと言わしめた、いや受ける事すら難しいと断言された男の一振りが、どれだけ痛烈だった。

軍神と彼は剣においても性格が違いすぎる、軍神は圧倒的な存在とそのまっとうな剣において他者を屈服させるが、彼は純粋に無駄がない、その武器の力を全て斬る事ベクトルで持っていく。
そんな一撃だからこそ、彼女が常に展開している、無意識系六層防御さえも切り裂く程鋭い一線であった。
ただ一瞬で起きたそれは、彼女の右肩口から左の横腹を一条の線が駆け抜けたという事実を、淫靡に切り裂かれた服から覗く、淡くは初雪のような肌に薄く浮かぶ赤い線において証明させる。

致命傷には程遠いが、その一撃で殺されかねないと確信する事の出来る一振り。
体中から彼女は汗を噴出したように、服に汗の染みを刻み、喉の水分さえも汗に盗られた様に声がうまく出せなかった。

「なにを……」
「お前は言いやがったんだ」

それだけでぞっとする声だ、誰にも聞かせた事のないような地の底で鳴動する溶岩のように赤黒く溶けた熱く重い声。覇王はそれだ

けで声を失った、失敗したと頭に声が反響する。

「俺に何を言いやがったんだよお前は」

完全に理性が飛んでいた、目は血走り獣の様な表情に、牙の変わりの剣はさらに食い付くような剣気を溢れ返させて獣臭の様に酷くそれが立ちこめ、吐き気のするような濃密な空気が流れる。

問題を起こすつもりは、彼には一切なかった、だが流石にあの暴言を耐え切れるほど彼は優しくない。何よりそれだけは、それだけは、いっては成らない言葉である。

普段なら温和極まりない彼だがこのとき、、この場所で紡がれたあの言葉を受け止めることなど出来はしない。

誰にだって言ってはいけない言葉がある、目の前の彼にとってそれが、今の類の発言だ。

妹の為に動けなどと彼が言われて動くわけがない。そんな事が出来るほど、彼は腹芸に富んでいる訳でもない、むしろ不器用すぎるぐらい不器用なのだ。

諦めて逃げればいい物をそれもしない、それどころか抗おうとして見せる、馬鹿ではないかと、最初にそんな言葉が浮かんでしまうぐらいには愚直である。

「何を言ったんだ今、お前」

だから、そういう言葉を紡いではいけないのだ。

彼は人の言葉を真っ直ぐと受け止めてしまう。良い事であれ、悪い事であれ、その顛末がこれだ、剣と言う分野において極みに立ってしまった男、その分野なら軍神すら上回るその男の逆鱗に触れてしまったのだ。

完璧と言う存在である軍神に背を追わせる男が、その武器を振るうのだ、ただ怒りの銃弾を込めて、なにより今の彼の剣に彼女は対抗できない事を理解させられる。魔法の構成よりも先に、間違いなく剣は襲ってくる、しかも容赦なく意識と意識の断続した間隙中に。

剣聖ですら行っていた事だ、それを上回る彼はさらにその上を行くに決まっている。

清浄の間隙に一撃を刷り込ませるぐらいの事はやってのけるに決まっているのだ。思考を操る魔法使いにおいて、そこまでの領域にたどり着いた剣士は、もはや天敵以外の何者でもない。

どうしても魔法使いは剣士より遅いのだ、そもそも魔法と言うのが学問である以上、闘いの方ではない、彼女のように戦場でも活躍できる魔法使いはそうはいない。殲滅力という点においてなら最強の一角にはなれるかもしれないが、本来はここに出ること事態が場違いと言っても過言ではない。

しかし覇王と呼ばれた彼女だ、剣聖レベルなら対処が可能であった。

だからこそ彼女は最強の一角と数えられたわけだが、今回ばかりはそうは行かない。相手はさらに上だ、さらに恐ろしいほど突き詰めてくるに決まっていた。

対処が出来る範疇じゃない、どう戦略を組み立てても、先の先をとられて斬り飛ばされるのに決まっていた。これは強さと言うよりは相性が悪すぎるのだ、他の剣士であればそれにさえ対処が可能だったのかもしれないが、どこまで行っても学問の徒である魔法に関わるものが、ただ闘争限りを尽くす場所において彼女は場違い極まりなかった。

しかしそれでも二世紀を超え生き抜き続けた魔女がそれをよしとする筈もない。

彼よりも長く闘争の場に居た女が、その程度の事を覆せないのであれば既に死んでいなくてはおかしい。逆境を覆す、それが英雄が英雄たる資質であるのだから、だから彼女とて奥の手を持つ。
魔女の中でも彼女しか使うことは出来ないだろう振動発動、彼女が感じる振動を構成と捕らえ、発動すると言うだけの技術だ。詠唱と言う存在が本来であれば必要な魔法だからこそ、声と言う振動を使って構成を編み上げ発動させる。
振動を声と捉えて魔法を使う術ではある、その辺にある振動を声と捉えるのだ、つまり構成さえ省ける彼女なりの無詠唱では及ばない、さらに次の段階の詠唱法。

「お前は俺に何を言ったんだ」

だが、だがそれを使ってもなおその剣士は彼女を上回るのだ。
常識外の構成で放たれた魔法は本来なら命を奪うことなんて容易かっただろう。しかしそれより先に、展開された魔法が発射される一瞬でその構成は断ち切られ、覇王の両足は水平に切り落とされた。
まるで達磨落としの様に、がくんと上半身が地面に落ちようとする自然現象を彼は許さぬと、覇王の腹に剣を突き立て壁に貼り付ける。

「答えろよ」
「――――――っ」
「答えてみろよ」

この男は本来であれば、尋常ではないのだ、心が折れていなければこの程度を容易く成し遂げる。
軍神であってもあの振動詠唱を阻む事は難しい、だがそれを彼は成し遂げるだけの技量がある。

「誰が誰を抱けって言いやがった」

背筋が震えた、覇王は甘く見すぎていた。呪いなんて物じゃない、息子に在るのは呪いじゃなくて、もっと別の何かだった。

心に刻んだそのようなもの既に踏み越えていた、ただ別のものに変わってしまった。本来ならば抱いてあげると言えたかもしれない、可愛い息子と今なら言えたかもしれない。

だが無理だ、これは無理だった。

彼には軍神しかないのだ、ある意味依存に近い、軍神だけに恐怖を感じ、殺意を抱き、彼女だけを呪う、そういうものに過ぎない。

彼に繋がっているのは常に死体ばかりだ、自分達がそう仕向けたからこそ彼はこうなってしまったのだ。

そんな軍神の為だけの悪意を練磨してきた存在に、あの言葉は失敗であり、自分のいった言葉のおろかさに、いや自分の呪いに対しての慢心振りに、彼女は後悔するしかなかった。

彼程度の実力では確かに軍神には及ばないだろう。しかし彼女程度を圧倒する実力を彼は備えているだけの事だ。

今まで見下したものにここまで容易く敗北させられた彼女の胸中はどういうものなのだろう。突き刺された貼り付けのそれは、笑っていた、笑うしかなかった。

「素晴らしい、すばらしい、素晴らしい」

気持ち悪く彼女は笑う、ここで自分が殺されるのを厭わぬ様に。

魔女の血が、魔女の血が、その流れる魔女の血統が、感動の笑いをこぼしてしまう。こんな事があるのかと彼女は笑うしかなかった。

「まさか、えへへへ、ここまで自分の目がふし穴だなんて、殺されても仕方がないかも知れない」

目を見開き自分を殺すべく荒れ狂った息子を見る。
その言葉を聞いて止まっているのだろう、先ほどまでの悪寒の走るような感情は一切ない。こんな所でお前は何を言うんだという疑問が顔中に張り付いているだけだ。
ある意味闘争においって最も彼が欠落していた部分だろう。精神と言う部分は、最も今の状態ではまともな構成も編めない為、緩やかに殺されるしかないのは、覇王も同じではある。

「極端の可能性、そんな物が生まれるなんて、死ねなくなる」
「黙れよ」
「素晴らしい息子、ああもどかしい、名前が思い出せない、なんて名前だ、素晴らしいのに」

嬉しかった彼女は息子を褒めた、名前も知らない息子を褒めた。
多分だが自分がつけた事も覚えていないだろう息子を、まるでいつくしむ母親のように笑って褒めた。
その所為で彼女は腕を捩じ切られるわけだが、頑張ったとポツリと呟いた母、その事を気にすることもなく二の腕を掴むと、握力のままにぐちゅんと回る。

「その程度なんだろう俺は昔から」
「っ――――あ、ぎぅ――――――いいい、あ、が」

それだけで腕の皮膚と筋肉が捩じ切れた、さらに腕を握りつぶすように力を込めるとそのまま関節をつなげている靭帯もろとも引き摺りだす。幼子の腕は彼の握力で、骨ごと握りつぶされたままそのあたりに投げ出される。

べちんと少しばかり間抜けな音が廊下に反響していたはずだが、覇王の押し潰した様な悲鳴が上回る、ぱくぱくと金魚のように何度も口を開閉作業の勤しみながら、舌を噛み切ったのか、酷く血が口から溢れている。

「げあ――――けっつ、ああぐ、ぎああ」

「そもそも俺もあんたの名前を覚えていないんだけどな」

そして次の腕が彼の手に捕まる、酷い痛みは彼女の頭を焼き、己に対しての感覚の果てを見るが、それはただしにかけていると言う証明で、白黒と視界が点滅しながら無機質な表情で、淡々と作業をこなす動作が突き刺さる。

地面に転がり、達磨のようになった彼女は、ゆっくりと自分の重みで切られて行く体に恐怖を感じ、喉の生きを飲み込み血の混じったせきをしながら、それでも耐え切れない衝動を嘔吐として吐き出す。

だがむしろここで死ねたほうが彼女にとっては良かったのではないだろうか。

人は痛みでどう在ろうと屈服する、たとえ歓喜に濡れていたとしても、人は痛みに耐えることは出来ない。

無意識に体を癒そうと自動蘇生の魔術が中途半端に彼女を癒そうとするから、その拷問は続く。

聞くだけならそれはきっと、執拗に行われる子供への殺戮だったのだろう。

「あ、っつああ、ぎぃぅ、あは、はっ、は、あん」

だがそれでも嬉しかった女は彼を見るのだ。
魔女とは、人の極点を望む者である。彼女らにとって人の限界はどこにあるのかと言うのが命題と言っても過言じゃない。
ましてその可能性である軍神、そしてもう一つの可能性が目の前にあるのだ、その両方が自分の腹から生まれたのだ。

自分の齢を二百五十を超えた魔女は、ようやく生まれた可能性に、狂喜していたのだ。痛みに屈服しながら、その喜びに体を打ち振るわせ、媚薬を嗅がされた少女のように股を濡らす。
この二人の交配の結果が見たかった、だからそれだけが彼女にとっては恐怖だったのだろう。

しかしその発言は随分と余裕があるというものだ

「見るなよ、今まで俺を見もしなかったんだから」

ただ熱いものが目の奥に入ってくる、痛みなど感じないただ暑さだけが、そして暗闇が彼女に振り落ちた。そして宵闇だけが彼女の恐怖を増やしてしまう、完成した傑作がもう見れないと言う苦痛が、魔女を発狂させるのだ。

「俺はもうあんたを見てないんだよ」

いやいやと、血の涙を溢れさせながら、正気さえ狂気に変わるような悲鳴を上げる。
彼の言葉は聞こえない、ただ夜の闇だけが魔女の心を苛む、このまま死ぬとしてもその一瞬まで自分の傑作が見たかったと、彼女はそれだけを願って、叶えられる訳もない。

辺りが血に染まり大理石の上を赤い血が川のように溢れだす。地

面にしみる事もなくただ広がり続けるそれは、人の致死量などとっくに上回っているとさえいえるのに、彼はその状態を俯瞰するだけ。
そして突き刺していた剣を抜き去ると完全に下半身を切り離す。
覇王には何も感じなかっただろう。彼女の自尊心を抉る為のものだったのだろうが所詮怒りに任せた行為だ、本人はその自覚もないだろう。

後は止めだと剣を振り上げるが、そこに来てようやく彼は理性を取り戻した。

「って、殺すと拙いんだった。馬鹿だな、僕って奴は」

そこまでして、冷静になったところで困ると言うものだが、面倒くさそうに彼は髪を掴むと、ぶちぶちと抜けていくのを楽しげに笑い、そのまま歩いていく。

「二度と言わせないぞ、こっちはなあいつを殺す為にここにいるんだよ」

それだけの為の人生なんだよと、吐き捨てるように母親に告げる。
その事にびくんと動揺する達磨は、必死に声を上げるが、舌を自分で噛み切っていっるのだ、まともに喋る事が出来る筈がない。
だから血の混じった生きが悲鳴のように響くだけ、うるさいと思いつつも彼は何もせずにぼんやりと歩くだけ。

「あいつとの間に子供か、冗談じゃない、冗談じゃない、全く戯言でももう少しはかつての息子に言う言葉があったんじゃないのか」」

それに関しては誰にも求めないけどと笑う。
もう彼はそこに居る達磨を母とは認めていない、存在を認めてい

ない、断じて認めるはずが無い。

「家族なんて居ないのに、と言うか家族だった人たちって、俺は全員殺してるじゃないか」

思い出したかように、その所業を忘れていたように、一篇たりとも忘れていない過去を振り返る。

彼に繋がっているのは全て死体だけだ。

生きている繋がりは殺す為だけ、彼は殺す事しか出来はしない。それ以外の機能が存在しない、人としては不完全そのものだ。

「ラーキスさん達はすごい優しかったんだけどな、メイニアなんて俺をお兄ちゃん行って慕ってくれてたっけ、ランズロックの牧場の夫婦は体が小さいからって牛乳を無理矢理飲ませてくれってたっけ」

そうやって一度振り返った過去、彼が住んでいた男爵家の日々。

だがそれを一笑に伏す、思い出すたびに笑うしかない、自分にはその資格など無いと言う事実を受け入れるしかなかった。

卑屈を突き詰めてなお足りなその表情は、険しく歪んだ己への罵倒だった。それを嘲る様に、自分自身の顛末を告げるように吐き捨てる。

「全員俺が殺したんだけどな」

そうやって大切な物ばかりを殺したのだ、いまさら生んでくれた母親や、父親に何の罪悪感を感じる必要があるのだろうか。

そして困った様に途方に暮れた様に彼は呟く、困った様に、困った様に、泣き出しそうに。

「それで次は誰を殺すんだろう、あいつの所為で」

十二章　繋がりと言う言葉の絶望（後書き）

ここのテーマは一方通行。もう少し描写を細かくしても良かったかも、というか最近キーボードがおかしい、新しいの買うかな。執筆に時間が掛かりすぎる。

十三章　軍神の証明

その光景を見ていなかった軍神は酷く驚いた様子であった。
母親が無頼の男に殺されかけたと言う。彼女とて母の実力は知っている、負けぬとは言わないが、それでも凡俗に負けるような人ではない。
一つ目の驚きはそれだった、そして二つ目の驚きが彼女を襲う、彼のことを知っている王から直接告げられた、犯人は兄であると、それ以前に彼は自分のした事を隠していない。
公衆の面前でそれを堂々と晒している、

歩いている途中に見られ、闘技場内まで母を投げ込む姿も、ただ見られていないのは、其の闘いのみだ、圧倒的に屈服させた剣の冴えだけを見られていないだけ。
だがただの人々に彼の剣を聞いて返る言葉など、早すぎて見せませんでしたか、ただ不用意に剣を振ったのが当たりましたぐらいの内容しか返ってくる事は無い。だが聞いたものによってそれは反応が変わるだろう。

剣を振るそれが不用意に振られて当たった。
なん冗談だとだれもが思うだけだ、その程度で覇王がこうなる筈が無い。何かしらの要因がある、だが何の要因だ。
それを理解しえるのは、多分ではあるが妹、神童、不敗、王道、無双、そして覇王ぐらいだろう生きているものであれば。

精神の間隙などと言う、奇妙奇天烈としか言いようの無いそんの間に剣を入れ込んでくるような非常識な使い手たちは、そしてそれに対処できる使い手はそれぐらいだ。

だが人によってその間隙を見切る目が違うのもまた事実、本来彼らクラスの使い手たちはその、間を操りながら戦う者なのだ。その目が優れていれば優れているほど、勝敗に影響してくるのは仕方の無い話だ。

断線する意識の隙をうかがい続ける、ただそれだけの事、だからこそ覇王達はそれに対して異常な警戒を見せる。

しかしだ犯人の男はそれに対して不用意に斬りかかった。

つまり意識していようが、何があろうが、その男はその間隙をさらに割断して、踏み込むその目と剣の妙、その段階にいたればもはやただ斬りかかるだけが絶命地点。

まともな思考をしていたら正気を失い様な感覚を綱渡りしているようなものだ。晒される相手などもっと地獄なのだろうが、そこまで人を突き詰めて、彼は軍神に勝てない、彼女はそれさえ上回る。

その事実を知っているからこそ、センセイは妹に怯えるのだ。

世界を分割するような精神の間隙を見出しても届かない、強くなればなるほど彼は、彼女に届かない事を教えられる

とは言うが、いまだだれも彼の剣を知らない。それを知るのは次の日の話であり、そのときですら彼は己の剣を見せられないだろう。

その時こそ、彼と言うメッキが剥がれる時だ。

ただいまは存在する軍神だ、彼女はまた背筋にいやな寒気を感じていた。忍び寄るこどくを否応無しに感じるのだろう、母は帰ってこないかもしれないと言う恐怖が浮かぶ、そしてもう父は帰って来ない。

孤独は当たり前のように彼女に忍び寄り始めた、一人の恐ろしさを知らないからこそ、彼女は孤独に対して耐性が無さ過ぎる。

彼女の回りにはいつも人がいる、だから喪失の恐ろしさを知らな

いのだ。まして身近なものたちの喪失を経験したのは、父が最初であったのだ。兄との別れは、一抹の寂しさも会ったが永遠の別れではなかった。

だがその別れは間違いなく、気付かぬうちに彼女を侵食し始めていた。

呪いは伝播する孤独は常に地獄の象徴だ、一人も関わるものが居ないのならば、人など生きていく価値はない。

何かに関わるからこそ人は人の価値を得る。その価値が無い者等は、ことごとくがその存在の馬脚を現し首を吊って行くだけだ。奇妙な果実は常に、その辺に転がるただそれだけ、その果実たちは、断絶と言う名の孤独の中で、区別され区分され消え失せる。

その果実の一つと成り果てつつあるのが彼女、完成されすぎた純粋無垢は、本来それこそが孤独だという事を周りの所為で気がつかない。彼女はそれに晒されているのだが、今まで感じた事すらない這いよる恐怖は、知らず知らずの内に彼女の喉を嗄らしてしまうほど、確実に至近に近づいていた。

分らないのだ、それがなんなのか、子供の時ふと感じる寝て起きた後、本当は自分がいる世界は変わっているんじゃないだろうか、もしかすると母と父はレンタルされた人々ではないだろうか、そんな自分と他者との隔絶を彼女は知らない。

自分のつながりが実はそうじゃないかと考えた時の絶望なんて知らないのだ。

人はそれだけで足がすくむほどの恐怖を感じる、だれにも彼に自分は嫌われているのではないだろうかと考える、そんな恐怖を知らない。

純粋無垢とはすなわち疑わない、そう感じない、額面どおりの感情を受け取る。

ただ父のいった言葉を受け止める、お前を守ると、お前に会いに来たと言う兄の言葉も、それで彼女の世界は回ってきた。
しかしそれは幻想に過ぎない、父も母も死ぬ、人は死んで当たり前だ、死なない人間を人は解剖する手段しか持ち合わせてなどいない。

死に対する孤独という絶望を彼女は知らなさ過ぎる、世界とは常につりあうようになっている。このまま人間が突き進めばいつはその宿業により絶滅する様に、世界がやがて破滅して消え失せるように、全てに終わりが来るという当たり前のことを彼女は理解するべきだった。
それを教えてやるものが必要だった、彼女を汚さないようにと黒さえ白に塗り固めた、穢れと言う穢れを全て白に塗り固めて、孤独という言葉を忘れさせた。
知らないのだ、襲い掛かる感情の薄暗い衝動が何か、孤独だ、喪失感だ、人間が絶対に忘れてはならない感情だ。

しかし彼女はその感情が何か分らず酷い焦燥感に駆られていた。
誰か助けてと、だがそれを埋められる者は、彼女の兄だけであり、同時に彼だけが彼女のを破滅を願っているのだ、その剣の先は彼女に向いたまま。
知らず知らずの内に軍神の心に深々と突き刺さる剣と成っていた。

流石は素晴らしき悪意の固まりか、間接的だというのに随分と卑劣な事が出来てしまったのだろう。
だがそれは自分に翻る刃でもあるのだ、ただ一人の軍神の感情が彼に集約していく、彼だけに執着していくようになる。腹に納まる温かさなど彼女は気づきもしないだろう、そして彼もまたそれを知らずに剣をぶつけ合うだろう。

さびしくて仕方が無い事に彼女は気付かない、ただ震えるように小さな体をさらに小さく縮こまらせる。
兄の犯した事が何を意味するか、母が帰ってくるのか、全部分らない事だが、何一つ彼女の為には動いていないが、本来はそう言う物なのだ。だが確信して言うべきであろう、もし彼女がこの孤独を乗り越える事が出来るなら。
センセイと言う男は、正気すらなくして怒り狂うだろう。
彼の孤独の全てを作り上げた女が、それを乗り越える事など彼は断じて、断じて認めるはずが無い。奪うことしかない人生を作り上げる原因となった彼女が、そうなってしまう事を許す筈が無い。
なにによりそうなったところで彼が勝てる様な彼女でもない。

「なんなんだろうこれ、何でお母様がこうなって、お兄様が原因なんだろう。何でなのかさっぱり分らないや」

そして彼女はそんな事を呟く。
はっきり言っておく、彼女の所為ではない、彼女が原因ではあるが彼女の所為では断じてない。
悪いのは全て兄であり、父であり、母なのだ。
何一つ彼女は悪くない、生まれ持った才能が人よりも優れていただけ、それを認めてそれ以外を捨てた父と母の所為だ、そして壊れた悪意だけの塊のようになった男の所為だ。

己のみを投げ出すようにソファーに座り、フリルのついた服がしわくちゃになっているが、見てくださいと願った兄は、彼女を見るどころか母を破壊していた。
うわ言の様に彼女に逃げなさいと告げる母、問いただそうと兄の部屋に向かうが、彼がいる訳もなかった。

先ほどの事で関係者に呼び出されていると考えれば妥当だが、それよりも先に逃げ出したのが正解だろう。

「誰か教えてよ、私じゃ分からない、寂しいな。こんな事初めてだし、何で寂しいんだろう、これが寂しいなんだよね、分らないや」

人が作り上げた純粋無垢は、途方に暮れていた、一体何が起きているのか分らないのだ。

それが恐くて、誰かに聞きたくても、だれも答えてくれない。だれも彼女を汚そうとしない、だから彼女の心は真っ白なまま。

だがそれが良い訳が無いのだ、この二人の兄妹は、どちらも誰かがいない。一人は殺して、一人は周りが消した。

こんな状況でも彼女は綺麗なままだ。純粋無垢なまま、だがそれだけだった。

どちらも誰かがいない、身を寄せる人だったり話し相手だったり、人が足り前に持つものが全て手の平からこぼれて行く。

彼らには当たり前が無い、その代わりに非常識が与えられた。

妹には全てが、兄にはその異常性を突き詰めたような剣の才覚が、しかしそれ以外が余りにも欠けている。

だからこそ彼らは壊れているのだ。世界に善性などというのは利益として写るだけの物、悪性など嫌われるだけがいい所、ただそこに利益があれば変わるだけ。

平行線を歩く二人は、何一つ与えられない、ただ連れ添う人がいない。周りに人がいない、自覚している兄と妹の差はいつか如実に現れるのだろうか。

「誰か教えてください、とても私は困っています。誰もいないので

無駄な抵抗です、えーと誰かに聞けば良いなら、と入ってもお母様が心配だから動けないしもう」

先に起きた惨劇のせいで、辺りは酷く混乱している。本来ならもう少し早く行われるはずだった神童と不敗の戦いもそうだ。

未だに始まっていない、周囲に迷惑をかける術には、とんと困らない兄ではあるが、思い出す度に少しだけ心がほっとした。考えなくてすむからだと彼女は気付いているだろうか、もうセンセイと言う存在は彼女の中で重要な位置を占めている。

それが母親の言うとおり魔女の血筋から来るものなのか、それとも剣士としての才覚なのか、愛情なのか、親愛なのか、全部を羅列してどれに当てはまるのだろうか。

けれど考えるだけでほっとした、自分はこの世界に一人だけじゃないと無意識に感じられたから、それだけが彼女にとって押し寄せる恐怖に対する対抗手段になっている。

「すごいなお兄様は、けどお兄様があんなことしたから私は、あれ……あれ、お兄様のせいだ全部、私がこうやって困ってるのも全部お兄様の所為だ。意地悪だな、お兄様は意地悪過ぎる、何であんな事したか分らないけど、意地悪ばかりだ」

そして振り返って見ると大体原因が自分の兄だと言う今更の事実に気付く。

父を殺したのも母をああしたのも、全部兄だったのだ。それに対して意地悪で済むような状況を既に超えているが、彼女はそう捕らえて憤慨していた。

昔はもっと優しかったのにと、色々苦労したのかなーと自分の知らない兄を思い浮かべてみるが、全く分らない。

兄の領地だった場所は滅んで見る影も無いという。一体なんでそんな事になったか彼女にはさっぱりだ、詳しい事は父が何一つ教えてくれなかった。ただ兄は死んだものだと思っていたぐらいだ、けれど生きていて彼女の前に現れた。

自分でさえも剣だけなら負けると断言できるただ一人として、だからこそ彼女の兄は彼女にとって特別になったのだろう。

「軌跡再現なんて使えるようになってずるいな本当に」

有り得ないと思っていた御伽噺に過ぎない、かつて剣の極みにいた達人が、かつての剣を再現し自分を練磨したというちょっとした御伽噺に出てくるだけの内容だ。しかしそれを兄は完成させた。

彼女には絶対出来ないと思っていた事を作り上げたのだ。

本来は過去の軌跡を再現して、自分の剣を見つめ直す為の技術とされている。練磨の為の達人の修行法といってもいい。それを攻撃として使うなどという荒業もそうだが、彼はあの技術をある実戦レベルまで既に鍛えている事。

本人も気付いていないだろう、何しろ御伽噺ではただの訓練の為の技術なのだから。

そもそも彼の技術は、御伽噺に師は剣を振ってもいないのに木を切り倒したと、その一文だけが到達点と呼ばれた軌跡再現が歴史に残されているだけ。

今の己の技術があって、精神の間隙にかつての剣を滑り込ませる。不意打ちとしてなら完了系といっても差し支えの無い技術だが、そのことに彼女は鼻を鳴らした。まるでそのことが誇らしいというように、恐怖を忘れて満面の笑みだ。

何よりちょっと自慢げでもある、独り言を楽しそうに笑いながら彼女は告げる。自分の目の前にいない兄に向けて。

「けど、私だって使えるようになったよお兄様。これで一緒だね」

絶対に聞きたくも無い言葉を紡いでいた。

十三章　軍神の証明（後書き）

軍神の非常識さその一ぐらい？
今まで主人公の強さばっかり見せてきたから、妹さんも見せないといけないなーと思いました。あげたら落とす、これが私の矜持です。

十四章　請え、されど価値は無し

闘技場より三刻ほど離れた川原で血塗れの体を水で流しながら、少しばかり息をつく。

やってしまったと、あとから湧き出す後悔に少しばかり顔が赤い。自分の心の弱さを反映するその行為に、なにより自分が何も乗り越えていない事に、じくじくと心が痛んだ。

川の水は、冬にも差し掛かりかけている為身を切るように冷たいが、それぐらいの水を浴びないと今は、意識さえ保ちたくないほどに体が重かった。

人を解体して殺そうとした精神の倦怠感がいまさら襲ってきて目蓋が重い。

体中が鮫の肌のように変わりながら、足の先から感覚を失うようにじんとした痺れが足からゆっくりと体に向けて侵食しているようだ。

吐く息がまだ白んでくる事もないというのに、川の冷たさは冬でも生ぬるいような、冷たさで、それだけで彼は眠気を覚まそうとしている。

「なんだよあの無様さは」

後悔ばかりだ、本来彼は嬲り殺し等しない。父ですらそうだった、ただ首を切り落とす、無用に苦しみを与える趣味などなかった。なにより無駄な殺戮をする心など持ち合わせていないはずだった。

ただだれよりも早く絶命させる、苦しみの暇も無く、ただ存在を草刈でもする様に首を刈り取る、感情を消して何よりも早く、ただそれだけを考えていたはずだった。

そういう剣でなければ苦しめてしまうと分っているから、斬られ

た者だから分るのだ。せめて苦しまないように殺す、それが彼の剣理の一つの筈だった。

そうあるはずだった。

だが違った、彼は気分のままに母親を殺戮しようとした。

許せなかったのもある、よりにもよってあんな事を言われるとは思っていなかった。今考えれば流石稀代の魔女ともいえたかもしれない。

「あれと関係をもてだって、ふざけるなよ、ふざけるな、なんで」

彼はそれを考えられなかった、悔しかった、何一つ敵わないどころか、やはり敵とすら見られていないのだあの妹からは、愛情しか抱かれていない事実。

こちらは全くと言って良いほどそんな物がないというのに、妹は、その程度しか抱いていないと言う、侮辱もきわまる言葉、挙句が子供だ。堪えられるはずがない、それだけは彼が堪えられるはずがなかった。

何をやっても何をしようと、妹は彼に対して親愛以外は向けないのだ。

悔しいと彼は涙を流す、だがそれが本当に涙なのかは見た目からは分らない。ただ水の冷たさに、涙も洗い流すようにもう一度水を被って、それさえごまかした。

「ああくそ、もう、ああ」

隠すしかない、水で流して感情で洗い流して、そうでなければ、そこを疲れて彼は崩れ落ちる。なによりこの場で立って歩けなくな

ると、自覚してしまう。
弱さが簡単に露呈する男は、母を投げ捨てた後逃げ出すようにここまで来た。自分が弱いと言う事は自覚していたが、その脆さがどうしても歯痒い。努力しても努力しても、簡単に露呈するその心は、努力でどうなるものなのだろうかと、その言葉に自分が否と否定を下す。

だが下したところで、その正反対だけが証明され続ける中で、一体どう足掻くつもりなのかと、追い詰めるように自分を問いただし、答えられない自分がいることに絶望する。

「分ってたけど、辛いなこれは、こればかりは」

どこに手を伸ばしてもどうにもならない事だけが分る。
何をしてもそうだ、何に足掻こうともこうなのだ。自分の致命的な弱さが、今ただ憎かった。あの母の言った呪いは、確かに食いちぎる事もできるかもしれない。
だが彼はそれ以上の呪いを抱えていた、振り返らぬと決めた過去を彼は見る。目をつぶって分る事など、転がる頭のない死体達ばかりに過ぎないというのに、他の記憶など、そうならない為だけに、悲鳴を上げながら彼に襲い掛かる人々と言うだけ。

つまり彼の記憶はそれ以上なくそれ以下もない。
思い出せばそれだけで体が震える、川の寒さすら理解できないほど、彼は恐怖としてそれを感じるだけだった。

「結局またそこに戻って、そこにしか戻れないんだな俺は」

俺と裏返してうずめた過去、自分の仕出かした事の重さに、何より妹が行った事の結末を見た自分の姿と向き合うしかない。

だが恐かった、信頼を信頼で返した者達の尽くを皆殺しにした、自分と言う人間の末路の部分。まだ彼が軌跡再現にすら芽生えていなかった頃の部分。

それこそが彼にかけられた呪いだ、彼が抱え続けて乗り越える事でしか、軍神に届く事のない呪いの始まりだ。

「忘れようとしてたんだけどなこれは、無理だよなやっぱり」

彼が思い出すのは、その過去ばかり。妹に負けた事じゃない、その過去が彼にとっての呪いなのだ。

この自分が弱いと言い張る男のそして、逃げられない宿業の塊。

これから未来一人の女性によって発見されるまで、誰にも知られないであろう惨劇の跡はそれを物語るが、それが遠い日の事であり彼しかそこで起きた事を知らない。

「頭が痛くなりそうだ、未だに思い出すたびおかしくなる。あれは結局どっちが悪かったんだ、あの時死ねばよかったのかそうじゃなかったのか、もう全部が分らない」

分るわけが無い、理解できるはずが無い。

それはいまさら問う事などに意味の無い話、自問自答を繰り返す事しか出来ない男が、どうにか抗おうとした結果に過ぎない。

彼にとってはそれだけの話なのだ、だがその結論を出す事が出来るはずも無く、もう一度水を体に浴びせて体ごと精神に活を入れる。

「このままでどうにかなるわけが無いのに、くそ、くそ」

何度も呟く言葉は己への叱咤だ。

不甲斐無いばかりじゃない、よりにも寄って自分が最も貴意するはずの殺人に対する嗜好を持ち始めているんじゃないかと言う焦燥

感。
何一つ成し遂げられない事に対する怒り、ごちゃ混ぜになってあふれ出すのは、やはり劣等感だろうか。
水面に浮かぶ自分の顔は無駄に醜く歪んでいる、それが川の流れの所為なのかもさっぱり分らずただ醜いとだけしか感情を抱けない。
歯噛みしたところでその表情は一層歪むばかりで、彼は水面をかき乱してそんな無様に自分の顔を消す。そうする事で少しだけほっとしたのか表情を和らげるが、また歪んで浮かぶ人家尾に恐怖すら抱いた。
地べたに這いずりながら太陽を望む敗者の顔だ。卑屈に卑怯を塗りたくり、下劣でそれを固めて、惨めを掘り込んだ異様な無様さ顔ににじみ出る無様な男の無様の証明。
自殺と言う甘美な誘いさせ感じさせてしまう、その表情にこみ上げてくる物をとめる手段さえ持たず、彼は吐き出してしまう。
「ごぶ、あ、げぇええ」
水面の自分の顔に、びちゃびちゃと白濁とした吐瀉物をぶちまけながら、加太で息をし始めている。呼吸も鈍い隙間風のように荒く、胃酸の臭気にもう一度吐き気をもよおし、辺りに巻き散らかす。
弱さの証明を自ら作り上げ続けるそれは、瞳いっぱいに涙をためながら、嗚咽のようにだが川の流れに流されるほど小さく呻いていた。
このままでいい筈が無いのにこれより先に進めない。
「諦めるなんてできないって言うのに、何でだよ、何で、何で、何

でだよ……」

分っている、踏み出さなくてはいけない事なんて。だが彼はそれが出来なかった、心にたまる膿のような感情が、呪いと言う彼の罪の形が、立った一歩だと言うのにそれを許してくれない。

歩いてくれと願っても、足が動かず、ただその場で涙を流しているだけ。

まるで足が地面に溶接されているような絶望感、いっそ足を切り落としてしまえばまだ歩けるかもしれないと思うほど、彼はその場に立ち止まって動けない。

「動かないなら死ねばいいのに、死ねば、死ねばいいんだよ。誰か助けて、誰でも良いんだ」

ああ無理だ、無理だ、絶対に無理だ。

自分の言葉を否定する、それだけは絶対に自分には許されないのだと、理解していたと言うのに口に出してしまう。

人を殺す最も悲惨なものの一つを味わいながら、誰一人差し伸べてくれるはずも無い手を望む、強くなりたいと願う心は所詮自分の弱さの裏返し、それも全て自覚しているからこそ彼は悪夢なのだ。

どれだけ自分を見つめなおしても、容易く人の性分など変わらない。

彼の足掻くその姿も同じだ、どれだけ足掻いても簡単に変えられるものではない。でなければ呪い等は生まれない。

そののろいが安いものではないのは当たり前だ、今までの人生を否定できるかと問われているようなもの、彼はそれを否定してはいけない人間であり、否定しないからこそ立っていられるのだ。

だが歩けない、そこまでは出来てもそれ以上が出来ない。

それと向き合い人生を否定しては彼ではなくなり、立つ事も出来なくなる。矛盾に矛盾を積み重ねる積み木の作業は、誰かの一押しでまた壊れてしまうだろう。
次に彼を壊すのは誰だろうか、神童か妹か、それとも違う誰かか、それとも未だに登場していない人々か、だがどちらにせよこれでは彼は神童との戦いすら危ういだろう。そんな事は分っていたが、それでも剣さえ振るわせないかも知れないと思うと身が竦む。

また自分が殺戮を行うんじゃないかと、そう考えたら剣すらもてない、素振りをしようと思うが今ですら鞘から剣を抜く事が出来ない。徹底的に壊された母親だったが、その代償もまた確かに効果的なものだっただろう。
確かにまた彼は壊れている、脆い心だ、その剣の切っ先が次に向けられるのが神童だと考えれば、鈍ってしまっても仕方ないのかもしれない。そして尊敬する存在に同じことを摺るのではないかと言う恐怖が彼を襲えば、簡単に壊れる程度の心の持ち主だ。

「はは、っはは、あは、ははっは」

精神のバランスが不安定になってゆく、これなら薬でも飲んで正気を失ったほうがまだ救われていたかもしれない。だがそれをするほどの余裕も金も彼には無かった、必死になって剣を振ろうと足掻いてみるが、もつことさえ出来ないまま彼は、醜く声を漏らし続けた。

どうして、どうして、

「俺ばかりこんな事になるんだ。何でうまく行かないんだ、いつもいつもいつも、いつもだ、なんでなんでだよ」

何で自分だけこんなに、悪い事なんて、悪い事なんて、

「してるよしてるさ、殺したよ、みんな殺したさ、あいつがあいつが、あいつが」

声が壊れる、怒り狂ったまま、悲鳴を上げ続ける。

何でこんな風に、何でこんな事に、いつもなぜこんな、こんな結果が訪れるんだと、全部あいつが悪いわけじゃないのも知っていると、悪いのは父と母であった事も彼は知っている。

それでも許せないのは妹だった、その逆恨みが悪いのかと彼は叫びたかった。

だがそれを逆恨みにしたくなかった。

絶対に彼はそれだけは出来なかった。

自分の全てを奪いつくしたあの妹が許せなかった。許せなくて、許せなくて、許したくなくて、けれど何も残っていなかった。いつか奪われるんじゃないかと、自分の心さえあの妹に奪われると、そんな恐怖が浮かび一生消えない。

自分が持っていた最後のプライドさえも彼女は奪い去ろうとする。妹に関われば関わるほど、彼は、彼のままではいられなくなるのだ。

「全部あいつが奪うからじゃないか、あいつが大好きな人だって、大切だった人達だって、全部奪うから、奪うから」

言い訳のように何度も叫ぶ、叫んで叫んで叫び続ける。

そうやってやけくその様にわめき散らして、全部妹の所為だと言い張って、どんな事が起きたとしても自分から起因した問題が、妹の所為でない事も分っているから、彼は心が壊れそうなのだ。

そして彼は剣をぬくこともなく軌跡再現を使った、剣すら握れない男は、それを必要としない技術を使ったのだ。だがそれに意味があるのかは分らない、それはかつてを再現する、己と向き合う術である。

だからこそ彼は向き合おうとして使ったのかもしれない。

「これはジェキス執事の首を刈った時のだった。これはメイニアの首を母親共々切ったときのだった、ははは」

向き合ってみれば、なんとも血塗れの軌跡の限りだろう。

その軌跡達はかつての罪の再現、彼が嫌うもう一つの意味でもあるのだ。自分が作り上げた罪たちを使ってさらに罪業を増やす。

そしてそれを思い出すと言う証明、だから彼は使いたくなかった、見たくも無い自分の過去だったから。だがその技術はかつてと向き合わせる、逃げられないようにがんじがらめに鎖で縛って目蓋を切り裂いて、瞬きすら許さないと。

見せられ続ける、心が壊れるのを彼は理解していただろう。

でもそれでも、彼は軌跡再現を使い続けた。抜けない剣を掴む為に、過去ではなく現在に踏み込む為に、そうやって足掻かなくては、もはや立ち上がり剣を振るうことすら出来ないほど、彼の心は弱っていたのだ。

ぎしりと歪(ひず)む心を、無理矢理彼は動かすしかなかった。

ろうそくの最後のように燃え尽きる一瞬の活力を保ちながら、いつ折れるとも知れない歩みを始める、それ以外彼が生きていく理由はもはや無いのだ。

川からゆっくりと出て、また闘技場に向かう。

吹き荒ぶ風が冷えた彼の体を凍えさせながら、自然現象すら攻撃

してくると自虐的な言葉を吐き、痛めつけられた心が少しだけ動く様になった事を感じていた。
悪態を吐ける程度にはマシになったのだと、そう思えたから少しだけ表情が柔ら無くなる。

「頑張ろう、せめてあの人との戦いだけは無様を見せる訳には行かないんだ」

どんな無様もいい、ただ神童との戦いだけは彼にとっては特別だった。
自分を認めてくれた人、たとえ妹に呪われようとも、彼にとってはライバルを殺した男を賞賛した人だ。ああなりたいと心から願った人物、神童との戦い。

自分に勝ったら自分を認めてやれといった人物、生きていて始めて憧れた人だ。
どこで折れても仕方の無い心だが、せめて、せめてと願う。せめてあの人と戦えれば、きっと妹の殺し合いの何かが繋がるはずだと。

彼は信じずには居られないのだ。

十四章　請え、されど価値は無し（後書き）

この作品は主人公と妹の温度差が以上に開いているところがウリの作品です。そうじゃないとこの作品の最後が微妙になるので。

外伝　現場

あの日に起きた惨劇の場所、かつての王都であり、四カ国同盟の中心地となった場所です。

今もなお彼らの戦いの後が色濃く残る場所、そう考えると少しだけ心が躍ります。あの当時王国最強たちが連綿と名を連ねながら、あまりの悲惨さゆえに、王国しに記される事すら反対された王都御前試合。

とは言ってもそれから三年後には滅びてしまうのですが、そんな最悪極まりない御前試合、そこで始めて剣神は姿を現しました。通説では復讐の為だそうです。

神童と呼ばれた剣士のライバルであった魔剣と呼ばれた剣士を殺す事によって、御前試合の権利を勝ち取ったそうです。彼を今まで調べてきて思うのですが、このとき彼が御前試合に現れたのは復讐と言うのは違うんじゃないかと、思うようになってきました。

あの男爵領にしてもそうですが、もしあれが彼がした事なら首を刈り取ると言う行為こそが、彼の慈悲なのではないかと、苦しませない為の優しさなんじゃないだろうかと思う様になってきたのです。

彼は殺す時に好んで首を切り落としていたと言われています。

そのために、どこかでは首切り剣士などと呼ばれていた事もあるそうです。ですが、もしです、あの頭蓋の葬送が彼の仕業であるとするなら、いくらなんでも少しばかり異常すぎます。

ただ絶命させる事を考え、一瞬で体の機能を抹消させ、抵抗の機能を奪いかつ、苦しみを最小限で押さえる。彼が彼なりに考えて出した結論としか私は思えなかったのです。

そんな彼が剣神と呼ばれる所以となった戦いの記述を思い出します。

それが神童と呼ばれたものとの闘い、そこで彼は始めて自分を人に見せたとされます。

剣神と呼ばれる前には、実は彼に異名なんてありませんでした。御前試合には敗残と書かれていますがそれは偽名ですし、随分と皮肉の聞いた冗談だと私は笑いそうになりました。

最もですが、彼の来歴を考えれば、意図的に隠されたものであったのかもしれないとも思いますし、かれはあの当時の国民全てに嫌われる凶事を、当たり前のように行い、闘技場を混乱に陥れています。

英雄の血統が家族に暴行と言うか、殺意を向けて惨殺しようとしたなんて醜聞伝えられるわけなので仕方がありません。彼は隠されるしかなかったのです。

きちんと残っている資料とその当時の話を聞く限りでは、あきれて笑いが出ると同時に違和感が立って仕方が無かったからです。彼は惨殺を好まない人だと思っていました、それをひっくり返されたのも驚きです。

しかし隠されたのも納得というしかありません。

なにしろ惨殺する気しか感じませんでした。それを聞いて当然のように目を剥いて私も驚きました。

母親の手足をもぎ取り目を抉り、綺麗な髪を引き千切り、それを背を刺す刃の前に投げ捨てたようです。

あれあの当時だと王道でしたか、彼女もまた彼の所為で人生を台

無しにされた人でしたが、こんな光景ばかり目の当りすれば、誠実な人も歪もうと言うものです。

国王殺しを成し遂げた英雄とされていますが、随分と歪んだ遍歴を辿った彼女もまた可愛そうな人なのでしょう。

そんな惨劇が起きた場所に私は向かいました。

今回は同盟のほうから許可を貰っているので、剣神の祭儀場と呼ばれるようになった、軍師と剣神の戦いの場に向かいましたが、ここで何が起きたか良く分りませんでした。ここもまた死体の山といって差し支えなかったでしょう。

あの当時の戦いの激しさが目に浮かぶ様です、闘技場は切り裂かれ、観客達もまたかなりの人が死んでしまいました、いっぱい人が死んだのです、その中には私の母もいました。

養父から聞かされたぐらいなので詳しくはわかりませんが、私の母は彼に殺されました、あの当時の惨劇から生き延びる事が出来た者達は観客には居なかったそうですから、当然と言えば当然の話ですが、今も私が彼を追っているのは、そういう事もあるのでしょう。

復讐なんてつもりもありません、何より誰も彼に勝つ事はできません。

そう考えれば困った話です、恨み言ぐらいなら言えるのでしょうかと、ここで命を失った母に問い質してみたい物ですが、どうにも否定されそうです。

彼にとっては、私の言葉なんて何の価値も持たないのでしょう。本質的にはあの日記の言葉がきっと彼の全てなのでしょう、あの最後の言葉が、その為に起きた犠牲は随分と大きなものです。

ですがそんな彼が一度だけその内情を吐露したのもここだったと

言う事です。
神童と呼ばれた剣士、私が思うに彼とは軍神と違って意味で似た物同士だったのでしょう。何より本来であれば間違いなく彼は、神童を殺すほどに呪っていたと言う地震があります。

御前試合の中でも名勝負中の名勝負とされる二腕の剣、この闘いが後の御前試合の命運を分けたとされます。
これは成功した彼と、成功する事が無かった彼の戦いです。

どれだけ彼を罵倒する言葉があったとしても、この戦いだけは誰もが彼らを賞賛しました。前日に吐き気をもよおす程の凄惨な光景を見せつけた彼に対して、人々は惜しみない賞賛を与えました。
それほどまでに凄まじい戦いだったのでしょう、そんな人間を賞賛できるとは私は思えないのに、彼はそれを行ったと言うのですから。

最も私は当時を知りませんし、それを知っている人もしみじみと凄かったとしか教えてくれません、きっとその言葉が全てなのでしょうが、それだけは見てみたかったと思います。
私は母はそれを見たのでしょうか、それとも見ていないのでしょうか、それさえ私は分りません。

私はかつての彼の日記をここに着てからよく読むようになりました、ここでも私の想像よりももっとひどい事が起きたのでしょう、ですが彼はここですら生きていました。誰にも認められない人生を歩いてきたはずの彼が、ここで賞賛を浴びたのです。
素晴らしい事だったでしょう、ですが彼がそう捉えたかは別の話です。不の感情には随分と敏感ですが、行為に関しては随分鈍感なような気がします。目を瞑ってもなんと言うか捻くれた子供と言うイメージでしか私は彼を見ていません。

必死な人だったと言う事と、随分と弱い人だったと言う事、そして誰よりも強かった人だと、そんな風に見た事も無い人を思い浮かべてちょっとだけ笑いそうになりました。
これじゃ駄目だと、彼の壊れた場所を思い出します。随分と牧歌的で、あそこに居たら彼はきっと幸せなままだったのかもしれません。そう考えると嫌でも表情は強張ってきたと思います、ですがあそこは地獄だったのです。

多分誰も見た事の無いような地獄だったのです、心が壊れても仕方の無いようなきっと地獄だったのでしょう。
全ての要因であるあの場所を知る人に話を聞きたいと私は思うようになりました。ですがあの当時彼を知っている人は全て死んでいます。

もし聞くなら本人なのでしょうが、どこにいるのかすらわかりませんし、そもそも生きているのかも良く分っていません。
ですが聞いてみたいものです、あの日あの時、どんな事が起きたのか、私は彼に会って聞きたくて仕方がありません。

あの時あなたは何故と。

外伝　現場（後書き）

二腕って書いてふたわって読みます。

十五章　羽ばたく片羽

先にこれを語るべきだろう、彼の望みは達成される事は無かった。

結論を述べればそういうことになるのだろう。たとえばその事についての謝罪が、いま目の前で行われているのだからどうしようもない。

「すまない」

そう土下座をしたのは神童だった。自分に活を入れて歩き出せるようになったと言うのに戻ってきた時、その目標の一人は彼に謝罪した。

それが一瞬何のことか分らなかったのは仕方が無いが、彼は嫌でもその言葉を理解し、彼は血の気が引いたように顔を青く変えて行った。

「なんだよ、なんだよそれ」

何よりもその神童の姿を見て理解するしかなかった。だからこそ彼は顔を青くさせたともいえるのだが、頭に入る情報が全て消え失せたように真っ白になる。

喉の奥が焼きついたように声すら出せなくなっていく。

「……っ」

だがその姿が彼を絶望に変えてしまった。

目の前までが白くなり、彼は一瞬立ったまま意識を失ったような

感覚に陥っていただろう。

彼が居なかった時間の間に、最後の神童と不敗の戦いは終わった。

その戦いもまた名勝負だったと言って過言ではないだろう、その闘いは彼らにとって誇るものであれ軽んじられるものではなかった。

その結果は起こるべくして起こったものなのだろう、真剣同士の殺し合い、その意味を彼らはここでようやく理解したのかもしれない。

不敗は死んだ、心臓に向けての一刺し、神童が操る時差剣戟による見事な一撃であったが、不敗の操った剣も見事の一言だっただろう。それを見切った神童が凄まじかったのだ、だがそれは完全とは行かなかった。

相打ち狙いで襲い掛かった死者の剣だ、自分が殺されても相手も殺すと言うそういう心構えの剣だ、生き延び次の相手を望む彼にはそこに心構えに対する据わりの差があったのかもしれない。

死者の一振りは彼の腕を命の代わりの切り取ったのだ。

命を取られなかっただけ儲け物と言うしかないが、剣士としてそれは致命傷以外の説明しようがない。

人間の腕はバランサーであり、片腕での剣術など、極めるにしても望外の時間が掛かる代物だ。最初は剣を振るうだけでも、剣の重さが相乗して、勢いを止められないまま横転する事は避けられない、片腕になると言うのは、それだけ剣士としては重い枷となる。

剣の威力は落ち、行き着く間もない斬撃など不可能に変わり、必然的に片腕だからこそ起こる剣の軌道の選択肢の減少、さらには精緻なる剣の扱いさえ出来なくなるだろう。相手の油断を誘えるかもしれない、だがそれは奇襲にしかならずこれから始まる試合には一

切無用ない技術だ。
つまる所、神童は彼との闘いを前に剣士として死んでしまったのだ。

これから元に戻るには時間が掛かりすぎる、彼が最も戦いたがった相手に手が届きながら彼はまともに戦う事すら許されないのだ。ましてやそれが利き腕なのだから、どう言う事か誰にでも分かる話だろう。

それは全盛期の力は出せないと言う証明行為だ。
かつての剣術はもう二度と戻らない、彼が積み上げた理合いの全てが消え失せたのだ。生涯の全てが消え失せる。
魔法で直せばいいと、そう思うもの居るだろうが、一度切り落とされた腕を接合したところで、神経の伝達などの誤差が生じ、酷い時には自分の腕でさえ感染症を起こし死亡する事の方が多い。

なにより日常生活にすら辛うじてと言うレベルまでしか回復する事は無い。そんな状況で剣を振る事が出来るかと考えてもらえれば、奇跡という証明行為を実行するだけの事になるのは仕方の無い話だろう。
例えばだ、彼が惨殺しようとした覇王は、魔法が使えなくなり、これらから先二度と歩く事が許されず、子を産む機能を失い、糞尿の始末すら出来なくなったと言えばわかりやすいだろうか。

ただ死なないだけでセンセイは十二分に母親と言う存在を壊している。
回復魔法が蔓延すれば死ぬ事すら許されなくなると言うわけには行かない。ただ殺されないだけで後遺症という名の地獄に悩まされることになる。

だからこそ神童はその場で土下座をしているのだ、実直すぎると言えばそうだが、もうお前と戦う事ができないと言っているのと同じだ。彼はそれが認めたくなかった、それだけを心の縋りのしていたのだ、それを奪われれば彼は本当に折れてしまう。
心を支える糸が、ぶつんぶつんと音を立てて切れているのが、嫌でもわかり彼は苦渋に歪んだ顔を止める事が出来なかった。

しかしそれは彼との戦いを心待ちにした神童とて同じ事、それどころか剣士としての命脈すら立たれた今では、こう土下座をさせていることすら本当は申し訳ないといえるが、一つだけ呟いたそんな状況で。

「どうすりゃいいんだよ」

神童にも聞こえないポツリとした声、どうしたらいいのかと悩むが、いくら彼でもわかるのだ、普通に戦えばもう神童との勝負は間違いなく自分が勝つと、確信ができていた。一朝一夕で片手の剣が極められるようなら、この世に剣士など必要ない。
今までの積み重ねが消えた剣士と、常態ですらその剣士を上回る実力を見せる彼では、あまりにも勝負が見えてしまう。

闘いにすらならない果し合いを、果し合いと呼ぶような事があるのだろうか。
だが神童は退くつもりの無い目で彼を見ていた。この無様を見せた自分を疾くと殺してみせよというような悲壮な決意がある。
彼はこの状況ですら負けを考えていない、その事に彼は怯えるしかなかった。

自分の無様を認めた上で、俺はまだ戦えると言い張るのだ。これが負けん気の強さと言うわけではない、彼らはここで分かれたとし

てもいつか殺しあう、早いか遅いかの問題なのだ。たとえ不敗に負けていたとしてもこの戦いは免れる事は無かっただろう。
憧れが目の前にいる、それは二人共々同じ事だ。同じく憧れたのだ、届かぬ目標を掲げ崩れながらも歩く男を、己の目標を奪ったものにすら尊敬を示す男を、しかし末路はこれだ。どちらも報われない。

悔しかっただろう、恨みすら抱いただろう、こんな状況を作り出した己の未熟を、神童はそれを今一心に心と体に刻み付けているのだろう。
己の凶事の全てをへし折って彼に頭を下げたのは、この状態の男と戦ってくれと言う事、それに気付いたセンセイは、相手を見誤った自分に酷く恥ずかしく思い目をそらしたくて仕方が無かったが、ここでその視線から目をそむけ酔うなんて考えを抱けるほど彼は、強くは無い。

「はっ、はは、不服は無いが」

沸き立つ心の歓喜が彼にもある感情の燻りに火を灯す。
それは復讐にも似た感情、彼が持ちえてそれしか行えなかったはずの何か、だがそれが熱を持ち声を上げていた。
彼はここまで相手に認められた事も求められた事も無い、そういう人生で、そういう歩みばかりだった、隣に立つものなど居ない、敵になるものすら居ない。

彼は始めて対等を得たのだ、だが足りない、誰でもいいほかの誰でもいい、彼は始めて憧れから一人を対等に見たのだ。自分と同じだと、同じラインに沿い、当たり前のようにぶつかり合わなくてはならない存在。
これをきっとライバルなんていうのだ、こいつには負けたくない

と思う相手、だが負けるならこいつ以外有り得ないと、そう、彼とだけは対等でありたかった。

「それにはちょっとばかり」

妹などには思わない感情、ぶつかり合うべき好敵手、尊敬が何時しか相対に変わりぶつかり合う、だがそれだけでは足りなかった。剣士の全てを失ったと言っていい利き腕の切断、これがある限り彼は同等足り得ない。

ふと彼は自分の利き手を見る、二つついた腕の一本だ。

「じゃまだなこれ」

なぜ自分の腕は二本あると不快な感情をあらわにする。これからの事なんて一切考えない打算的な感情であるが、彼にとってはそれが全てに変わりつつある。

目の前に神童と対等に戦いたいと言うそれだけ、そのために見た自分の腕が意味する事など一つしかないのに、それが彼の剣士のしての人生を破滅させる行為であるのは言うまでも無い。

たった一つ勝っている彼と妹の差を彼は破滅させようと、考えているだけの話だ。

彼の生涯の重みの大部分を占める剣、それを今捨て去ろうと、あまりにも邪魔そうに彼はその腕を見た。

その感情自体が実は異常な事だと気づく事も無いだろう。どこか存在情けに薄く笑いながら、彼は頷く。

「じゃあ明日の相対楽しみにしてきます」

その言葉が出てきたことに、目を丸くした。言わなくても分かっ

たと言う事もそうだが、明らかに今までのセンセイの姿じゃない。他差縋る物を見つけてひっしんに足掻くそれが、今その全てを捨てようと考えたのだ。

決意と言う重みは、気付かぬうちに固まり一層重いものに変わる。何よりどうせ今のままでは彼は、蜂の一刺しすらままならない。そういう打算があったのも確かだろう、だが今までの積み重ねを捨てる男の剣は、復讐を捨てるのと同義のはずだ。

「あ、ああ」

上ずるように伸びる事に土下座を止めて彼を射抜く目は、驚きが混じり、その後に沸く熱に表情がどうしても緩んでいるようだった。

「ああ、ああ、分ってるさ」

その言葉がゆっくりと体に滲み、全身に行き渡ると、神童は上ずったような声を出しながら、険しかった表情を緩めた。

楽しみにしてると笑いながらセンセイは告げると、神童に養生しろと言って部屋から追い出した。彼としてもやらなくてはならない事がある。そのことがなにかは神童には分らなかっただろう。

だがわかってしまえばきっと彼はそれを止めた。

腕を失った辛さを最も知る者だ当然の話であるが、そんな事をして勝てるのかと言ったのだろう、あの無慈悲の最強に、片腕だけで勝てるのかと。

「手ん棒の手詰まり、ついでにあいつを殺す事も終わるかもしれないか」

ひっひっひと笑う、自分がやけくそになっていることぐらいは分

るようだが、だが少しだけ楽しくも思えた。妹が頭から抜け落ちる、彼の決意はただ一つに集約しつつあった。
壊れかけた心を補填する行為なのかもしれない、ひび割れたそれの補修かもしれない。だが彼にとってはそれが全てなのだろう。

目の前のことにしか真剣になれない、真っ直ぐ向き合うと言うだけなら彼は完成品だ。
何しろそれだけしか出来ないのだから、だがその決意をしながら妹の事を忘れた彼は、最悪の決断を下していた。

「斬るかこの腕」

ただ一人の男との決着の為だけに、人類史上に残る剣聖は、ただ堕落への道をひた走り始めていた。
自室にこもり彼が最初に見たのは自分の剣、後悔をすすり続けた彼の全て。その全てが次に奪うのは彼の剣士としての時間だ。頑丈ではあるが余り切れ味がいいとは言えない剣ではあるが、それを今まで実力でどうにかしてきた。

しかし今までとは違う、何しろ腕を切り落とそうと言うのだ。
どこの剣の歴史にも自分の腕を切り落とす技術なんて存在しない。だからこそ彼は椅子と机に立てかけるようにして剣を置く。
机と椅子の段差がいい具合に、切りやすいように斜めに斬り易く置かれているが、その程度で腕が切り落とせるのなら苦労はいらない。

狙うのならば上腕骨と肩甲骨の間だが、それを切り落とすには少しばかりの恐怖と、動かなくなるからだが問題だろう。彼はそこまで準備してようやく、自分の腕を切り落とす恐怖を感じていた。
方の周りが熱くなり、じわじわと何かがうごめくような感覚が始

まり。切り落とす部分がやけに冷たく感じて、しびれ始めてきた。
今になって恐ろしさが沸いてくる、それを行うと言うだけなのに、そこから一歩も踏み出せなかった。それでも上着を脱いで彼は準備を結う栗とがだが始めるしかなかった、誰かにうなされるように、震えながら表情も蒼白でも。
己の口に猿轡を巻きつけ、腕を突き出し斜めに置かれた剣に血を吸わせる為に、腕を脱臼させ脇辺りにプツリと剣を添え皮膚を裂いて、用意を完了させた。

誰かに切り落としてもらえればよかったかもしれない。だが彼にはそれをしてくれる者ももいないだろう、だからこそ自分でそしてそのまま彼は引くように腕を切り裂いた。
肉までは一瞬で切れたが上腕骨に当たると随分と硬い感覚にとらわれ、それ以上の痛みが彼の動くを阻んだ。

そこから肩甲骨との境目に向けてその状態のまま左右に抉りながら、探り当てようとする。そのたび目の前が白くなって、ぎぃぎぃと彼の悲鳴が響いていた。
左へ右へ、時には後ろに戻してもう一回、ようやく見つけたところで既にもう彼は限界だった。

「ぎ、ぎぃ……あ、ぐい、ははぁぁ、ぐ」

荒く響く呼吸骨にあたるたびに響く痛みが、さらには失いすぎた血の所為で周りは白んで見え始める。
そしてようやく見つけた骨の継ぎ目、そこでさらに骨は彼の剣の行く手を阻んでいた。
普段の彼なら一瞬で切り裂けただろう腕にここまでの無様を広げて、体を揺すりながら、骨を削ってて関節に剣を入れた彼は、テコ

の原理でそれ無理矢理に傷口を広げて周りの筋肉を切り裂きながらさらに腕を切りやすいようにとする。

「えじ、あ、は――――――ぁっあ」

肉がプチプチと裂けながら、人が腕を動かすには少しばかり上な光景が浮かんでいた、半ばを超えたたその腕は、刃に支えられて鳥の骨格のように羽を広げていた。

「あ、げ――――あ、ぐ、いぃ、あ」

そして動くたびに羽ばたきを重ねるが、飛び出す事すら許されず。ばたつかせるだけの無駄な羽だ、まして片羽で飛ぶ事など適わないだろう。彼に地を這う姿が似合う。

痛みに耐えながら必死に体を痛めつけていた彼の猿轡が地面に落ち、舌を噛み切りそうな状況に陥るが、気にする事すら出来ずに体を揺すりながら剣を深く深くと斬り進め続ける。

「いぃっぃ、あ、ぎぇぃぃあが、げっぃ」

そうやって、ばさりばさりと羽を動かす様は、ゆっくりと力を失い、力尽きて羽は落ちた。

飛ぶ事すらできない片羽は、無用なものだと地面に転がり落ちる。ようやく飛ぶ事を止めた羽は血塗れになった床に転がったまま、無用な赤を刻み、彼はそれが自分の腕かもわからなかった。

「は、はっは、ああぅ、ぐう、あっっが」

そして彼の今までの剣はここで結末を迎えた。

軌跡再現という剣の頂点にまで達した男はここでその全てを失っ

たのだ。存在したはずの剣の絶技、生涯を通じてて達成した剣士たちの悲願を自分の手によって切り落とした。
魔法による蘇生が始まりながら、剣に捧げた剣の全てが消え失せる。ただ残した魔力を彼は再生に使っただけ、二度と戻らない腕の幻視痛を感じながら、深く一度目を閉じて、過去の剣を再現した。

「はっはっは、はああ、は、ははあ、はあ」

始まりの一振り、勝利の一振り、敗北の一振り、最後の一振り、それが全て終わってしまった。過去の剣を見ながら決別を彼は迎えつつあった、困ったような笑い方をしている、少しだけ捨てた事によって心が強くなったのだろうか。

「はっ、はは、あいつ殺すのどうしよう」

極限まで弱く変わった男は、弱いまま笑うしかなかった。
だが歩けるような気がした、少しでもいいから前へと進めた気がした。何一つも持たない彼は、血が止まり不恰好になりながら上着を着なおす。
いままであったものが無い所為で、服を着るすら苦労しているが、まだ笑えていた、笑えていたのだ。

体の重りでも取れたように、沈んでいたいつも彼の表情はそこには無かった。

「どうしよう、ああ困った、困ったなぁ」

弱く弱く、ただ弱く、盲目的なまでに弱く、彼は笑っていた。
血塗れの体に困りながら、片腕となった剣士は、血が足りなくてふらふらしていたが歩いていけた。

「頑張ろう、まだ時間はある。まだまだ時間はあるんだ」

少しだけ前向きに、彼は少しだけ歩みを進めていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8515x/

略　妹様へ

2011年12月11日17時09分発行